Z32-B88

大正十年十二月五日印刷納本
大正十年十二月一日發行

修監　馬生島友　村藤崎島

船の金

十二月號

国立国会
8. 3. 26
図書館

巻參拾
號弐七拾

株式會社
博文館
印刷所

◎西條八十先生新著　岡本歸一先生裝幀挿畫

發賣

童話集

不思議な窓

四六版箱入天金布製
三色版寫眞石版畫入
定價金一圓八十錢
送料金十二錢

▼日本一の金の船愛讀者にして東洋の第一人者として名聲高き西條先生の童話集を未だ讀まざる者ありや、本書は傑作中の傑作童話のみを收めて一卷となしたるもの也

▼純藝術的童話の創作として美事に完成されたるは本書有るのみ

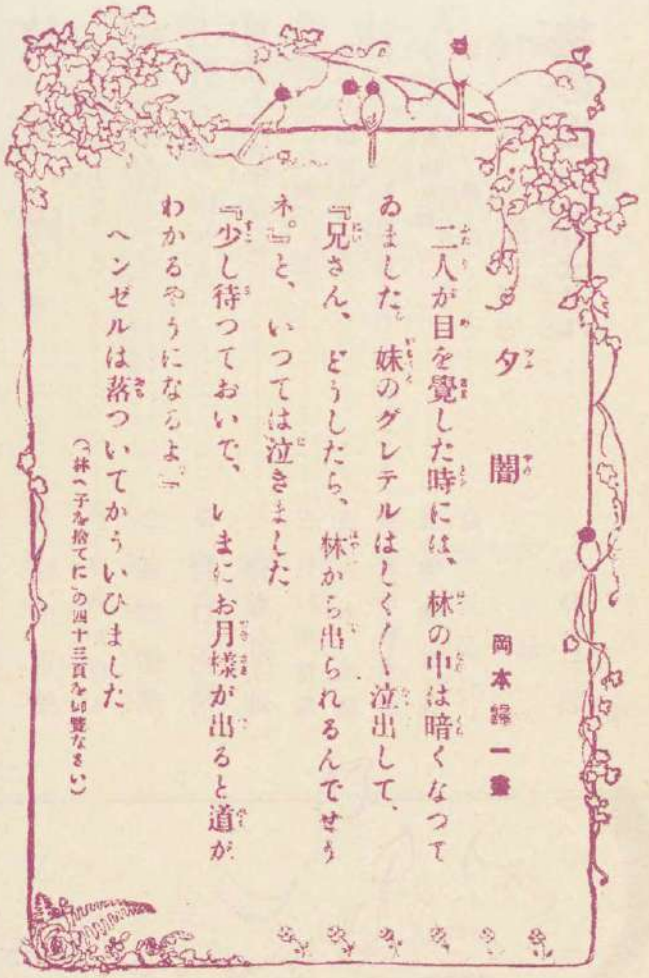
西條八十先生著詩集　靜かなる眉　第二版　定價九十錢　送料六錢
水谷まさる先生著詩集　寶石の夢　第九版　定價九十錢　送料六錢
野口雨情先生著詩集　別後　第五版　定價九十錢　送料六錢
竹久夢二先生著詩集　青い小徑　第四版　定價九十錢　送料六錢
人見東明先生著詩集　愛のゆくへ　新版　定價九十錢　送料六錢
以上五編は日々註文多きに上り空前の賣行を示せり

文部省認定
童謠集　十五夜お月さん
野口雨情先生著
本居長世先生曲
岡本歸一先生畫
好評五版

東京南神田区　尚文堂發行　振替貯金東京四九参壹

目次

樂しいXマス（表紙、原色版）……岡本歸一
夕闇（口繪、三色版）……
青い眼の人形（曲譜、童謡）……一……本居長世　野口雨情
お八八杯（童話）……四……沖野岩三郎
鏡國めぐり（長篇童話）……一〇……西條八十
をとゝひおいで（流ばなし）……一八……岡本歸一
狐のお化け（童話）……二三……齋藤佐次郎
罪なき娘を探ねに（童話）……二六……馬場孤蝶
迷の森のメクラ（童話）……三五……小澤尊子
母子の乞食（抑揚童話）……三五……伊藤一雄
汽車の窓から（童話）……四〇……内藤豐雄
林へ子を捨てに（童話）……四二……宅房子
逃げた豚（ポンチ畫）……四八……船橋重一
梵天國（童話）……五二……楠山正雄
シャボン玉（推薦童話）……六一……津路かほる
紅い菱の實（傳説）……六二……藤澤衛彦
上野のお山（童謡）……六四……野口雨情
勇敢な少年（童話）……六六……齋藤佐次郎
雁の歌（童謡）……七二……野口雨情選
床の間の置物（自由畫）……七二……山本鼎選
く（幼年詩）……七六……若山牧水選
今年の夏休み（綴方）……七六……編輯部選
通信……八四
（附錄）
後の山六爺さん……沖野岩三郎



夕闇

岡本譯一畫

二人が目を覺した時には、林の中は暗くなつてゐました。妹のグレテルはしく〳〵泣出して、

『兄さん、どうしたら、林から出られるんでせうネ。』と、いつては泣きました

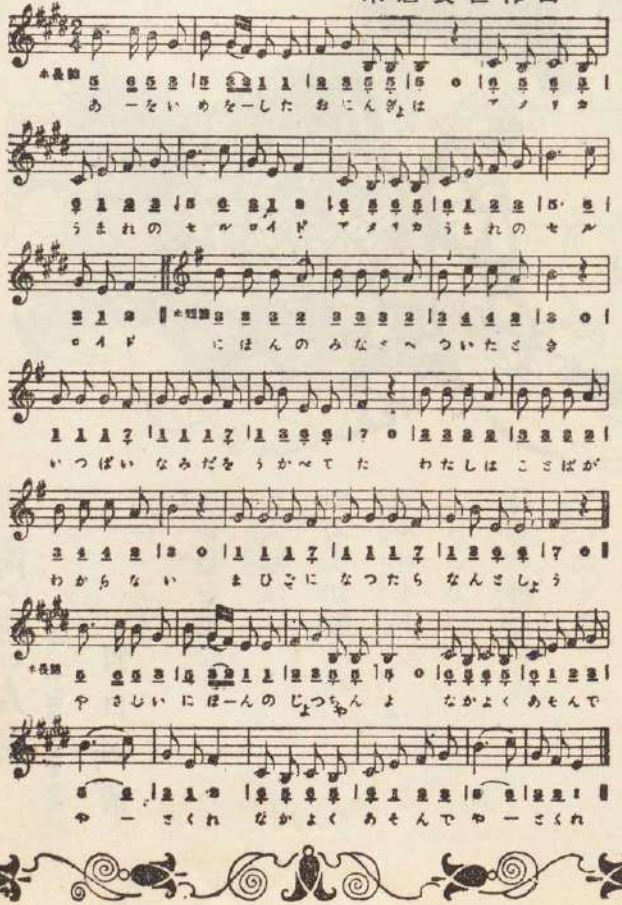
『少し待つておいで、いまにお月樣が出ると道がわかるやうになるよ。』

ヘンゼルは落ついてかういひました

（林へ「子を捨てに」の四十三頁をご覧なさい）

青い目の人形

本居長世作曲



青い目の人形

（「金の船」藝術唱歌その二）

野口雨情

青い目をした
お人形は
アメリカ生れの
セルロイト
日本の港へ
ついたとき
一杯涙を

うかべてた
「わたしは言葉が
わからない
迷ひ子になつたら
なんとせう」
やさしい日本の
嬢ちやんよ
仲よく遊んで
遣つとくれ

お八八杯

沖野岩三郎

むかし、紀伊の山奥に初太夫といふ節儉な男がありました。父も母も亡くなつて、自分一人で毎日一生懸命に働いてお金を貯める事を樂みにしてゐました。

或時、初太夫はかういふ事を考へました。

『私はたつた一人で、朝早く起きて、顏を洗つて、お米を洗つて、御飯を炊いて、それから働きに出て、夜遅く疲れて歸つて、またお茶を沸かして御飯を食べる。それは如何にも面倒臭い事だ。だから何所かから、よく働くお嫁さんを一人迎へて、そのお嫁さんに御飯を炊いて貰つたり、お掃除をして貰つたりしませう。さうすると私はよほど樂になる。』

早速お隣りの長左衞門さんの所へ行つて、その事を相談しますと、長左衞門爺さんは手を拍つて『それはいい事だ』と贊成しましたが、暫く考へてゐて、

『初太夫さん、あなたは本當に節儉でよく働く感心なお方だが、お嫁さんを貰へば、そのお嫁さんは御飯を食べますぞ。』と申しました。それを聞い

た初太夫は、大層吃驚したやうに、

『さうですネ、お嫁さんを貰へば、そのお嫁さんも御飯を食べる。さうすると、今まで毎日九合づゝ私一人で食べてゐたお米が、二九一升八合要りますねそれは大變だ！』

と、顏色を蒼くして申しました。

長左衞門爺さんはまた暫くの間考へてゐて、

初太夫さん、あなたがお嫁さんを貰へば、そのお嫁さんは御飯ばかりでなく、副食も食べますよ。』と申しました。

『さうですネ、私は今まで毎日三度の御飯に鯖を三尾食べましたが、お嫁さんが來れば毎日鯖が二三六尾いるのですネ。』と云つて、初太夫は心配さうな顏をしてゐました。

そこで長左衞門爺さんは、一大發見をしたやうに、

『では初太夫さん、あなたは、御飯も副食も食べない、そして力の強いよく働く人を、お嫁さんに貰ひなさい。』と申しました。

『それは大發明です。そんなお嫁さんが來てくれゝば、私の家はます〳〵金持になるばかりだ。』と云つて、初太夫は大層喜びました。

そこで、長左衞門爺さんと初太夫と二人は伴れ立つて、村の寺子屋の先生の所へ行つて、そんなお嫁さんを貰ふ廣告を紙へ書いて下さいと頼みました。

寺子屋の先生は、多分二人共狂人だらうと思つたので、すぐ

長左衞門爺さんの、お隣りの初太夫さんは、お嫁さんをほしいと申します。

御飯を食べないで、副食を食べないで、力が強くて、お仕事を好きなお嫁さんをほしいと申します。

と、書いてあげました。で、初太夫はすぐそれを長左衞門爺さんの家の戸袋へはりつけて置きました。

すると、四五日たつた夕方でした。初太夫は畑から歸つて來て、表の戸をごろ〳〵と開けると、顏へべたりと引かゝつたものがありました。何だらう？

と思つて右の掌でなでて見ますと、それは蜘蛛の巣でした。

『女郎蜘蛛が、こんな所へ巣をしやがつて……』と云つて、ぶつ〳〵言ひながら家の中へ入つて見ますと、まア何といふ事でせう、臺所の上り口に、見知らぬ若い娘さんが腰をかけてゐるぢやありませんか初太夫は吃驚して、一歩二歩後の方へ身體を退きながら、

『あなたは何誰です？』と問ひました。すると若い娘は恥かしさうに、

『私はお八と申す者で、あなたのお嫁さんでございます。』と言ひました。

『え？　あなたは、お八さんといふ、私のお嫁さんですか。では御飯も副食も食べないで、力が強くてよく働きますか。』と周章てゝ問ひました。

『えエ、私は何にも食べません。そして力は滅法強うございます。』と云つて、お八はまた恥かしさうに俯向きました。

初太夫は早速長左衛門爺さんの所へ走つて行つてお八のことを相談しますと、長左衛門爺さんも大喜びで、たうとうお八を初太夫のお嫁さんに貰ふことにしました。

本當にお八は、御飯を食べませんでした。副食も食べませんでした。そして力が無茶苦茶に強くつて普通の人の三倍も五倍もよく働きました。

初太夫は大層喜びました。そして會ふ人毎に、

『おい、俺の家のお嫁さんは、何にも食べないが、それでも力が強くつて、よく働くぞ。』と言つて、自慢をしてゐました。

ところが或日の事、お八がたつた一人、ひよつこり田圃から歸つて來たので、お隣りの長左衛門爺さんは、そうつと裏の戸口の所へ行つて、節穴から中を覗いてみると、お八は御飯を食べないどころか、大きなお茶碗に山盛りにしたのを八杯食べました。

それから大きな鯖を七つも、むしや〳〵食べました。

長左衛門爺さんは吃驚してどん〳〵と畑へ走つて行つて初太夫にその事を話しました

『さては俺を欺して内證で御飯を食べてゐたんだなア。』と思つた初太夫は、夕方家へ行つたら、直ぐ爺さんから聞いた事を素破抜いてやらうと意氣込んでゐました。

やがて日も暮れ初めました。烏がかあ〳〵と森の上で鳴いてゐる頃、初太夫は鍬を肩げて家へ歸つて見ると、お八はお風呂を立てゝ待つてゐました。

『初太夫さん、すぐお風呂へお入りなさいまし。』と云つて、お八が丁寧に叩頭をしました。その言葉が餘まり可愛らしかつたので、初太夫は、御飯のことを言ひ出しかねて、そのまゝお風呂に入りました。

『お加減は如何でございます？。』と言つてお八が風

呂場の入口へ來た時、初太夫は何食はぬ顔で、

お八……八杯……さば七つ……

と、聲を張り上げて歌を歌ひました。するとお八は美しい聲で、

どこで……見たかや……はづかしや……

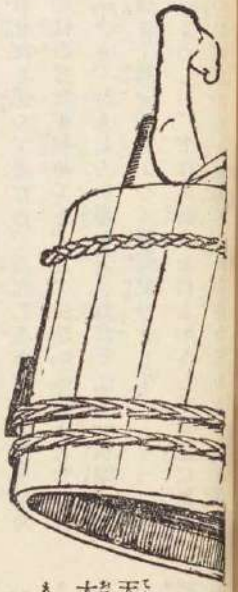
と歌つたと思ふと、その白い兩の腕を、ぐッと前の方に突出して、突如にその風呂桶を引掴んで表の庭へ提げて行きました。

大變だ！と思つた初太夫は、大周章てに周章てゝ桶の外へ飛出さうとしたが、もうその時桶は、お八の頭の上に戴ッかッてゐました。

『助けてくれ……』

と呼んでも叫んでも、駄目でした。お八は初太夫の入つてゐる風呂桶を頭に載せたまゝ、其のまゝずんずんと山の方へ走つて行きました。

風呂桶の縁に兩手をかけて、桶の外へ飛び出さうとして構へてゐた初太夫は、ふと氣が



付いて、上の方を見ますと、大きな椎の樹の一の枝が、丁度頭の上に横になつてゐたので、手早くその枝に兩手をかけて、ぶらりとぶら下りました。

お八は初太夫が、風呂桶から抜け出した事を知らないで、どん〳〵と山を五六十町も奥の方へ走つて行つて、頭の上から桶を取卸して見ると、中には生溫い水が入つてゐるばかりで、初太夫の影も形も見えませんでした。

椎の樹の枝から飛び下りた初太夫は、一生懸命に家へ逃げ歸つて、びしやり！と戸を閉め切つて、ぶる〳〵と顫へながら圍爐裏の側に坐つてゐたが、あんまり寒くなつたので、ようく乾いた枯柴を爐の中に投げこんでそれに火を點けました。

ばあーッ！と柴に火が燃えついた時、初太夫は天井から吊してある自在鉤を見上げると、其所には大きな眼玉を光らして、ぢッと初太夫を睨んでゐるものがありました。

初太夫は吃驚して起ち上りざま、傍にあつた箒でそのお化を打くと、お化　蹙んに燃えてゐる火の中へ眞逆樣に落ち込みました。

その時初太夫は、爐の中を見ると、其所には一疋の大きな女郎蜘蛛が長い足を伸ばしたり縮めたりして火の中で藻掻いてゐましたが、見る〳〵燒け死んで眞白い灰になつてしまひました。

このことがあつてから紀州の山奥では、夜の蜘蛛は、お化だと云つて皆なに嫌がられることになりました。

それは女郎蜘蛛がお八といふ女に化けて來たのだと信じてゐるからであります。

（をはり）

鏡國めぐり（長篇童話）

西條八十

廿一、切れないカステラ

あやちやんは一角獸が、その恐ろしい姿に似合はず、さも氣味わるさうに自分に口をきくのでをかしくてたまらなくなりました。そこで、負けずに、

『あたしだつて、一角獸なんてお話の本にだけあるお化だと想つてゐたわ。あたし生きてゐるのを見たのはあなたが初めてよ。』と、云ひかへしました。

『ウム、おもしろい事を云ふ奴だぞ。』と一角獸は機嫌よく肩をゆすぶつて豪傑笑ひをして、

『よろしい。ではお前もおれもかうしてお互に見合つたのだから、お前がおれの生きてゐることを信じさへすれば、おれも今日からお前の居ることを信じてやる。な、それでちやうどふいこになるだらう。』

『えゝ、どうぞ。』と、あやちやんがおとなしく頭をさげました。

『ところでお爺さん、カステラを出してくんな。だいぶ腹が空いてきたから。』と、一角獸は今度は王樣の方をふり向いて云ひました。

『ハイ、ハイ』と王樣はすなほに返事をして、早速お使者のコラを手招ぎしました。さうして、小さな聲で、

『袋を開けろ！　それで無い方だよ。――それには枯草が一ぱい入つてゐる。』と指揮しました。

コラは袋の中から大きなカステラを取出し、それをあやちやんにわたしました。それから次にお皿とナイフとを出しました。首にかけた小さな袋の中からどうしてそんな大きな物が出たか、あやちやんにはまるで見當がつきませんでした。「これはキット手品を使つたのにちがひない。」とあやちやんはその時思ひました。

そのうちに、向の方から獅子がノソ〳〵やつて來ました。ひどくくたびれて眠さうな樣子で、眼を半分つぶつてゐました。

何だな、これは？』と、あやちやんを見るなり、獅子はねむさうに瞬きをしながら云ひました。その聲と云つたらまるで洞穴の中で大きな鐘でも鳴らすやうでした。

『さあ、何だらうて？』と、一角獸は意地わるさうに云つて、

『君にはとてもわかるまいよ。おれにもわからなかつたのだからな。』

獅子はあやちやんを慄ささうに、ぢつと眺めて、

『いつたいおまへは、動物か――植物か、それとも鑛物か？』と訊きました。よつぽどねむいと見えて一言々々のきれめに大あくびをしました。

『なあに、これは昔噺の化物だよ！』と、あやちやんがまだ返事をしない間に、一角獸がどなりました。

『ぢやあ貴樣そのカステラを切つて皆に廻せ、おい、化物！』と、獅子は云ひながら、そのまゝ横になり、腭を前足の上にのせました。それから王樣と一角獸とに向つて、

『君たちも坐つたらどうだ？』と、聲をかけました。

王樣はこの二疋の大きな獸の眞中に坐るのはあんまり氣持がよくないやうでした。けれども他に場

處が無いので、氣味わるさうに二疋に挾まれて小さくなつてゐました。

『この冠が欲しさに、おれたちはずゐぶん勝負をしたもんだな。』と、一角獸は獨語のやうに云つて、ジロリと横眼で王樣の冠を見ました。その冠は今にも落ちさうにぐら〳〵と王樣の頭の上で搖れてゐました。それほど王樣の身體はひどく顫へてゐたのでした。

『今度の勝負では君なんかコロリだよ。』と、獅子は云ひました。

『ドッコイ、さう安くは問屋でおろさないよ』と、一角獸が云ひました。

『なに生意氣な、このひよつ兒め。まかり違ふと町中引きずり廻してくれるから！』と、半ば立上りながら獅子が怒つた聲でどなりました。

王樣はあわてゝ二疋の間へ入つて喧嘩をとめようとしましたが、恐ろしさに身體が顫へて、聲までひどく上ずつてゐました。

『町中をお引ずりになるつて？　それは大へんな道のりですな。いつたいその時はあの古橋の方からお廻りですか、それとも市場へ出ておいでゝすかな、古橋の方が景色はよろしうございますが……』

と、王樣はトンチンカンなお世辭をならべました。

『そんなことがわかるもんか！　第一このひどい埃ぢや何一つ見えないぢやないか。』と、獅子は唸りながら、またごろりとねころびました。が、ふと思ひついたやうに首をあげて、

『いつたいあの化物はいつまでカステラを切つてるんだ！』

と、どなりました。

このとき、あやちやんは小川の岸の上で、大きなお皿を膝へのせて、せつせとカステラを切つてゐました。

『あたし、ぢれつたいわ！　このカステラつたら、何度切つても、ぢきにまた附着いてしまふんですもの！』

と、あやちやんは、獅子の方を向いて、かう澄して返事しました。（あやちやんは何度も化物々々つて呼ばれたので、もうすつかり平氣になつてしまひました。）

『嘘をつけ！　そんなことを云つてその暇に自分の分をくすねようつて云ふんだらう？』

と、獅子は、毒々しくまたどなりました。

『さうかも知れないよ。女の子つてものは摘み喰ひが好きだからな。』

と、今度は、一角獸までが口を出して云ひました。

『ずゐぶんひどいことを云ふのね。』

と、あやちやんは心の中でくやしくなりました。そこでどうにかして早くカステラを切つてしまひたいと思ひましたが、それはまつたくどうも奇妙なカステラでした。ナイフでうまく三つに切つたかと思ふと、その片々はまるで磁石で吸ひつけられたやうに、お互に飛んで來て、ピタリとまた以前のやうにお皿のまんなかで密着いてしまふのでした。

あやちやんは、ぢれつたくなつて。今度は手のひらでペタリとカステラを押へつけて、やつと一きれを切りとり、今度はそれと前の片とを押へつけて置いて、二番目の分を切らうとしました。するとどうでせう！　押へてゐたカステラはまるで甘日鼠のやうにツルリ手のひらをぬけて、またもとの片と密着いてしまひました。

この時、獅子の腹立ち聲がまた耳もとでひゞきました。

『化物！　化物！　貴樣は千年も萬年もさうやつてカステラを切つてゐる氣か？』

『そんなことをしてゐると、貴樣の顏の方が早くカステラのやうに皺だらけになつてしまふぞ！』

これは一角獸の聲でした。

『それに第一あゝ手でいぢられちや切れても汚なくて喰べられやしない。』

これは、さも〳〵氣の弱さうな王樣らしい聲でした。

『なあに、あゝやつていぢつて置いてその手をあとで舐める氣だらうよ。』と、また獅子が憎々さうに云ひました。

さうして三人はそろつて一どきに、

『アッハッ〳〵〳〵ハ』と、さも〳〵馬鹿にしたやうな笑ひをしました。

このとき、どこからかドン〳〵、ドン〳〵云ふ騷騷しい太鼓の音が聞えてきました。(多分さつき駈け出して行つたお使者の兵が、たゝいてゐるのでせう。

その音がだん〳〵近く大きくなり、それが三人の馬鹿にしたやうな大笑ひと混つて耳もとで破裂するやうに鳴りわたつたので、あやちやんは、もうぢれつたさと、騷々しさと、口惜しさが一時にこみあげてすつかり逆上かへつてしまひました。

そこで、あやちやんは、矢庭にカステラのお皿を兩手で掴んで、

『あたしもうがまんが出來ない。このカステラめ、お皿め、いつそかうして、——かうして、——かうして、——』

と、むちやくちやに搖りたてました。すると、これは不思議！

カステラのお皿はだん〳〵小さくなり、——太りだし、——ぶよ〳〵になり、——眼が出來、——鼻が出來、——そして……

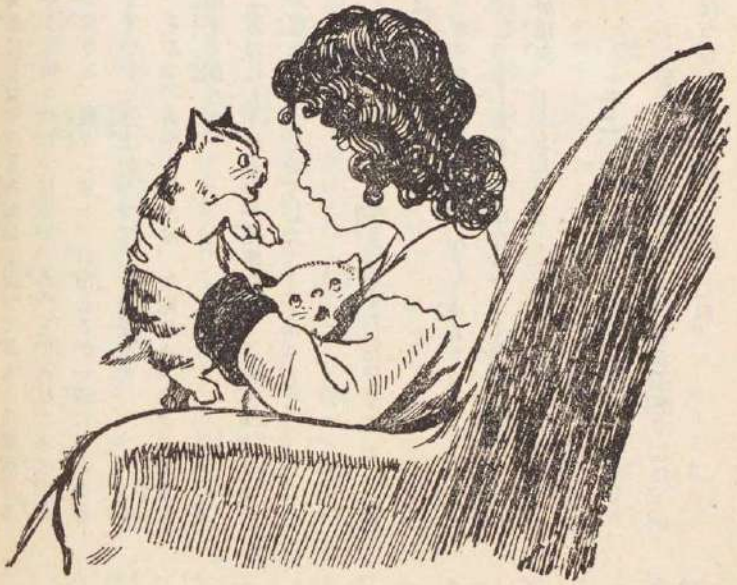
廿二、目ざめ

……そして、それはとゞのつまり子猫でした。いたづらものゝ子猫の三毛でした。

『まあ三毛ちやん！　お前があの意地わるなカステラのお皿になつて、あたしをあんないゝ夢から覺ましたのだね。』と、あやちやんは眼をこすり〳〵、子猫に向つてすこし叱るやうに云ひました。

それから、あやちやんは、あたりを見まはし、ため息をついて、

『でも、すゐぶん長い〳〵夢だつたわねえ。そして三毛ちやん、おまへもあたしとずつと一緒に鏡のお



國の旅をしたのよ。おまへ知つてゝ？』と、子猫に頬ずりをしました。

けれども三毛はたゞ喉のところで、ごろ〳〵いふだけでした。これが子猫のいちばん不便なくせでした。(あやちやんはいつもかう云つてお姉様やばあやにこぼしてゐました。)何故つて、もしか猫が『はい』と云ふ時にだけごろ〳〵音をさせて、『いゝえ』と云ふ時には『ニャーゴ』とでも啼くやうな規則になつてゐると、あやちやんは子猫とどうやらお話が出來るのですが、いつも一つことしきや言へない者を相手では、まつたくどうにも話のしようがありませんでした。

このときも子猫は唯ごろ〳〵云ふだけでした。『はい』なのか『いゝえ』なのかさつぱり推量ができませんでした。

そこであやちやんは足下のストーヴの焚きつけ口のところに落ちてゐたトランプの札を拾ひあげて卓子の上に並べ、子猫たちと交る〴〵見くらべながら、鑑の圖でめぐり逢つたいろ〳〵な物たちにあてはめて考へてみました。

『三毛ちやん、おまへはどうしてもおしまひにはあのカステラのお皿になつてゐたのよ。けれどその前は何だつたのでせう？　ひよつとするとあの足の早いスペイトの女王だつたかも知れないわ。お前はいつもいたづらなかはり、ずゐぶんはしつこいのだから。』

と、あやちやんは、しばらく考へてから云ひました。

『それから。』

と、あやちやんはこの時までおとなしく母猫にお化粧をさせてゐた白い子猫の方を向いて、

『おまへは何になつてゐたんでせうね。――さうさう、――きつとあのダイヤの王様よ。おまへはいつも氣が弱いから、それであの獅子や一角獸なんかに挾まれてぶる〳〵顫へてゐたんだわ。』

あやちやんは二疋の子猫を膝の上にのせて、そのあたまを撫でながら、氣持よさゝうなおしやべりをつゞけました。

『そしてたまは一體何になつたんでせう？』

と、あやちやんは、おしまひに、ストオヴの前の敷物の上にまるくなつてゐる母猫のたまを見て云ひました。

そして暫く首をかしげてから、

『ねえ、たま、あたしお前はあの卵男の飯櫃左衛門になつてゐたんぢやないかと思ふけれど、違つてゐるかしら。え、たまや、どう？』

と訊きました。

母猫のたまは子供たちと同じやうにやはり何とも返事をしませんでした。たゞすこし首をそつぽへむけて、あやちやんの言葉を聞かないやうなふりをしてゐました。

これは多分自分があのでたらめな詩のお講義をした飯櫃左衛門だつたことをさとられて少々氣まりがわるかつたのでしたらう。(おしまひ)

ふえばおとーひおいで

歸一

一

僕と川田の叔父さんと明日の日曜日に鐵砲に出かけるので、二人で(たま)を製造にかゝつたのですが、僕は鈎と鐵砲の名人の島田の叔父さんのを二三度見てゐたが、川田の叔父さんのは、馬鹿に火藥がすくないので、これぢやだめだと云ふと、叔父さんは

「春雄君、この鐵砲は十六番だぜ。だから反動が非常に强いので下手すると反動で後へころがるといふぜ。なにこれ位いで澤山だよ。」

と、すましてゐる。

叔父さん鐵砲打つの初めてかいとききますと、仕方なし、うんと返事しました。翌日それでも服裝だけは、立派な鐵砲打ちみたいななりで、出掛けました。

二

田舍へゆくと、雀でも目白でも目つけたがさいごドン〳〵打ちますが、そのかつかうと云つたら一生懸命ねらつておき乍らいざ打つとなると、こはいものだから目をつぶつて、からだをかたくするので砲先が下を向いて、ドンとやると三四間先の他面を打つて砂煙がパッとあがる。それでも叔父さんはたしかに手答がしたからもつとよくさがして御覽、きつとおちてゐると云ひます。人を犬だと思つてけしからんとしやくにさはつたので、

「あのね叔父さん、目白がね！おとゝいおいでつていつてましたよ。」とひやかしてやると、こんどこそ、きじか土鳩でも打つて見せるからと夕方迄かゝつたが、きじはおろか一羽もとれません。

三

少しやけくそになり、くたびれたので歸りかけると、向うの木にひよ鳥が一羽とまつてゐる。

叔父さん鐵砲かまへてそろ〳〵そばへよつていつた。

なか〳〵打たれない、もう打つだらうと見てゐると、ひよいとしやがんだと思ふと、ドンと音がしたが、ひよはさよならとも云はずにとんでいつた

おやおやと叔父さんのゐるところへいつて見ると、どうです、叔父さん穴ぼこへおちてはひ上らうとしてゐます。あんまり上の方のひよに氣をとられて穴があるのに氣がつかずおちるひやうに穴の中を、ドンとやつたんでしよ。たうとう一羽もとれずに歸ることにしました。

四

でも手ぶらはきまりが惡いからといふので、歸りに鳥屋の店にぶらさがつてゐるつぐみを五羽買つて來て、いばつてをばさんに見せました。をばさんは初めてゞよく打てましたねと感心して御料理にかゝりました。所が暫くすると、をばさんが

『あなた、これは打つたんぢやありません、丸の穴が一つもありませんよ。』

僕はしまつたと思つて叔父さんの顏を見ると、『ちや、買つて來たとでもいふのかい。馬鹿いへ、それは！それはおどろいて目をまはして死んだんだよ。』

とこはい顏してをばさんをにらんでゐましたが、その時の叔父さんの顏といつたら、僕の方の半分は笑つてゐに妙ちきりんな顏でした。

狐のお化け

齋藤佐次郎

（一）

武藏野のある村に、甚兵衛といふ爺さんが暮してゐました。甚兵衛爺さんは、ある日、鍬を持つて畑へ麥踏みに行きました。太變にいゝお天氣だつたので、爺さんはいゝ氣持で麥を踏んでゐましたが、やがてくたびれたので、畑の畔にどつかり腰を下しました。それから煙草入れを出して、プカリ〳〵やつてゐましたが、ヒョイと向の方を見た時、爺さんは思はずびつくりしました。

一匹の大きな狐が、麥畑にごろりと寢ころんではヒョイと起上つて、それをいくども〳〵繰返してゐるではありませんか。その樣子が如何にも爺さんにわざと見せるためにしてゐるやうなのです。

爺さんはたまげて見てゐましたが、その時、ポンと膝を打ちました。

「巧いぞ、あの狐め己を化かさうとしてゐるのだな。よし、一つ本當に化かされた眞似をして傍へ來たら打殺してやらう。村の衆を化かして、ひどい目にあはすのはあの狐に違ひない。」

さう思つた爺さんは、急に立上つて、狐がやつてゐる通りに自分もごろりと畑にころがりました。それから直きに起上つて、またごろり〳〵と轉りました

狐は爺さんを化したと思つたのか、安心したやうに、だんだん爺さんの近くへ來ました。たうとうお終ひには、爺さんのすぐ目の先きへ來ましたから、甚兵衛は丁度そこにあつた丸太棒でいきなりガーンと一つ、狐の脳天をめがけてたゝきました。狐は、

「ぎやアッ——」

と、一と聲叫びましたが、そのまゝばつたり倒れて手足をふるはせながら死んでしまひました。

「たうとう、死んだな。巧く行つたぞ。丸太棒一つで狐をつかまへたのは、恐らく己一人だらう。」

甚兵衛は大得意で、狐の尾をつかんで、つる下げながら家へ歸つて來ました。

（二）

爺さんは、その晩狐汁をこしらへて家中で大そうおいしくい。」

食べました。中でも爺さんは腹一ぱい食べたので、ぢきに睡くなりましたから、床を敷いてもらつてぐう〳〵眠つてしまひました。

夜中頃になると、爺さんはお便所へ行きたくなつて、ムックリ起上りました。爺さんの家は田舍家なので、お便所は外にありましたから、庭へ出ようと思つて戸を開けたのです。

外は月があかるく照つてゐて、まるで晝間のやうでした。草が生えたり藪があつたりして、いつもは汚く見える庭が、その晩は大そう美しく見えました。爺さんは、丁度そこにあつた足駄をはいてガラ〳〵ひきずりながら籔のそばのお便所の方へ歩いて行きました。

と、その時、藪の中に何か白い物が爺さんの方を見て切りとおいで〳〵と手招ぎをしてゐるではありませんか。爺さんは思はずぶる〳〵ッと體をふるはせました。よく〳〵見るとそれは今日、自分が畑で殺した狐なのです。

「やア、化けて出たな。」

そう思つた爺さんは、もう體がふるへて身動きさへ出來なくなつてしまひました。狐はなほ切りとおいで〳〵をしながら

ら蔵を出て、爺さんの方へ近づいて來ました。

『ひやァ――』と、思はず叫んだ爺さんは夢中で駆け出しました。

やうやくの事に縁側のそばまで來たので、戸を開けて家の中へかけ込まうとしました。ところが、どうしたことか、いくら力を入れて引張つても戸が開かないのです。

爺さんは今にもお化けに襟髪をつかまれそうな氣がするので、いよ〳〵力をこめてドン〳〵〳〵〳〵と戸をたたきました。しかし、少しも動きません。

『オイ、甚之助！　開けてくれ。開けてくれ。』

爺さんは夢中で息子の名を呼びました。でも、息子が出て來る樣子がないので、地團太ふんで叫びつゞけました。

と、その時、ひやりと爺さんの首筋へ冷いものがさはりました。

『あーッ……』爺さんはお化けに首をつかまれたと思つたので一と聲力なく叫びましたが、そのまゝばつたり氣を失つて倒れてしまひました。

（三）

翌朝はやく、息子の甚之助が目を覺したので、戸先きの戸を開けようとしました。

ところが、なか〳〵開きません。でも漸くの事に開けて見ると爺さんが死んだやうになつて倒れてゐるではありませんか。

さア大騒ぎとなりました。

爺さんはよつほど暴れたと見えて、足駄の歯はめちや〳〵に壞れてゐて、土の上は下駄の歯の跡で一ぱいでした。

『おーい、お父つあん……お父つあん。……』

甚之助が、爺さんの體をゆすぶりながら耳元で叫びましたが、爺さんは目を開きませんでした。

『お父つあんや――、昨夜夜中に戸をたゝいたのはお前さんだつたのかい。』

甚之助は悲しさうにいつてボロ〳〵涙をこぼしました。

『甚兵衛さんや――、どうしたんかい。氣をしつかりしなくちやいけないよ――。』と、隣の八五郎さんも飛んで來て叫びましたが、矢張り爺さんは目を開きませんでした。そこで、近處の人が急いでお醫者を呼びに行きました。

やがて、お醫者が來て氣つけ藥を飲ませたり、頭から水をかけたりしたので、爺さんは、

『うーん。』と叫んで、目を開けました。爺さんは、まだおびえてゐるやうに邊りをキョロ〳〵見廻しました。

『お父つん、何んだつてそんなに恐さうにしてゐるんだ。何にも恐いものはゐないぢやないか。』

と、甚之助がいひましたが、爺さんは矢張り恐そうに見廻してゐました。

甚兵衛爺さんは、氣狂ひになつてしまつたのです。もともと氣の小さい男だつたのに、狐が化けて出たと思つたので、びつくりして氣が變になつてしまつたのです。

それから爺さんは、たうとうそのまゝ治らずに今から七八年前に死んでしまひました。

これは武藏野のある村に本當にあつたお話で、爺さんが狐のお化けだと思つたのは、背戸に咲いてゐた卯の花だつたそうです。それからまた爺さんが、冷たい手でつかまれたと思つたのは、夜露がポタリと落ちて來たのだらうといはれてゐます。（なはり）

罪なき娘を探ねに（續き）

馬場孤蝶

一

その晩、王子は老爺さんのところへ喚ばれましたが、行きますと、老爺さんはかう云ひました。『明日は、お前に言ひつける用は何もないのだが、起きたら直ぐ俺のところへ來て、挨拶の握手をするんだぞ。』

王子は、老爺さんのそんなへんな氣まぐれに驚いて、笑ひながら、娘に逢ひにと行きました。

娘は、王子の話を聞きますと、溜息をついて、かう云ひました。『あら、それは笑ひ事ぢやありませんですよ。あなた、今度こそほんとに大變よ。老爺さんはあなたを殺して喰べちゃふ積りなんですわよ。あなたが助かるやうにしてあげる方法といふのは唯つた一つしきやありませんわ。鐵のシャベルを眞赤に灼いてしまつて、それを持つてつて、握手の時に、あなたの手を出すところを、その代りに、そのシャベルをお出しなさいよ。』

で、王子は翌朝極く早く起きて、老爺さんがまだ目を覺さないうちに鐵のシャベルを

すつかり眞赤に灼いてしまひました。

やがて、老爺さんが『やい、怠け者奴、何處にゐやがるんだ。さア、朝の挨拶に來いよ。』と、呶鳴る聲が聞えました。けれども、王子が灼けたシャベルを持つて入つて行きますと、主人の老爺さんは、たゞ『今日は、俺は病氣だ、何うも心持が惡くつて、お前の手へ觸ることさへ能きないんだ。晩になつたらよくなるだらうから、その時來て呉れ。』と、云つたのみでした。握手しやうとはしませんでした。

王子はその日は一日ぢう、方々ぶら〳〵歩いて日を暮らしましたが、晩になると、老爺さんの部屋へ行きました。老爺さんは如何にも愛想好く王子を迎へて、意外にも、老爺さんは大きい聲で、かう勢ひ好く云ひました。『俺はお前の働きぶりがすつかり氣に入つてしまつたよ。明日曉明に俺のところへ來なさい。その時は彼の娘もつれて來なさい。俺はお前たち二人が互に好き合つて居るのを知つてゐる。それで、お前たち二人を夫婦にしてやらうと思ふんだ。』

若い王子は、餘りの嬉しさに、もう少しで跳びあがるところでした。けれども、その家の拵に氣がつきまして、ぢつと靜にしてゐました。其所で、老爺さんの部屋を出てから、王子は娘に逢つて、老爺さんの云つた事を話すといふと、これは又驚いた事に、娘は顏を眞蒼にして、少時は口をきかずに默まり込んでしまひました。

やがて、口がきけるまでに落ち着きますと、娘はかう云ひました。『此度こそ、いよ〳〵大變ですわよ。老爺さんは到頭誰があなたに智慧を貸したのか、すつかり知つてしまふんです。それで、私たち二人を殺してしまはうといふんですよ。何うにかして通してしまはなければなりませんよ。でないと、私たちは今度こそ助かりませんよ。斧を持つてつて、一擊であの犢の首を斬つてください。それから、二度目ので、その首を二つに切つてください。さうすると、その腦の中に輝いた赤い球があります。それを私のとこへ持つて來てください。その間、私は逃げ出す爲めの支度はしときますからね。』

王子は、心の中で、かう思つたのです。

『犢を殺すのは如何にも可哀さうだけれども、さうしなければ、自分たちの方が殺されるといふ場合なんだから、何うも仕方がない。』と思ひに、あの犢を殺してしまはう。此所か

ら逃げ出すことさへ能きたなら、家へ歸ることはさうむづかしくはないだらう。來しなに途々播いといた豌豆が今頃はもう芽を吹いてるだらうから、路に迷ふ氣遣ひはない。』

其所で、王子は斧を持つて、牛舍へと行つて、一擊で犢を打ち殺し、二度目の打擊で、犢の腦を切り割りました。すると、たちまちにして、赤い珠が犢の腦から轉りだすや否や、四邊がまるで晝のやうに明るくなりました。王子は直ぐその珠を拾ひ上げ、厚い布でそれを包んで、自分の懷中へ隱しました。もし、牝牛がそれを見たのでしたら、きつと大聲で泣き叫ぶのであつたでせうし、さうすれば、その叫び聲で主人の老爺さんが目を覺ますのであつたでせうに、眞個に仕合せな事には、何うした事だか、牝牛は我が子の殺されるのをちつとも知らずに、ぐつすり眠込んでゐるのでした。

王子が振り返りますと、娘が、小さい包みを抱へ込んで、戸口に立つてゐました。

『球は何うしました？』

と、娘が訊きました。

『此所に持つてゐるよ。』と、王子は答へて、布に包んだ珠を

娘にさし出しました。

『もう、少しもぐづ〳〵してなんぞ居られませんよ。』と、娘は云つて、行く手の路を照す爲めにと、輝く小さい珠をば布の中から取り出しました。

二

豫て王子が思つてゐたやうに、豌豆はすつかり芽が出て、今は皆もう大きくなつて、小さい生垣を作つてゐましたので、もう路に迷ふ氣遣ひは何うしてもないのだと、二人は思ひました。逃げて行きながら、娘は嘗て老爺さんと老爺さんの祖母さんとの間の談話を傍聞したことを、王子に話しました。

老爺さんと祖母さんとが、その娘は何處かの王の女であつたのを、老爺さんが旨い計略でその親の手から奪つて來たのだと、話してゐたといふのでした。その事件に就いては何も彼も王子は知つてゐましたけれども、何にも云ひませんでした。たゞ、王子は、その娘を老爺さんの手から取り戻すことが自分自分の手で能きるやうになつた廻り合せを、心から喜んでゐたのです。さういふ風で、二人は夜が明け始めるまで逃げ續けました。

老爺さんの方は、その朝は遲くまで眠込んでゐましたが、到頭起き上つて、本當にすつかり目が覺めるまで眼を擦りました。其所で、老爺さんは、もう直きに王子と娘とが自分の前へ出て來る筈になつてゐることを憶ひ出しました。隨分長いこと待ちに待つた後で、老爺さんは一人で『奴等は夫婦になるのをさう急がないと見えるな』と、云つて、にやりとして、又暫く待つてゐました。

到頭、老爺さんは少し心配になりだして、大聲で『下僕と下婢、お前たちは一體何うしたんだい？』と、呶鳴りました。

さう幾度も繰り返して呶鳴つても、何の返辭も聞えて來ないので、老爺さんは、大分心配になりだしました。幾ら呼んでも、下僕も娘も何處からも出て來ないのです。到頭老爺さんは、躍起となつて、寢床から飛び出し、さういふ怪しからん召使ひどもは一體何處に入つてゐるのだらうかと、それを探しに出かけたのですが、家ぢう何處を探しても、二人は影も形も見えませんでしたし、二人の寢床はといふと、何ちらも、その前の晩寢た氣色は更にありませんでした。で、老爺さんは牛舍へと行きましたが、その中の慘憺たる光景を見る

と始めてわけがすつかり解りました。大聲で喚き立てながら、老爺さんは直ぐ三つ目の厩の戸を開けまして、其所へ入れてあつた召使ひの妖怪どもに、王子と娘の逃げたことを話して、二人を直ぐ追つ掛けろと、言ひ付けました。『何うにしても捉へなきやあならんのだから何んな風になつて居ようとも構はんから、何でも二人ともつれて來い』と、老爺さんは言ひ付けたのです。さういふ風に老爺さんが云つたので、召使ひの妖怪どもはまるで疾風のやうに飛で行きました。

逃げて行く二人は、大きい原を横切つてゐるのでしたが、娘が立ち止まりました。

『あら、何かあるんですよ。珠が私の手のなかで動くんですよ。きつと追手がかゝつたんですよ。』と、云ひました。で、振り返りますと、風に吹かれてゐる黑い雲のやうなものが、後の方で見えました。娘は手のなかで珠を三度轉して、かう叫びました。

『珠や、珠や、これお聽き、
早く私を小さい川に、
この方を小さい魚に、
早く〳〵變へておくれ』

すると、たちまち二人の男女の姿は見えなくなつて、其處へ綺麗な小川が出來て、そのなかに小さい魚が泳いでをりました。追手の妖怪どもが丁度其處で追つ付きました。けれども、何處を見ても、人間の影さへ見えなかつたものですから、小川や魚なんぞは振り向いて見もしないので、大急ぎで元來た方へと引つ返して行つてしまひました。妖怪どもの影が見えなくなつてしまふといふと、小川と魚とになつてゐた男女は、直ぐ元の人間の姿に戻つて、旅を續けました。

妖怪どもが、つかれきつて手ぶらで歸つて行きますといふと、主人の老爺さんは、何うだつたかと訊き、何か變つた物を見はしなかつたかと尋ねました。

『いや、何にも。原には、小川が流れてゐて、その中に魚が一匹ゐたきりで、その外には、何もゐませんでした。』と、妖怪どもは口を揃へて云ひました。

『馬鹿ども奴、勿論、その川と魚が奴等だつたんだ。』と、主人は呶鳴りました。で、五番目の厩の戸を開けて、中に入つてゐる妖怪どもに、行つて小川の水を飲み干して、魚を捉へて來いと、言ひ付けました。妖怪どもは跳びあがつて、疾風のやうに飛んで行きました。

三

若い男女は、森の緣までもう殆ど行つてゐたのでしたが、娘がばつたり立ち止まりました。『又、何かあるんですよ。珠が私の手のなかで動きますわ。』と、娘は云つて振り返ると、後から一團の雲が飛んで來るのが見えました。今度のは前のよりも一層黑くつて、なかに赤い線が見えるのでした。『あら、追手ですよ。』と、叫んで、娘は又珠を手のなかで三遍轉がしてかう云つてきかしました。

『珠や、珠や、これお聽き、
早く〳〵私たち二人を變へとくれ、
私を野薔薇の一株に、
此の方を薔薇の花にしておくれ』

すると、瞬く間に男女はその通りになつてしまひました。丁度それは好い時でした。追手の妖怪どもがもう其所へやつて來て、小川と魚とを一生懸命に探してゐたのです。けれども、其所には小川も魚もありませんでした。唯だ一株の薔薇があるばかりでした。それで、妖怪どもは、爲方がなくなつて、踵り込んで、家の方へと引つ返しました。で、妖怪どもの影が見えなくなつてしまふといふと、一株の薔薇と花になつてゐた男女は、又元の人間の姿に戻つて、少し休んだので、尙一層早く歩きだしました。

妖怪どもが歸つて行きますと、主人の老爺さんは、『おい、何うだ、奴等が見付かつたか？』と、尋ねました。

『いゝや。野原には小川もなければ、魚も居ませんでした。』と、妖怪どもの頭が答へました。

『その外には何にもなかつたのか？』と、老爺さんが重ねて尋ねました。

『いゝや、森の縁に、一株の薔薇がありまして、それに一つ花が咲いてゐたつきりで、その外には何もありませんでしたよ。』と、妖怪の頭が又答へました。

『間抜ども奴。おい、それが奴等なんだぞ。』

と、老爺さんは呶鳴つて、召使のなかでの一番偉い妖怪どもを閉ぢ込めてあつた七番目の厩の戸を開けました。

『奴等が何うなつてゐようが、屍骸にしてでも生きたまゝでも、何でも構はんから、此所へつれて來い。何うしても奴等を捉まへなきやあ承知が能きんのだ。薔薇を根こそけ引き抜いて持つて來い。何れほどヘンなものであつても、何一つ後へ殘して來ることはならんぞ。』と、雷のやうに我鳴り立てました。

逃げて行く男女は、森の陰で憩んで、食べ物と飲み物で、勢ひを付けてゐるところでした。不意に娘は見上げました。

『何か、又あるんですよ。珠がもう少しで私の懷中から跳び出すところでした。確に又追手ですよ。危險は間近に迫つてます。でも、樹の陰になつてゐるんで、吾々の敵は見えません。』

と、娘は云ひました。

娘はさう云ひながら、手へ珠を取つて、かう云ひました。

『珠や、珠や、これお聽き、早く私をそよ風に、此の方を小さい蚊にしておくれ』

たちまち、娘の身體が溶解て、空氣になつてしまひ、王子は蚊になつて飛んで行きました。と、直きに其所へ、恐しい妖怪どもの一群が飛んで來ましたが、薔薇も何も其處には更になかつたので、何か變つた物はないかと、其邊らをキヨロ〳〵と見廻してゐるのでした。で、到頭、妖怪どもがせん方盡きて、手ぶらで歸つて行つてしまふや否や、王子と娘は元の身體になつて、地上に立ちました。

『老爺さんが自分で吾々を捉へに來ないうちに、吾々は急げるだけ急いで行かなければなりませんよ。あの老爺さんに來られちやあ、私たちが何になつてゐようとも、見顯はされてしまひますからね。』

と、娘は云ひました。

四

男女は一生懸命に駈け續けて、やがて、森の一番暗いところへとやつて來ましたが、そんなところでは、珠から出る光がなかつたのでしたら、一足も進むことは能きなかつたらうと思はれます。つかれきつて、喘ぎ喘ぎ男女は到頭大きい石のところまで辿り着きましたが、其所へ來ると、珠が何だかしきりに動くのでした。娘はそれを見ると、かう叫びました。

『珠や、珠や、これお聽き、私たちに戸口が知れるやうに、此の石を傍へ轉しておくれ』

すると、たちまち、石が傍へ轉つて行つて、戸口が開いたので、男女は其所を抜けて吾々の世界へと出てしまひました。

『もう此れで大丈夫ですよ。もう此所では、あの老爺の魔法使ひも吾々を何うすることも能きませんわ。吾吾は彼奴の魔法にかゝらないやうに、吾々自身で護ることが能きるんですよ。ですが、あなた、吾々はもう此所で別れなければなりませんよ。あなたは親御さんたちのところへお歸

りでせうし、私は私で又私の親たちを探しに行かなければなりませんわ。』と、娘が云ひました。

『いゝや、それはいけない。』と、王子が大きい聲で云ひました。そして、『私は何うしたつてもあなたとは別れない。あなたは是非私と一緒に來て、私の妻になつてください。あなたと私とは一緒にいろ〳〵な苦しい目に合つて來ました。だから、もうこれからは喜びを共にしようではありませんか。』と、云ひました。むすめは少時は辭退しましたけれども、結局は王子と一緒に行くことを承知しました。

男女は森のなかで樵夫に出會ひましたが、その樵夫は、王子がゐなくなつたが爲めに、王の宮中でも、國中でも、非常な悲しみであつたのだが、もう何年にもなるけれども、王子の行方は一向に知れないのだと、男女に話しました。

其所で、王子が父の王に逢つた時に、それが王子であることが一層速く分るやうにと、その不思議な珠の助によつて、娘は、王子が前にゐなくなつた時に着て居たと同なじ着物を王子が着て行けるやうにしました。さうして置いて、娘自身は、父の王と王子とが父子二人きり差し向ひで對面することが能きるやうにと、百姓の小舍に殘つて居りました。

が、父の王はもうこの世にはゐませんでした。王は王子が居なくなつた悲しみの爲めに死んでしまつたのです。王は臨終の床で、人々に向つて、自分は約束通りに王子を渡さずに、年取つた魔法使ひが、百姓の娘をつれて行くやうにと、旨くもくろんだが爲めに、その罰で、自分も亦王子を失つてしまつたのだと、懺悔したといふのでした。

王子は、父の王を深く愛してゐたのでしたから、その父の王が死んだことを聞いて、ひどく泣いて、三日といふもの、何も食はず、何も飲みませんでした。が、四日目になりますと、王子は自分の人民の前へ新王として立ちました。そして、大臣たちを喚び集めて、自分が出會つたさま〳〵な不思議な事を話し、それから、娘のお陰で無事に危險を遁れ出た一部一什を物語りました。

『その娘さんに、あなたには妻、吾々には女王に是非なつて頂きませう。』

と、大臣たちは聲を揃へて云ひました。

で、それがこの話の終りです。（をはり）

迷の森のメクラ（少女自作童話）

神奈川縣小田原高等女學校
小澤尊子

昔々ある小さな村に大變わがまゝな子がゐました。生れつきはおとなしい子でしたが、一人っ子なのでお父樣やお母樣が春子（春子といふ名にしておきませう）の云ふ事は何でもきかないものはないと云ふ風にそだてたので、村一番のわがまゝ娘になつてしまひました。或日の事、お父樣が『春ちゃん、隣村の叔母樣の所にこのお森を持ていつておくれ。』とおたのみになりました。春子は『私いやよ、遊んでゐる方がいゝわ。』と、又わがままの蟲がいふ事を聞きません。

『そんな事をいふと、面白い「金の船」っていふ本を買つてやらないよ。』

『いやだ、そんならお父樣とジャンケンして、勝

母子の乞食（推薦童話）

伊藤一雄

私が小學校へ入つた年の夏休みに、私は母につれられて、母あさんのお里へ行きました。其處は、日本でも北の方で、ほんとに山の谷のやうなところでした。

母あさんのお里の家は、お酒屋をしてゐました。急にこんなところへ來たので、私には一人のお友達もありませんでした。で、私は仕方なしに、店に坐つて、往來を通る人々を見るのでした。私の傍には、いつもお祖母さんがゐました。おばあさんは、私に學校のことや、お迎れのことを問ひました。そして、私が一々くはしくいつて上げると、『お、さうこ、さうこ。』といつて、齒の禿けになつた口を開いて、よろこんでくれました。私はおばあさんの笑ふ顏が、世界中で一番好きです。本當に私は、おばあさんが好きです。店へお酒を買ひに來る人々に、おばあさんは、きつと、私のことをほめてくれました。

『良坊はのい、そらあ、ほんまに大人しゆうての、……』といふ風に。そん

つた人はお使にいかない事にしませう。』

お丶可愛い娘のいふ事だと、お父様はジャンケンして春子に負けてしまひました。お父様は隣村まさしてく〳〵行きました。するとどうした事か、隣村にはいかないでお父様が氣がついた時は、森の中に迷ひこんでゐました。お父様は大驚びつくりして、森から出やうと思へば思ふ程森の中に迷ひこんで、今は一と足も歩く事が出來なくなりました。そして或一本の杉の木の下に休んでゐますと、あたりがだん〳〵暗くなつて來ました。

『アヽこまつたものだ。どうして迷ひこんだかわけがわからぬ。』と、云ひながら重箱のお菜を食べました。すると鍛の長いおぢいさんが來て、

『お前さん其お菜を私にもくれないか、お前はきつと道に迷つたのだらう。』と、いひました。

『エヽさうです、どうぞ元の道を教へて下さい。このお菜は皆なあなたにあげます。家には可愛らしい娘が待つて居りますから。』

と、お父様がいつた時、そのおぢいさんは急に、

『お前さん、その娘さんを明日隣り村までお使におやりなさい。そうすれば、この迷ひの森から出してやりませう。』と、いひました。お父様は、

『それはお安い事です。けれど娘はジャンケンが嫌くてな。』と、いひました。

な時、私はいつも恥しくなつて、下を向いてゐました。

けれど、どうかするとお祖母さんも、店に來て私のはなし相手になつてくれることが出來ませんでした。それは、何かお祖母さんに用事があつたからでせう。そんな時には、私は一人で、ほつねんと、店の間に坐つてゐなければなりませんでした。

ある日の夕方でした。母子の乞食が、私の坐つてゐる店の前へ來て、悲しい歌をうたつて立つてゐました。母子の乞食の着てゐるものは、着物とは、どうしても思はれませんでした。母乞食の力は、黒い顔の中に、眼を光らせて、家の中を見てゐました。子乞食は、口をあけて、私の顔を見てゐました。その時お祖母さんが出て來ました。そして、

『これをおやり。』といつて、私に一錢銅貨を渡しました。私はそれを母乞食に渡してやりました。母乞食は歌を止めて、頭をさげないで、ぷいと行つてしまひました。

『生意氣な乞食ぢやのい。』

と、お祖母さんはいつてゐました。

けれども、私には、あの子乞食の顔が、はつきりと、私の眼に殘つてゐました。淋しさうな目つきが、どうしても忘れられませんでした。

私は土間へ急いで降りました。そして下駄をはくと、あわてゝ、今のさき、

すると、おぢいさんはニコ〳〵して、

『それはワシが承知だから、きつとお前が勝つよ』と、いひました。お父様は『それなら、明日娘を隣村までよこしませう。』と云ひました。……見るともうお父様は家の前にちやんと來てゐました。お父様は不思議なその事を誰にも話しませんでした。翌日娘に『春ちやん、隣村までお使にいつといで』と云ひますと、いつも勝つものですから、ではお父様ヂャンケンをしませうといひました。

しかし、いくらしても今日は春子が負けたのでプリ〳〵怒りながらお使に行きました。

春子が少したつて氣がついた時は、やはり迷ひの森の中をさまよつてゐたのです。春子はお父様に負けた事や、こんな森の中に入つてゐた事を考へて、くやしくて〳〵手にあたつた物は草でも木でもメチャ〳〵に折りながら森の中から出やうとあせりましたが、どうしても歩へまゐりません。今まで春子が折つた草木が、一斉にヒイーヒイと叫びましたので、春子は體がつかれるし、叫び聲は聞えるので、自分も怖くなつてしく〳〵泣き出してしまひました。けれどもお腹がすいて來たので、隣村に持つて行くオセンベイをボリ〳〵食べ出しました。すると一匹の鳥が來て、

乞食の行つた方へ歩きました。

だいぶん行つて、私はやうやく乞食の姿を見つけました。二人の乞食の影が、黒く、夕日の光の中に彩らてゐました。私はどん〳〵追つて行きました。

『あの乞食は何處へ行くんだらう。もう御飯を食べなければならんのに。さつきやつた一錢で、晩御飯が食べられるだらうか？　そして二人は何處で寢るんだらう？』私はこんな事を考へました。そして、あの乞食にきいて見やうと、決心しました。

たうとう私は乞食の母子に追ひつきました。私の足音で、乞食は私を見ました。そして、怪しむやうな目で、にらむやうにしました。私ははつとなりました。乞食はおかまひなく行きます。私は堪らなくなつて、かういひました。

『君い、もう御飯たべた？』と。

乞食は驚いたやうに見えました。私は又いひました。

『今晩はどこで寢るの？』

乞食の顔は怒で燃えてゐるやうに思はれました。

『やかましいわい！　野郎。』

乞食の母は呶鳴りつけました。私はびつくりしてしまひました。どうしたらいゝか、私にはそんな瞬間のあひだに、考へつきませんでした。

『さつきの一錢はもう使つた？』私はかう問ひました。

『オセンベイを一枚下さい。お腹がすいて死にさうですから ネ。』と頼みました。春子は、

『イヤよ、私だつてお腹かすいてゐるんですもの。お前にやるやうなオセンベはありやしない。』と横むいてしまひました。その時烏は急に赤い顔して

『今にお前は苦しい目に合ふよ。』と云ひながら何處へか飛んでいつてしまひました。

又一匹の狐が、さもつかれたらしく『半分オセンベ下さい。』と頼みましたが、春子が見むきもしないので、『お前は今に苦しい目に合ふよ。』と青い顔して、叢の中に入つて行きました。

次には一人のみすぼらしい乞食が來て、四半分のオセンベをくれと頼んだけれど、春子は見むきもしないで、おいしさうに一人で食べてゐました。乞食は黄い顔して突然にらみ、

『不親切な小娘！』とどなると、急にあたりが暗くなつて、大粒の雨がボツリ〳〵と降り出しました。雷はゴロ〳〵と鳴り出しました。乞食の姿はいつの間にか消えてしまひました。春子は大きいな雷が鳴り出したので、青くなつて、そこいらをお父さーんお母さーんと泣きながらかけてゐるうち、一つのウロを見つけ出したので、喜こんで其中に飛びこみました。

『こん畜生、生意氣な、一錢位くれやがつて……』

乞食はさういつて、ずん〳〵行き去りました。私はかう呶鳴りつけられても、何だか心殘りがしてゐるやうで、その後について行きました。しばらく眞先く向いて行つた乞食が、ふいに、くるつと後を見ました。そして、私がまだついて來てゐるのを見つけると、

『この小童つぺ、まだ來やがる。うるせい。』

と、いつて、眞赤に怒つて、今度は逆に今行つた道を引返して來ました。私は本當にびつくりしました。あんまりびつくりして、氣が變になりました。突然、私の頭を何か石のやうな物で叩きました。驚いて上を見ますと、乞

其時、ウロの中から一匹の烏が急に飛び出して春子の目の玉をつゝいて食べながら木の上にとまりました。春子は急に目が見えなくなつたので お父様お母様と泣きながら地面に倒れた時、前の狐が來て春子の親指を食べました。又乞食が來て自分の汚い着物と春子の着物と取換へてしまひました。それでも春子はどうする事も出來ないで泣いてゐました。

『お前が親切になつたら、目の見えるウロがわかるだらう。清く流れる迷ひの泉も。』と、烏がいひました。けれど春子には烏のカア〳〵と云ふ聲きりか聞こえませんでした。狐は云ひました。

『あの子が親切になつたら、親指の出來る黄金の花が分るだらうに。』けれど、春子にはコン〳〵としきや聞えませんでした。乞食は云ひました。

『あの子が親切になつたら、この着物が森のヌレ目に入つてゐる事がわかるだらう。』と。

けれど春子にはイヒヽヽと云ふ乞食のすごい笑ひ聲きりか聞えませんでした。

春子は何日になつたら迷の森から出られるでせう。春子はいつも細い杖をつきながら『お父様戀しやホーイホイ母様戀しやホーイホイ』と泣きながらまよひの森の出口を探して居ります。（をはり）

食の母が、立つてゐました。私は再び膽をつぶして、そこへ、へたばつてしまひました。村の人達が多勢寄つて來ました。乞食はどん〳〵逃げるやうに行つてしまひました。村の人達が、私に、どうしたのかと、口々に問ひました。けれども、私は泣いてゐるばかりで、何もいふ事が出來ませんでした。

『あれ、血が……』と女の聲がしました。

『ほんに頭から血が出てゐる。』と男の人がいひました。急に頭がキリ〳〵痛むやうに思はれました。

村の人達に圍まれて、私は歸りました。お祖母さんも、お母あさんも、その人々に厚く御禮をいひました。そして理由をきゝました。

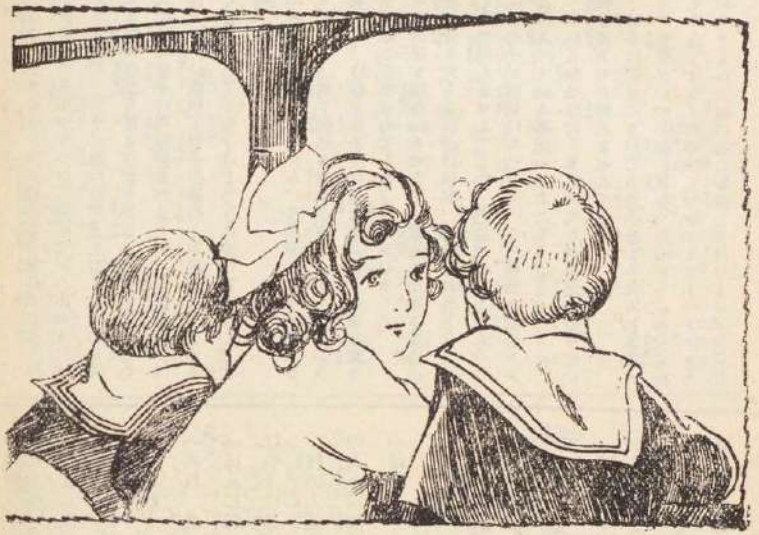
『ほんに、とんでもない。』とお祖母さんはいつて、私の母を呼びました。

『およし、早うこの子の頭を……』

お母さんは私の頭に、藥をつけてくれました。お祖母さんも、お母あさんも、何でこんなことをしたかときゝました。で、私はいつてしまひました。ひよつと見ると、お母あさんのお目に涙が溜つてゐました。

『そらのい、あんな者あ、根性がへがんどろけえ（ひがんぜ）。』とお祖母さんがいつてくれました。

私にはその意味がはつきりと、判りませんでした。けれど、お母あさんの顔を見てゐると、何でか知らん、涙がほろ〳〵と落ちて來ました。（をはり）



汽車の窓から

内藤豐雄

橋もお家も瓦根も堀も
お仙女樣よりも速くとぶ。
馬や家畜が軍隊のやうに
牧場中をかけまはる。

あれ〳〵小山が　あれ〳〵野原が
はげしい雨のやうに飛ぶ。
また〻くひまにきつと又

ペンキで塗つたステーション。

ひとりで木苺摘みながら
木に這ひ上つてゐる子がこゝに、
立つて見つめる旅人がこゝに。
雛菊作る畑がそこに。

そこへごろ〳〵二輪馬車
人と荷物で重さうな。
そら水車　そら小川
見えたと思へば消えて行く。

（スティーブンソン）

世界名作童話物語（その二）

林へ子を捨てに

三宅房子

むかし、大きな林の傍に貧乏な樵夫が住んでゐました。

樵夫の家には、おかみさんとそれから先のおかみさんが生んだ二人の子供がゐました。男の子の名がヘンゼルで、女の子はグレテルといひました。

さて、樵夫はふだんから極く貧乏で、やっと食べていける位でしたが、ある年、大變な饑饉にあひましたので、もう食べる事さへ出來なくなってしまひました。

ある晩のこと、樵夫は寢床に入りましたが心配で〳〵眠れませんでした。寢返りを打っては溜息をついて考へてゐましたが、たうとうおかみさんに言ひました。

『おい、どうしたらいゝんだらうね。エ。わし等さへ食べるのがやっとなのだから子供達には何を食べさせたらいゝんだらう。』

『それだから、お前さん、私のいふ通りになって、明日の朝早く、子供たちを林の奥へつれて行って、置ざりにして來たらいゝぢやありませんか。さうすれば道がわからないから歸って來る心配がありません。』

と、おかみさんが答へました。

しかし、樵夫はいひました。

『いけない〳〵、そんな事が出來るものか。子供を林の奥へ捨てゝ來るなんて心にどうしたらなれるのだ。そんな事をして見ろ、それこそ森の獸に喰ばれてしまふぢやないか。』

『お前さんは本當に分らずやだよ。そんな事をいってゐる暇に楢柵でもこしらへたがいゝや。』

樵夫は氣のいゝ男でしたから、おかみさんに言ひ負かされて、たうとう言はれる通りにする事になりました。

ところが、その晩、子供たちはあんまりお腹がすいて眠れずに起きてゐましたので、繼母がお父さんと話してゐたのをすっかり聞いてしまったのです。

『私たちはどうなるんでせう。』

といって、妹のグレテルはしく〳〵泣出しました。

『グレテルや！　泣くんぢやない。僕がいゝことを知ってゐるからネ。心配することはないよ。』と、兄さんのヘンゼルが妹をなだめていひました。そして、兩親が眠ったのを見すまし、そっと裏木戸を開けて外へ出ました。外にはお月樣が明かるく照ってゐて、家の前に敷いてある小石が、まるで御飯のやうにキラ〳〵光ってゐました。ヘンゼルはかくしに入るだけの小石を拾ふと、家へ入りましたそれからグレテルに向って、

『安心してお寢よ。僕たちには神樣がついてゐるからネ。』といって、自分も床へもぐって寢てしまひました。

翌朝になりますと、繼母はまだお日樣の上らない内に子供たちを起しに來ました。

『寢坊だネ。さア〳〵起きて、林へ木を切りに行くんだよ。これはお前達のお晝の御飯だから、正午までは食べてはいけないよ。』

繼母はかういって二人にパンを一切づつくれました。

皆なはそろって林の方へ出かけました。少し行った時、ヘンゼルは立留って家の方を振返って見てゐました。それから少し行くと、また振返ってゐました。あんまり幾度もさうしてゐるので、お父さんが、

『ヘンゼル、お前は何を見てゐるのだ。どうしてさう道草ばかりするのだ。』

と、きゝました。

『お父さん、僕の可愛い白猫が家の屋根で「左樣なら、左樣なら」をしてゐるのを見てゐるのですよ。』

ヘンゼルがさういふと、繼母が、

『馬鹿だネ、この子は。あれは煙出しに日が當ってゐるのぢやないか。』と、どなりました。

しかし、ヘンゼルは本當は猫なんぞ見てゐたのぢやなかったのです。立留るたんびに一つづつ小石をかくしから出して、道へ落して行ったのでした。

やがて林の中へ來た時、お父さんは子供たちに焚火をするのだから木を拾って來いといひました。二人の小供は山のやうに木の枝を集めて來ました。お父さんがそれに火をつけると、火がぼう〳〵燃え出しました。

その時、繼母がいひました。

『私たちはこれから林で木を伐って來るからお前たちは、この火の傍に寢ころんで休んでおいでよ。仕事がすむと、ぢきに呼びに來るからネ。』

ヘンゼルとグレテルは焚火のそばに坐ってゐましたが、やがて正午になったのでパンを出して食べました。カチン〳〵と斧の音が聞えます。子供たちは、お父さんが近い處にゐるのだと思って安心してゐました。しかし、それは斧の音ではなかったのです。枯木から垂れ下った枝が、風に吹かれてカチン〳〵と當る音だったのです。

かうして二人は、ながい間待ってゐましたが、その内に目がとろ〳〵して來て、たうとう眠ってしまひました。

目を覺した時には、もう薄暗くなってゐました。妹のグレテルはしくしく泣き出して、

『兄さん、どうしたら林から出られるんでせうねエ。』といひました。

『少し待っておいで、今に月が出て道がわかるやうになるからネ。』

ヘンゼルは落ついていひました。

そのうちに眞丸いお月

樣が出ましたから、ヘンセルは妹の手をひいて、落して行つた小石が銀貨のやうに光つてゐるのを目印にして歩きました。二人は夜通し歩いて、夜あけ頃やうやくお父さんの家につきました。

二人はトン〳〵と戸をたゝきました。繼母が戸を開けました。見ると、ヘンセルとグレテルが立つてゐたので、驚をつぶしました。しかし。お父さんは二人を林へ捨てゝ來たのを嘆いてゐた藏でしたから、大層喜びました。

それから暫くたちました。と、また國中に大饑饉がありました。ある晩、子供たちは繼母がお父さんにかういつて話してゐるのを聞きました。

『何もかも無くなつて、もうあとパンが半かけしかありません。早く子供を捨てなければ駄目ぢやありませんか。今度は、決して歸つて來られないやうに、もつと〳〵林の奥へつれて行くのです。』

ヘンセルはこの話を聞いたので、またそつと起上つて、この前のやうに小石を拾つて置かうと思ひましたが、その晩は繼母が戸に鎖をかけてしまつたので、外へ出る事が出來ませんでした。でも、ヘンセルは妹を慰めて、

『グレテルや、泣かないでお寢。僕たちを神樣が護つて下さるからネ。』と、いひました。

翌朝は、早く繼母が二人を床から曳出してこの前よりも、もつと小さなパンを一切れづつくれて林へつれて行きました。ヘンセルは途々、自分のかくしの中でパンを千切つては途へ落して行きました。

『ヘンセルや、お前は何故さう立止つて、側見をするのだ。』お父さんがまたきゝました。

『僕は鳩を見てゐるのです。屋根の上で僕の方を見ながら「左樣なら、左樣なら」をしてゐるんですもの。』

『馬鹿だよ、この子は、あれは鳩ぢやないよ煙出しに朝日があたつてゐるのぢやないか。』と、繼母がどなりました。

やがて、これまで來たこともない森の奥の奥へ來ました。

繼母は焚火をしながら、

『こゝへ坐つて休んでおいで、くたびれたら寢てもいゝよ。』

お父さんはこれから木を伐つて來るけれど、夕方には仕事をすませて迎れに來るよ。』

といひました。

そのうちに正午になりました。

ヘンセルは自分のパンをみんな途中へまいて來たので、グレテルの分を分けてもらつて食べました。

それから、ぐつすり眠つてしまひました。

日が暮れました。

二人が目を覺した時には黄昏になつてゐました。

『グレテルや、お月樣が上るまで待つておいで、お月樣が出ると、僕の落して置いたパンが見えるから道が分るんだよ。』

ヘンセルは、かういつて妹を慰めました。

間もなく、お月樣が出たので、二人は起上りました。しかし、パンの屑は一つも見當り

ませんでした。その筈です。數間の所に森の小鳥がみんな食べてしまつたのです。

その晩、二人はあてもなく歩きました。翌日も終日歩きましたが、たうとう森の外へ出る事が出來ませんでした。二人は藪の中で草の實をとつて食べたりしましたが、ひもじくつてひもじくつてたまりません。終ひには疲れて動けなくなつてしまひ、樹の下へ倒れて眠つてしまひました。

家を出てから三日目の朝になりました。二人はなほ、家へ歸るつもりで歩いてゐましたが、いよ〳〵森の奥深くへ入るばかりでした今のうちに助ける者がなかつたら、もう餓死にするばかりになりました。

と、丁度その時は正午頃でしたが、一羽の雪のやうに眞白な鳥が樹の枝にとまつて、いい聲で歌をうたつてゐました。鳥は歌つてしまふと、羽をひろげてついと飛んで行きました。二人が何氣なしに鳥の後を追つて行くと一軒の小屋のあるところへ來て、鳥はその家根にとまりました。傍まで行つて見ると、その小屋は不思議にもパンで出來てゐて、屋根はお菓子で葺いてあり、窓硝子はすき通る氷砂糖でありました。

『かまはず行つて、甘さうなのを食べてやらうぢやないか。僕は屋根を少し食べるから、お前は窓をおあがり、きつと甘いだらうよ。』

お腹がへり切つてゐたヘンセルは、さういふが早いか飛上つて屋根を少しかいて食べました。グレテルも窓のところへ行つて、ガラスを千切つては食べました。

と、小屋の中から細い聲で、

「チップー、タップ、チップー、タップ戸をたゝくのは、そりや誰だ？」

と、いひました。子供たちは、

「風！風！天の子供！」

と、いつて構はず食べてゐました。

その時、戸が開いて年をとつたお婆さんが、杖をついて出て來ました。子供たちは持つてゐたお菓子を落した程びつくりしました。

『おゝ〳〵子供さん達や、まアどうして來たのだエ。まア〳〵中へ入つて家の子におなりちつとも恐い事はないよ。』

さういつて、お婆さんは二人の手を摑つて小屋の中へつれて行きました。

小屋の中には、牛乳だの、おせんべいだのお砂糖だの、林檎だの、胡桃だのがテーブルの上に一ぱいのつてゐて、次の部屋には白い布のかゝつた小さな寢臺が二つ並べてありました。ヘンセルとグレテルは、その寢臺に横になつた時には、天國にでも來たやうに思ひました。

さて、このお婆さんは大變親切さうに見せかけてゐますが、その實は恐ろしい魔女だつたのです。子供が來るのを待つてゐて、パンの家でおびきよせ、子供が中に入るとぢきに殺して食べてしまふのです。ところが、この魔女は赤い眼をしてゐるので、遠くはよく見えないのですが、その代りに森の獸のやうに鼻がきくので、子供が近くに來た事をこの鼻でかぎつけてしまふのです。

夜があけました。魔女は子供たちが目ん覺さないうちに部屋へ入つて來て、二人の眠つてゐるのを見て、

『これはおいしさうだ。』と、獨言をいひました。それから、骨張つた手でヘンセルをつかんで、小さな檻の中へ入れてしまひました。ヘンセルは魂消て大聲をあげたのですが、聞に合ひませんでした。今度は、魔女はグレテルの寢てゐる處へ來て、ゆすぶりながら、

『起きろ〳〵、この寢坊め！　水を汲んで來て、お前の足貴に食べさせる物をこしらへるのだぞ！　兄貴は檻の中へ入れて肥らせるのだ。丸々肥つた處で、食べてしまふのだよ。』と怒鳴りました。

グレテルはおい〳〵泣きました。でも、どうする事も出來ないので、魔女のいふ通りに働きました。

魔女は毎朝ヘンセルを入れた檻のところへ來て、

『ヘンセル！　指を出しな。どんなに肥つたか見てやるから。』と、いひました。

ヘンセルは、いつでも手を出す代りに何かの骨を出しました。と、魔女は眼が惡いのでそれを本物の指だと思つてどうしてかう肥らないのだらうと不思議がつてゐました。

四週間たちました。しかし、ヘンセルは少しも肥らないので、魔女はたうとう我慢出來なくなつて、

『おい、グレテル！　早く行つて水を汲んで來な。肥つても痩せても、明日はどうしてもヘンセルを殺して食べるのだから。』と、いひました。

グレテルはどんなに悲しかつたでせう。

『神樣！　どうぞお助け下さいまし。私達は林の中で獸に食べられてしまつた方が、二人一しよに死れて、どんなに仕合せだつたでせう。』と、いつて泣きました。

『やかましい！　今更騒いだつて役に立つものか。』魔女は大聲でどなりました。

翌朝、魔女は起きると、すぐお釜へ水を汲んで火を焚かせました。

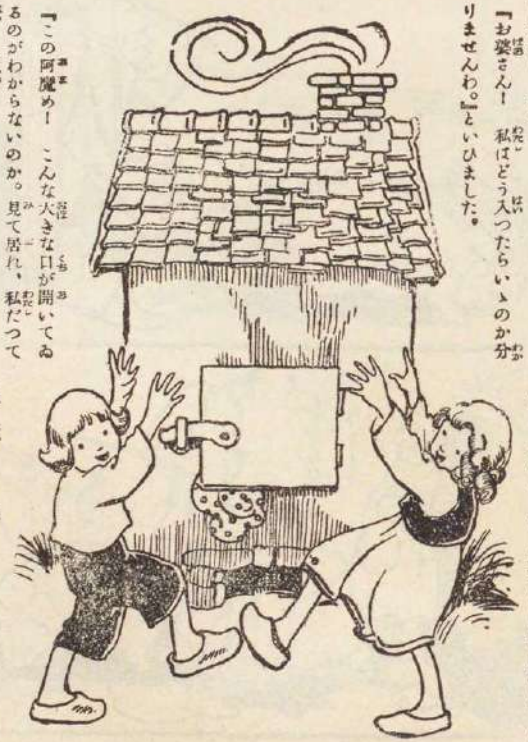
『待て〳〵、パンの方を先に燒かう。竈があつたまつてゐるし、粉もこねてあるから。』と魔女はいつて、グレテルを火のぼう〳〵燃えてゐる竈の方へつきころばしました。そして

『その中へ入つて竈が温つてゐるかどうか見ろ。』と、どなりました。

魔女は、グレテルが竈の中へ入つたらすぐ

と蓋をして、蒸焼きにして食べてしまふつもりだつたのです。グレテルもそれを見拔きましたから、わざと、

『お婆さん！　私はどう入つたらいゝのか分りませんわ。』といひました。



『この阿魔め！　こんな大きな口が開いてゐるのがわからないのか。見て居れ、私だつて入れる位なんだから。』

さういひながら、魔女に竈の口へ頭を突込みましたから、グレテルはこゝだと思つて、背後からドーンと押しました。魔女はころころとめつて、竈の中へころげ込みました。

グレテルは、すぐと鐵の扉をしめて閂をかつてしまひました。魔女はどんなに怖ろしい聲を張りあげて吠えたでせう。

魔女はたうとう燒死んで灰になつてしまひました。

グレテルは飛んで行つて、ヘンセルの入つてゐる檻の扉を開けて呼びました。

『兄さん！　助つたよ。魔女は死にましたよ。』

ヘンセルは夢中で喜びました。籠から出た小鳥のやうに飛廻りました。

二人は怖いものがなくなつたので、魔女の家の中へ入つて見ますと、眞珠や寶石の一ぱい入つた箱がいくつも〳〵ありましたから、それをかくしや前掛の中へ一ぱいつめ込みました。さうして、魔女の家を出ました。

幾時間か歩いた時、見覺えのある林へ出ました。そして、到頭お父さんの家が見える處迄來たので、二人は急いで駈出して家へ飛込むなりお父さんの首にかじりつきました。

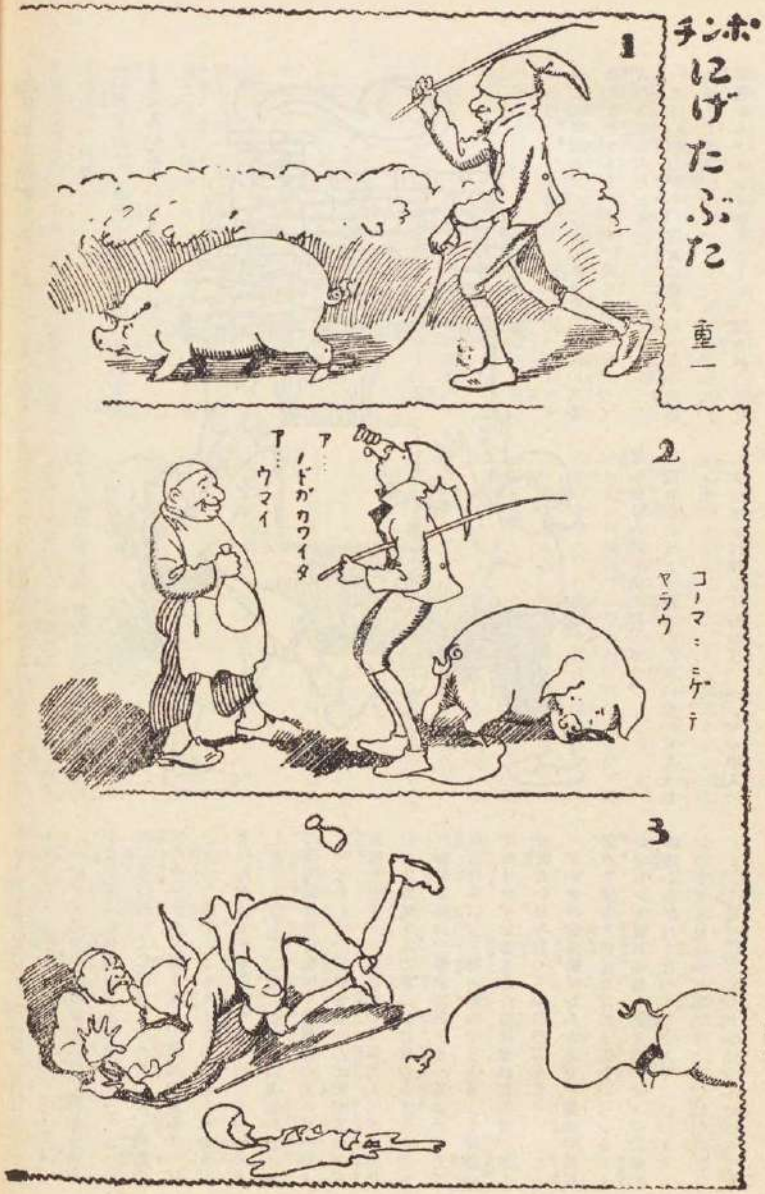
お父さんは、子供を林の中へ置去りにして來てからは、一時も氣のやすまることが無いばかりか、お母さんにも死なれたので、淋しい悲しい日を送つてゐたのでした。

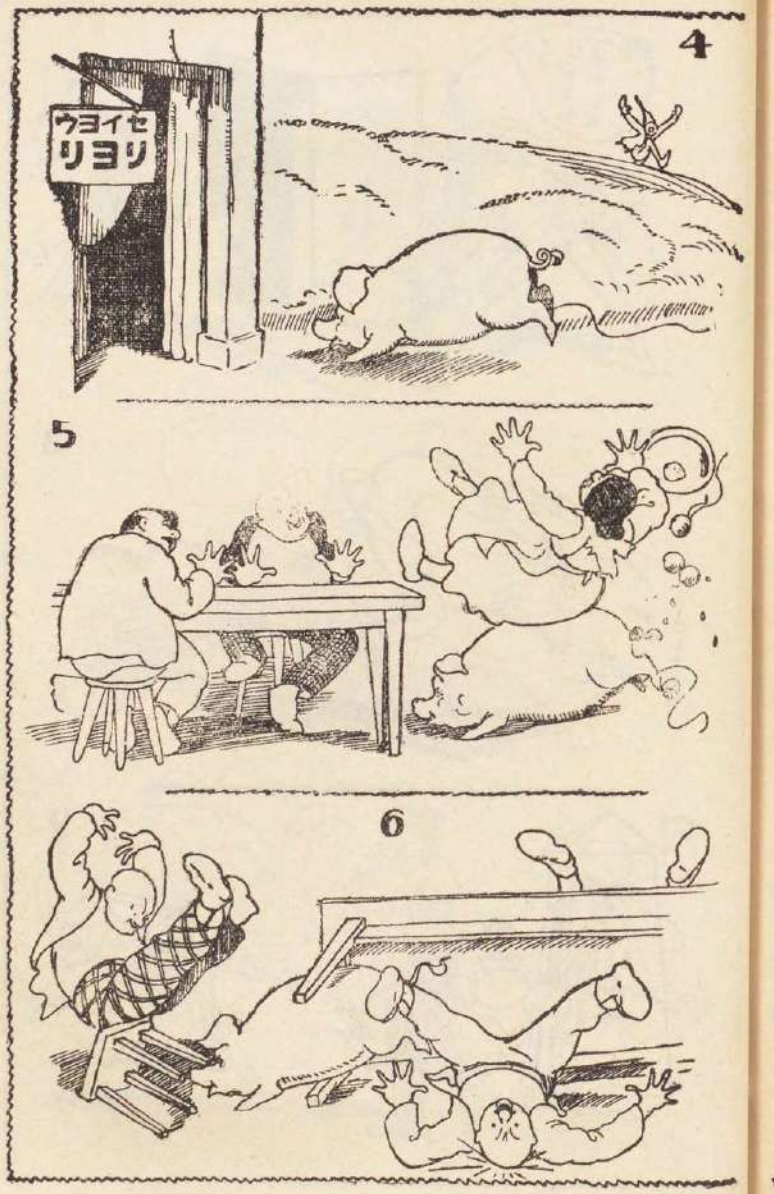
グレテルが前掛けをふるふと、眞珠や寶石がバラ〳〵と床にこぼれました。ヘンセルもかくしから寶石を出しました。そこで、家中の悲しみがなくなつて、三人で、いつまでもいつまでも仕合せに暮しました。

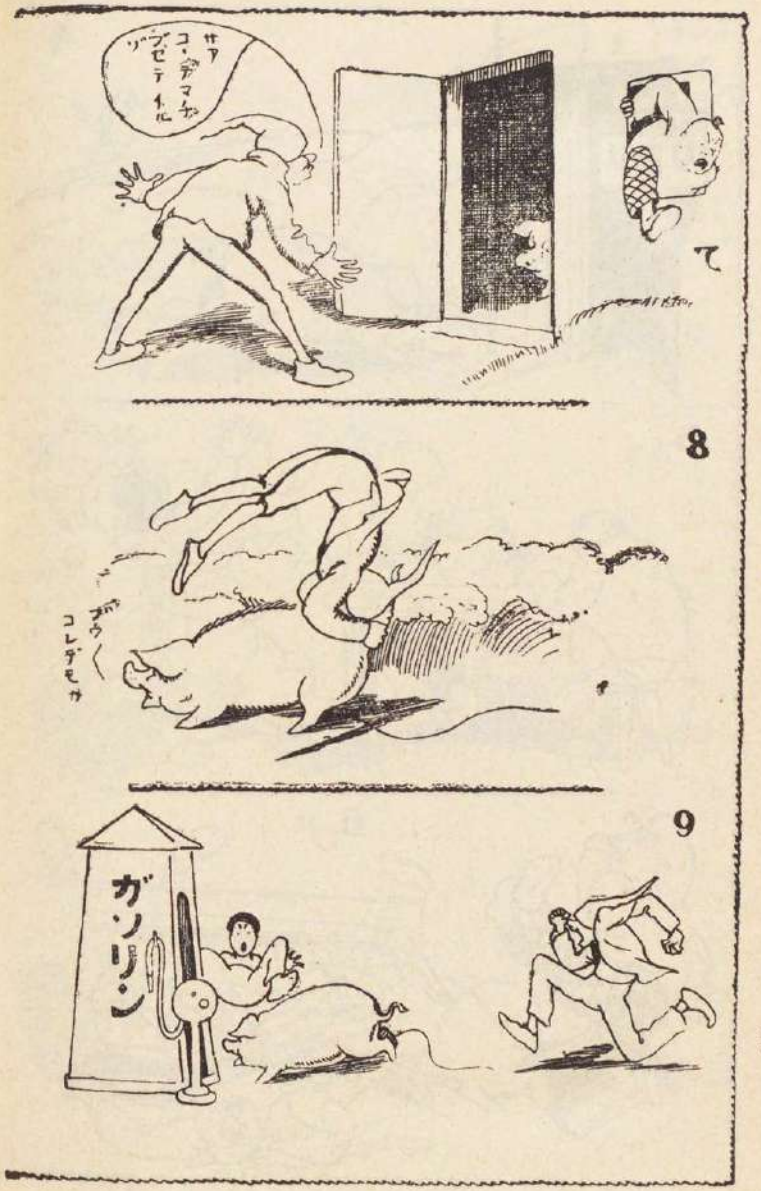
（グリム作、ヘンセルとグレテルより）

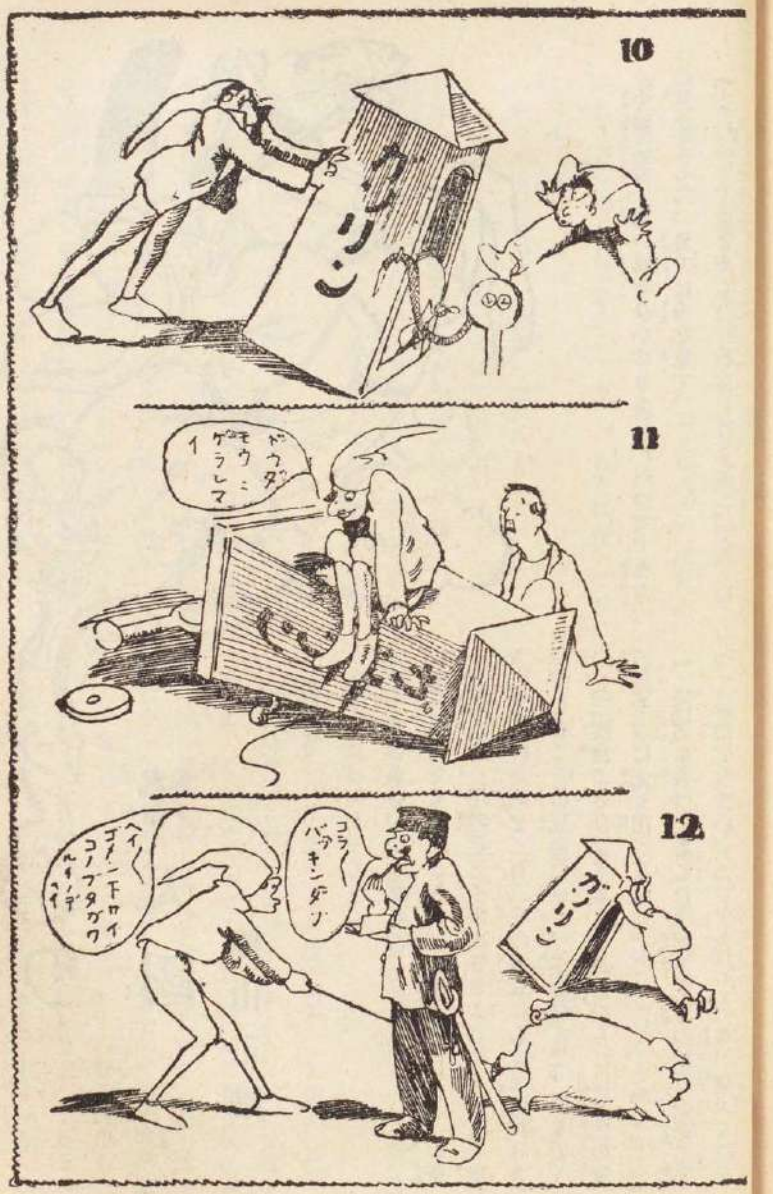
ポンチにげたぶた

重一






サア
コ、デマッカ
ブセテイル
ゾ
て
8
ブウ〜
コレデモカ
9
ガソリン


10
ガソリン
11
ドウダ
モウミ
ゲラレマ
イ
12
ヘイ〜
ゴノ〜トカイ
コノブタガウ
ルサイデ
ハイ
コラ〜
バカキンダゾ
ガソリン

梵天國

楠山正雄

一

中將は青い毛の馬をひいてうちにかへつて、奥方に見せました。奥方は馬を見て、

『これはまぐさをやらなければいけません。』と、いひました。

『まぐさには何をやらう。』

『三千兩の黄金がいります。』

『それは何でもないことだ。』と中將はいつて、お倉から新らしい小判を三千兩出させました。すると奥方は、その小判を三石三斗の大豆にして馬にたべさせました。その豆をたべて、水をのんで、ぶる〳〵つと三度身ぶるひをすると、馬のからだは紫色の寶石のやうに光り出しました。

『この馬に乘つてあしたの朝早く東のほうの空に向つてお出でなさい。しばらく行くと、馬が身ぶるひをして足で土を掻くでせう。さうしたら兩方の目をかたく塞いで下さい。そしてこんどまた馬が三度身ぶるひをするまで、けつして目をあいてはいけません。そして目をあいたら馬から下りて、あとは歩いておいでになるのです。』

かう奥方はいつて、中將とわかれました。

そのあくる朝、中將は馬にのつて出かけました。しばらくして案の定馬が身ぶるひをはじめますと、中將はをしへられたとほり目をふさいで馬に鞭をあてました。馬はひゝんと高く嘶いて、空の上へ上がつて行きました。

さうかうする中馬は地の上に降りたやうでしたがやがて三度ぶる〳〵つと身ぶるひをしました。中將がその時はじめて目をあけて見ますと、そこは見わたす限りどこまでつゞいてゐるかわからないやうなひろい砂原でした。中將はこゝで馬から下りました。その時馬はまた三度高くいなゝいて、お暇乞ひをするやうな風でしたが、そのまゝどこかへ駈けて行つてしまひました。

中將はそれから一人でぽつり〳〵砂原の中の細い道を辿つて行きました。しばらく行くと向ふから一人のおぢいさんがやつて來ました。

『こゝは何といふ所です。』と中將はおぢいさんにたづねました。

『梵天國と申します。』

『梵天王さまのお宮はどこでせう。』

『こゝから南の方に向つておいでなさい。お宮の前へ出ます。』

かうをしへておぢいさんは行つてしまひました。

中將はやつと安心して、またずん〳〵歩いて行きますと、どこまで行つても、草のはえた野もなければ、木の茂つた山もありません。行つても行つても同じやうなまつ平らな道でした。やがて砂の色がだん〳〵金のやうに光つて來て目がくらむやうでしたすると向うに金の門と銀の門が並んで立つてゐるのが見えました。そばへ行つて見ると、中は一めんに

純金の砂がしきつめてありました。瑪瑙の敷石の上に瑠璃の柱を建てた廊下を傳はつて、奥へはいつて行きますと、いろ〳〵の寶石を積んできづき上げた御殿の中から三十人ばかりの天人が出て來て、

『南へまはれ。』といつて、指さしをしました。

南へ向つて行くと、まん中に天子さまの御殿があつて、白金の柱を立て、床には玉をしきつめてありました。その一間に中將は通されました。

間もなく二十四五人の天女が金のお三寶に瑠璃のお盃をのせて持つて來ました。またほかの天女が、金の銚子と銀の銚子を持つて出て來ました。そしてなんにもいはずに中將の前において出て行つてしまひました。

中將はお酒をのまうと思つて、お盃を手に取りかけますと、また一人の天女が大きな瑠璃のお椀に一尺も長さがあるまつ白なお米の御飯を一粒のせて持つて來ました。

中將はめづらしいお米だと思ひながら、手をつけようとしました。するとそのとたん隣の部屋でうんうん苦しさうにうなる聲がしました。

ふしぎに思つて中將がそつと戸をあけて見ますとその部屋の中に、骸骨のやうに痩せ衰へて、人間だか、鬼だか分からないやうな形をしたものが、金の鎖で八方につながれてゐました。そのあやしいものは、中將の前に置いてある御飯を見て涙を流しながら、

『あの御飯をどうぞいたゞかせて下さい。もう何もたべないのでかつゑ死をするところです。』

といひました。

中將は大そう情ぶかい人でしたから、かはいさ

うに思つて、

『それ、のせてあげるから舌をお出し。』といひました。あやしいものは大そうよろこんで、鎖をゆすぶりながらべろ〳〵と舌を出しました。その長さは一尺もあつて、まるで蛇がとぐろをまいてゐるやうでしたから中將はびつくりして、あわてゝ御飯をつまんで投げてやりますと、がつ〳〵してすぐたべてしまひました。するとあやしいものは急に荒つぽい樣

子になつて、いきなり鎖を引きちぎつて、鐵の格子を突きやぶりました。するとにはかに大風がふき出して、ひどい大雨になりました。そのさわぎにまぎれて、あやしいものは御殿の天井をつきやぶつて、どこかへ逃げて行つてしまひました。

中將はとんでもないことになつたと思つて、ぼんやりしてゐますと、その時梵天王が大せいの家來をつれて出ておいでになりました。梵天王は中將に向つて、氣の毒さうに、

『あなたはこゝまでたづねて來て下すつたのはよろこばしいことです。たゞ困つたことには、今あなたの放しておやりになつたあやしいものは羅刹國に住む鬼の王です。こゝの姫が七つになつた時から目をつけて、いつかさらつて行つてお后にしようとねらつてゐるといふ話を聞いたので、或時家來の四天王をやつてつかまへて牢の中に入れておいたのです。ところでさつきあなたにさし上げた御飯は、遠い南の國の七寶淨土の池のそばでできたお米で、一粒たべれば千人の力がつき、千年の命がのびるふしぎなお米ですから、それをたべたために急に鬼の王は力がついて、鎖をふり切つて逃げて行つてしまつたのです。姫も今頃はもうあの鬼の王にとられて羅刹國へ連れて行かれたにちがひありません。』

かういつて、梵天王は涙をはら〳〵とこぼしました。

中將はよけいがつかりして、ものもいはれませんでした。けれどもいつまでぼんやり考へ込んでもゐられませんし、少しでも早くかへつて、奥方がどうなつたか見たいと思つて、改めておしうとの梵天王の手形をいたゞいて、お暇乞ひをしました。梵天王は金の板に手形をおして、中將にわたして、大せいの家來をつれて門の外まで見送りました。

中將はこれからどうしてかへつたものだらうかと思つてゐますと、いつどこから來たか、さつきの馬がまた出て來て、ひゝんと三度高くいなゝきました。中將はよろこんで、さつそく馬の脊中にまたがりますと、みる〳〵馬は雲の中をわけて、しばらくすると日本の國へかへりました。

中將は胸をどき〳〵させながら、いそいでうちへかへつて見ますと、もしやとたのみをかけてゐたかひもなく、鬼の王はとうにこゝまでやつて來て、奥方をさらつて行つたあとでした。

中將はもう世の中になんにも樂しみのない人になりました。ちやうど秋のなかばのことで、落葉の上を吹く朝晩の風がよけい中將の心を悲しくしました。もう今は奥方のゐない大きなおやしきの中に、一人ぼつちゐても立つてもゐられない氣がするので、或時中將は思ひ立つて清水の觀音さまへおこもりをすることにしました。觀音さまの前に手をついて、

『どうぞしてもう一度奥方におあはせ下さい。』と願ひました。すると七日めの明け方の夢に八十ぐらゐの髣の白い坊さんがあらはれて、

『これから九州の博多に下つて、舟をたのんで西に向つて千日漕いでおいで。お前のたづねてゐる人にきつとあへる。』といひました。

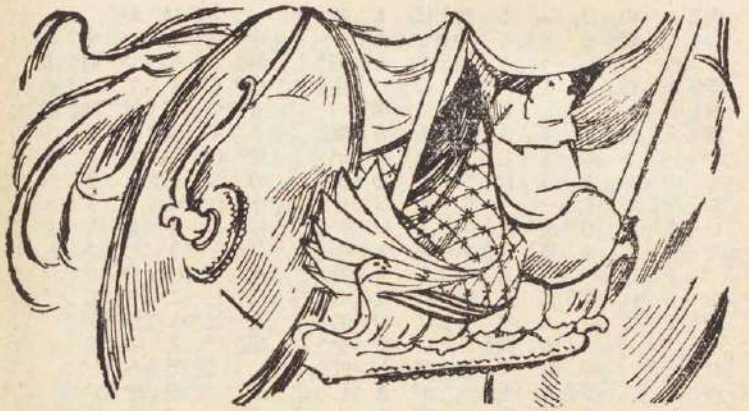
中將はこれこそ觀音さまのお告げだと思つて、大そう喜んで、すぐ九州へ下りました。

中將は博多から舟にのつて、西に向つて漕がせて行きました。十三日めにはげしい嵐がふいて來て、二十四艘も一しよに漕ぎ出した船がちり〳〵ばらばらになりました。その中で中將ののつてゐた船だけは波の上をゆら〳〵漂ひながら、それでも沈まずにとう〳〵千日めに羅刹國まで吹きつけられました。

四

中將はをかへ上がつて見ますと、空に頭がつかへるかと思はれるほど脊の高いまつ黑な人間が大せいあつまつて來ました。中將がこは〳〵笛を吹いてゐますと、みんなはそのまはりをとりまいて、笛の音に聞きほれてゐました。

やがて中將の笛の評判が高くなつて、鬼の王の御殿まで聞えました。鬼の王はお后の心をなぐさめる



ために、

『その笛をふく異人をよべ。』といひつけました。

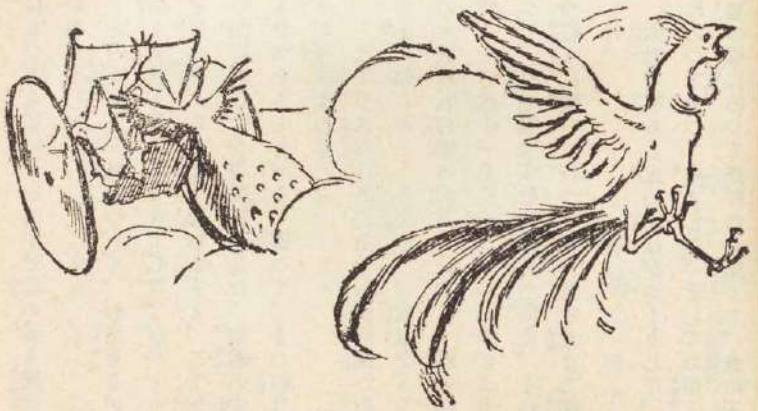
中將がよび出されて、御殿のきざはしの下で笛を吹き立てますとみすのかげに坐つてゐたお后が、その冴えた音色で中將のはる〳〵とたづねて來たことを知つて、大へんよろこびました。

するとそのあくる日、羅刹國のお隣の國からお使が來て、鬼の王を、その國の大宴會にお招きしたいといつて來ました。鬼の王は四千人の兵隊をつれて、三千里走る車にのつて出て行きました。出て行く時、お后のまはりに腰元を大せいつけて守らせて、

『留守の間異國の笛吹に笛を吹かせて、お后をお慰め申せ。五十日たてばかへつてくるから、それまで大切に守つて、かりにもそさうがあると、みんな八つ裂きにするぞ。』といひのこして、出て行きました。

そのあとでお后は、

『わたしのおかあさまの供養に、七日の間笛を吹いて、亡くなつた人のみたまをなぐさめることにしよう。』といつて中將を御殿の上にあげて、笛を吹かせました。そして七日の間毎晩お酒を出して御殿の中につめてゐる家來や腰元たちにのこらずのませました。もう七



日めの晩には、家來でも腰元でも、ごろ〳〵ごろ〳〵醉ひたふれてしまつて、まるで正體がなくなつてゐました。その中で中將はかまはずに笛をふきつゞけてゐますと、はげしい風が急に外から吹き込んで來て、お后の坐つてゐるお座敷のみすを吹き上げました。

中將と、お后の奥方とはその時はじめて久しぶりで顔を見合せてにつこりしました。

その晩おそく、奥方はそつとみんなのすきをうかゞつて中將のそばへ行つて、

『これから一緒に鬼の國を逃げ出しませう。』といひました。中將が

『どうして逃げよう。もしつかまつたら二人とも殺される。いつそいつまでもわたしがかうして笛を吹いて、あなたに聞かせて上げてゐる方がいゝ。』といひますと、奥方は、

『それには二千里走る車があります。それに乘つて逃げればいゝでせう。』

といつて、中將と二人、二千里の車に乘りました。けれどどういふものか、車はいつも鬼の王をのせた時のやうに早く走りません。二人は心配して氣ばかりあせつてゐました。

そのうち醉ひ倒れてゐた腰元たちの中に、夜叉女といつて、夜も

目もつぶらない、そのくせ笛の音も聞えない鬼の女がありました。

その女がふと氣がついて、お后をさがしますとお后も笛吹も見えませんでした。びつくりしてみんなを起してそこらぢう探しますと、二千里の車がいつの間にかなくなつてゐました。御殿の中もお庭の上もひつそりとしづまり返つて、まつ白な月の光ばかりが冴えてゐました。

そこで夜叉女はさつそくお隣の國へ行つてゐる鬼の王に知らせようと思つて、太鼓をうちました。この太鼓は五百里の太鼓といつて、羅刹國からお隣の國までの途中一里に一つづつ、つがふ五百かけてあつて、一つ鳴らすと一里先へ聞え、それから一里づつ順々に響いて行つて五百里の先まで聞える太鼓でした。

太鼓が鳴ると鬼の王はびつくりして、三千里の車にのつて戻つて來ました。そしてお后と笛吹が二千里の車にのつて逃げたと聞くと、鬼の王は髪の毛を

空まで逆立てて、太陽を二つならべたやうな目をまつかに光らせながら、また三千里の車にとびのつて追つかけました。

二千里と三千里ですからすぐに追ひつかれてしまつて、中將も奥方もいよ〳〵つかまりさうになりました。

するといつぞや都の天子さまの御殿へよばれて七日の間歌をうたつた迦陵頻伽と金の孔雀がとんで來ました。

迦陵頻伽が鬼の王の車をあとへ、あとへと蹴つけますと、金の孔雀は中將の車を前へ、前へと蹴つけました。

かうしてだん〳〵兩方の車の間が遠くなつて、鬼の王はとう〳〵地獄のどん底まで蹴おとされてしまひました。そして中將の車はめでたく日本の國へかへりました。

中將と奥方は都にかへつて後、いつまでも樂しくくらしました。（たはり）

シヤボン玉

（推薦童謡）

津路かほる

ポツカリ浮き出た
シヤボン玉

くる〳〵廻つて
赤が出た

くる〳〵廻つて
青が出た

見てたらしまひに
消えちやつた

（諸國傳說童話）

紅い菱の實

藤澤衛彦

その昔、姫入沼が、もつともつと大きな沼であつた時分、沼には、澤山の菱があつて、暑い夏の日が來ると、沼一杯に根狀の菱の葉が漲り、其間に、紅味を帶びた白色の四瓣花がちらほら咲きいでました。そして、秋になると、堅い角のついた果を結びました。

ところが、何時の頃ともなく、此沼に、菱の實を一人で取りに行くと無事に歸れないといふ言ひ傳へが生れたので、此沼に菱の實を一人で取りに行く者はなくなりました。

それを、村の粉屋の息子が、言ひ傳へなかまはずに、一人で、菱の實取りに行きました。はじめのうちは、給筏に乘つて取つてゐりましたが、何だか筏があぶなつかしく思はれましたので、ふと彼は陸に留いて來た繩の事を考へました。その日、彼は、隣家の婆さんから某家へ屆ける繩の一卷を頼まれてゐたのでございました。彼は、その事を思ひ出すと、

すぐに陸へ飛び上つて、よい加減のところを近くの樹の根方に結びつけ、他の一方の端を自分の腰に卷きつけて、再び池にとつてかへしました。萬一の危險があつても、もう大丈夫といふ安心がつきましたので、彼に、例のあぶなげな筏を乘りまはして、頻りに菱の實を取つてゐりました。

すると、いつの間に近づいたのか、一艘の舟が後からやつて來て、すい〳〵と彼の筏を追ひ越して行きました。見ると、船を操つてゐる人は綺麗な女の人で、その人も菱の實を取りはじめたのですが、その取る事の上手さつたら、瞬くうちに五六十個も取つたやうなので、彼は實際驚きました。それに反して彼は、行手々々に、その女の人に先に行かれるので、少しも菱の實が手に這入らなくなりましたので、これではならないと、方向を轉へようと思ふと、もう女の人の舟が漕いで出て、彼の筏より先に行つてます。彼が呆氣に取られて、其舟を見やりますと、同時に、女の人が振返つて、につこと笑ひかけました。

そして、

『三郎さん、この舟におうつりなさいな私が手傳つて取つてあげませう。

かう聲をかけるのでございました。彼は、どうしてあの女の人は自分の名を知つてゐるのだらうと、不思議に思ひましたが、それでも、あんなに菱の實を取る事の上手な人ぼないと思ひ込んでゐりましたので、行つて見ようと、漕ぎ進まうとしましたが、丁度、彼の腰の繩が張りきつて、彼を引きとめましたので、彼は、進む事が出來ませんでした。ほつとして、思はず彼が棹を握つて、ふと氣がつきますと、何時の間に來てしまつたのか、彼の筏は、沼の主の棲んでゐるといふ、沼の浮島に近づいてゐりましたので、驚いて、

『あぶない、あぶない。』

と、叫び出しました。それは、女の人に危險を知らせるつもりであつたのですが、女の方では、どう思つたのか、突然池の中に飛び込みました。彼は、それを助けようと思つて急いで、棹を伸して、女の人の捉るのを待つてゐりました。思つたより素早く女の人は彼の棹に泳ぎつきました。時に彼が、ひよいと其捉つて上つて來る女の手を見ますと、川獺の手でしたので、彼は、驚いて、何の用捨もなく、菱の實を切取る鎌に持つてゐた小刀を、いきなりその怪しい女に投げつけました。『きやつ』と言つて確に手答へがあつて川獺は沈む、水面は忽ち血汐の色に染まりました。三郎は、恐ろしくなつて、一所懸命になつて筏を漕ぎ戻して逃げ歸りましたが、その事あつてからこつち沼の菱の實は血の色をして出來るので、氣味わるがつて誰も取るものがなくなつたといふことでございます。

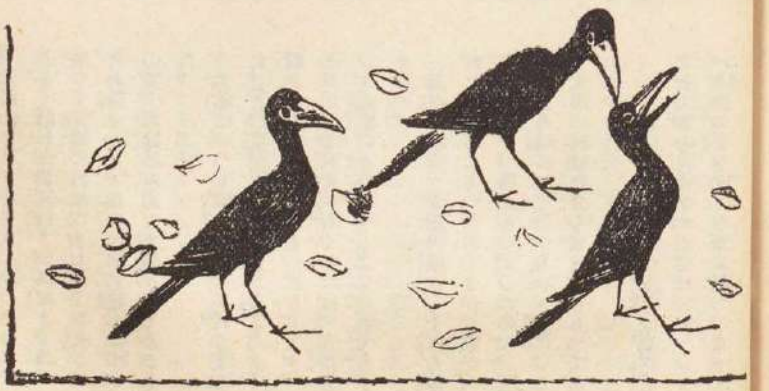
それから幾百年か經ちましてからのお話です。その時には、さしもに大きかつた沼も、今のやうに狹つてしまつてゐりました。そして、沼の浮島が變じた干潟に城が築かれ、池は濠の姿にかはりました。ところが、其城も轉て滅亡の運命に置かれました時、城主の姫君も城と共に亡びようものと、寶を抱いて、この濠池に投身せられました。その時、姫君は緋縮緬の長襦袢を着ておいでゝしたから、濠の水草は、菱ばかりでなく、何でもどんより赤い色に漂ふといふ話もございます池の名を、姫入沼といふのは、其時からでございます。（諸中の話）

上野のお山

野口雨情

上野のお山の
かん鳥
神田の子供は
何うしてて
表の　通りで

遊んでて
上野のお山の
かん鳥
神田の子供は
何に見てて
何んにも見ないで
屋根見てて



勇敢な少年

齋藤佐次郎

一

支那の滿洲で、篠川太郎といへば日本人ばかりでなく、支那人の間でも誰一人知らない者のない位有名になつてゐるさうです。どうしてかう有名になつたか、その事についてある人からくはしい話を聞きました。

二

篠川太郎のお父さんは、日本人としては極く早い頃、滿洲へ移住したのでした。その頃の滿洲はまるで荒野のやうになつてゐて、廣い野原の中にポツン、ポツンと人家があるだけですから、時々馬賊が出て來て人を殺したり、物を盜んで行つたりしました。太郎は、かういふ中で育ちました。

太郎は毎日、お父さんのいひつけで五里も離れた梨花村といふ町まで馬に乘つて買物に出かけました。お父さんもお母さんも、畑の仕事に忙しかつたので、用達はみんな太郎がしてゐました。

太郎はいつも鐵砲を持つて行きました。それは途中に馬賊が出て來て、よく殺されるやうな事があつたからです。それからまた町へ行く時には、五市といふ近處の少年を一しよに連れて行きました。

五市の家は、太郎の家から十町も離れたところにあつたのですが、家が大變に貧乏で、馬がゐなかつたので、買物に出る時には、いつもい、幸にして太郎の馬に自分も乘せてもらつて出かけました。

ある日のこと、二人の少年は梨花村でその日の買物をすませたので、バカバカ蹄の音を立てながら歸つて來ました。

たが、途中まで來た時、ふいに嵐に出あひました。

滿洲の嵐は內地のとは比べもつかない程物凄いものです。ビユー……と風がうなつて、通つたかと思ふと、たちまち赤土をもう〳〵と卷上げて、晝間なのに邊りは暗くなつてしまひました。何處も彼處も見えなくなつてしまひました。そのうちに、盆をくつがへしたやうな雨が、風と一しよに襲つて來ました。

馬も不意の嵐に驚いたのでせうか、ヒ、ヒーンと一と聲いなないて、二三町も一息に駈出したかと思ふと、忽ちビーンと逆立ちになてしまひました。太郎と五市は不意を食つたので、ドーンと地面へはね落されました。馬はそのまゝ矢のやうに駈けて行つてしまひました。

しかし、幸にも、太郎も五市も怪我一つしませんでしたから、すぐと起上つて嵐の中をどん〳〵駈出しました。

森の中まで來た時、一軒の丸太小屋がありました。二人は夢中でそこへ駈込みました。

三

やうやく嵐からのがれた太郎と五市は、ホツと安心して壁の落ちた暗い小屋の中を見廻してゐましたが、思はずぎくりツとして驚きました。

この丸太小屋は幽靈が出るといつてこの邊の人達から恐れられてゐる家だつたのです。今から三年ほど前に、この家の主人と二人の息子と、それから娘達が馬賊のために皆殺しにされた家でした。

太郎と五市は、その時のことを思出すと、殺された人達が怨めしさうに出て來る樣な氣がして身顫ひを感じました。といつて、外の嵐では出る事も出來ませんから、二人は部屋の片隅に小ちやくくつつき合つて顫へてゐました。

森はゆれて轟々と鳴りました。嵐は丁度眞最中と思はれました。

と、その時、一人が窓の外を見ると、馬に乘つた四人連れの男が、森の中をトツトと全速力で駈けて來るのが見えました。この四人連れも嵐を避けるために、この小屋を目がけて走つてゐるやうでした。

『あゝお仲間が出來てうれしい。』

二人はそう思つて喜んで見てゐましたが、近づくに從つてその四人連れは、恐ろしい馬賊の群である事がわかりました。

少年達は驚きました。でも、もう今となつては、彼等に目つからずに逃出すことも出來ません。

太郎は、あわてゝゐる五市を靜めながらふと上を見ると、家根裏が物置場になつてゐることがわかりましたから怖いことも何も忘れて五市と一しよに夢中で汚い梯子段を駈け上りました。

そして、其處に積んであつた枯草の中へもぐり込みました。家根裏の床にはところ〴〵に大きな節穴があいてゐました。太郎はそこから下の部屋の樣子を窺ふことが出來ました。

馬賊は小屋の前に着きました。ひよい〳〵と馬から飛降りた四人の馬賊は壞れた戸をドン〳〵蹴破つて入つて來ました。

馬賊どもは、部屋の中を一と通り見て歩きましたが、誰もゐなかつたので安心したやうに、

『おい〳〵、早く馬の鞍をといて小屋後へつないで來たらいゝだらう。』

と、隊長らしい男がいひました。この男は、家の樣子を大變よく知つてゐるやうでした。

馬賊どもは馬をつなぎ終つてしまふと、今度は部屋の破目板をめり〳〵とへがして、それで焚火をはじめました。火はぢきに燃上つたので馬賊どもはその周圍を圍んで濡れた着物を乾してゐましたが、それも濟むと、一人の男が酒の入つた德利を出しました。

皆なは待ち兼ねたやうにがぶ〳〵飲みはじめました。

四人の男はいゝ氣嫌になつて、頻りと何かおしやべりを始めました。しかしその聲は外の嵐に消されて家根裏の少年たちには何をしやべつてゐるのかさつぱり聞きとれませんでした。

それから間もなくすると、嵐がだんだん靜つて來たので、馬賊の話聲がはつきりして來ました。

隊長らしい男は皆なに向つて、呶鳴るやうにかういつてゐました。

『おい〳〵、默つて俺の話を聞きなさい。何故俺がこの家の樣子をよく知つてゐるか、その譯を話すから。』

外の三人の者は、何を隊長がしやべり出すだらうと思つて、ピタリと默つて隊長の顏を見ました。

『さア話すよ、今から三年ばかり前のことだが、丁度今日のやうにひどい俄かの嵐の日だつた。俺は十八人の仲間を連てこの森に差しかゝつたが、どうしようつたつて一軒も家はなし困つてゐると、丁度この家が目に入つたのだ。あゝいゝあんばいだと思つて皆なしてどや〳〵押しかけて行つた。すると、おやぢらしい爺さんが二人の息子と五人の娘たちと聽じさうに食卓をかこんでゐたよ。そこで、俺が皆なを家へ入れて泊めてくれといつたところが、その爺さんめ、大變な頑固者と見えてどうしても泊めないといつてきかないから、その場で殺してしまつた。その後は話さなくとも分つてゐるだらう。みんな片つぱしから打殺してしまつたのさ。』

『ハハ、、、、。』馬賊どもは隊長の話が終つた時、愉快さうに笑ひました。

しかし、家根裏の太郎と五市は身ぶるひを感じました。自分たちもそんな目に遇ふのぢやないかと思ひました。

馬賊どもはまだ何かおしやべりをつづけてゐましたが、その時、一人の男が『今度は誰の家を襲つてやらうかな』と言ひ出しました。と、馬賊どもは急に醉がさめたやうに大眞面目になつてしまひました。それは、彼等の職業だけに串戲事ではないと見えました。

すると、一人の髯をぼう〳〵と生やした男が、

『わしの考へでは、あの日本人の篠川太一といふ男の家がいゝと思ふがな。』

と、いひ出しました。

その聲を聞いた時、太郎はどんなに驚いたでせう。篠川太一といふのは太郎のお父さんではありませんか。

『何故わしが、篠川太一の家がいゝかといふ譯は、第一あの男は酒も飲まなければ、かけ事もしない。全く品行がよくて、つましい男だから、きつとお金を持つてゐるに違ひない。』髯ぼうぼうの男が、またいひました。

『さうだ。お前のいふ通りだ。』と、外の馬賊も聲をそろへて贊成したので、雨のやみ次第すぐ出かけて行かうといふ事になりました。そこで、今度はその手筈について相談がはじまりました。

太郎は、もうぢつとして聞いてゐる事が出來なくなりました。

『五市君、聞いたらう。すぐにどうと

かしなければ大變なのだ。君の家は僕のところより近いんだから、これから飛んで行つて、馬賊たちがいつてゐたことを君のお父さんに話して來ておくれ！　そら、あそこに幸ひ小さな窓があるだらう。あれから出ると、外へ出られるから。』

太郎は夢中で、五市にさゝやきました。五市はすぐに承知して、音をたてないやうに忍び足でそつと家根裏の小さな窓を越えて、外の地面へ飛び降りました。

丁度そこには、馬賊の乘つて來た馬がつないであつたので、五市はその中の一匹を引出して、ひらりとそれに飛乘りました。

四

五市が行つてから半時間もたつたでせうか。雨は、ぱつたりやみました。四人の馬賊はいよ〳〵出かけやうと立上りました。

あゝ、馬賊どもは太郎のお父さんやお母さんや可愛いゝ弟妹たちを殺しに出かけようとしてゐるではありませんか。太郎は身體中の血が、かつと一度に、頭へこみ上げて來たやうに思ひました。

太郎は、家根裏の大きな節穴からいきなり自分の持つてゐた鐵砲の筒先を突出しました。

それから大人の聲のやうな作り聲をして呶鳴りました。

『止れ！　動いた奴は打殺すぞ！』

馬賊どもは、不意を喰つたのでビタリと電氣に打たれたやうに立止つてしまひました。隊長はその時三人の者の蔭になつてゐましたが、そつと腰から氣づかれないやうにピストルを出さうとしました。太郎は、すぐそれと見てとりました。

隊長のピストルが焚火の陰にギラギラと光つた時、ドーンと一發、太郎の鐵砲から煙が迸りました。彈丸は美事に隊長の心臓を貫きました。

『あッ！』

隊長は叫んで、ぱつたり後へ倒れました。殘つた三人の者は、度膽を抜かれて石のやうに突立つたなり身動きも出來なくなりました。

しばらく經つてから、一人の馬賊が、

『やい！　そこにゐる奴は誰だ！』

と、家根裏に向つて、顫へ聲で叫びました。

太郎は默つてゐました。口をきくと、子供だといふ事がわかつてしまふので鐵砲だけ突出してゐました。馬賊の方では、何の返辭もないので、却つていよ〳〵怖くなつて來ました。

さて、この場がどうをさまりがつくか、誰にも分ることではありませんでした。

その時、髯もぢやの男が、

『おい！　』と息に逃げ出さうぢやないか。』

と、傍の男にさゝやきましたが、一足でも動けば彈れると思ふので、誰もそれに從ひませんでした。

そのまゝ、一秒々々と時がたつて行きました。

馬賊どもには一分間が幾時間ものやうに思はれました。家根裏の太郎もやつぱり同じ氣持ちでした。しかし、本當には五市が行つてから一時間にもならないのでした。

その時に、外で蹄の音が騷しくしました。間もなく、戸を押破つてガタガタと鐵砲を持つた十二三人の男がとび込んで來ました。

先頭には、五市のお父さんが立つてゐました。

『さァ、もう觀がきないぞ、この野郎！』

五市のお父さんがかう叫んだ時、皆なは一せいに馬賊に筒先を向けました

馬賊どもは、新しい强敵に出あつたので、もういよ〳〵運のつきだと思つたのでせうか。ピストルを出さうともしないで、そのまゝ降參してしまひました。

皆さん！　もうこの先きはお話しないでもわかつたでせう。たゞこれだけの事はお話して置きます。生き殘つた三人の馬賊は、土地の警察官に引渡されましたが、やがて牢へ入れられたさうです。

それに引代て、太郎と五市の勇敢な行ひは大變な評判になつて、殊に太郎はお父さんお母さんや、弟妹たちの殺される筈の處を救つたといふので、いよ〳〵評判になりました。

太郎は、それから後になつて、まだまだ澤山の勇敢な行ひをして名を擧げましたが、あまり長くなりますから、そのお話はまた今度に讓りませう。

（をはり）

自由畫「私の家の床の間の置物」（賞）

東京市牛込小學校　伊藤登良男

童謡　野口雨情選

雁の歌

東京　細野まんまる

ひよわな母さん
青い顔
雁がかよ〳〵
月の夜ね
母さんわたしも青い顔

わたしもひよわで
青い顔

忘れんぼ

東京　北澤ふじ子

鳥の母さん　忘れんぼ
子供が可愛と言ひながら
よそへ行つたらその日から
おうちへ歸つて來はしない
鳥の母さん　忘れんぼ

赤い花

京都　藤原多賀子

小さい流れに
赤い花　一つ
だれが流した
水よ　氣をおつけ

雛鶏

岩手　渡邊恒彦

とりごや　かたこと
音がした
雛鶏ピィ〳〵鳴いてゐる
すみからすみまで
蚊が一杯

燈籠

千葉　篠田ちよ

お庭の燈籠
洒落燈籠
青い蔦の葉頭にまいて
ツンとすまして

立つてゐる

林檎

京　木谷末次郎

林檎が　コツンと
おつこちた
誰も知るまい　知らせまい
默つて拾つて
食べちまはう

赤んぼ

横濱　澁本美津江

赤んぼがお目をはらして
泣き出した
ねん〳〵おころり唄つても
大な涙をころがして
大なおこゑで泣き出した

路

河口政明

でん〳〵の　通る路
きら〳〵　金の
光る路
ぎんぎらぎんの
銀の路

緋鯉

東京　中島佳代子

緋鯉は泳いでゆきました
青いガラスの部屋のおく
お父さまが　およびかい
お母さまが　およびかい

金の船

廣島　牧野眞砂子

きん〳〵きんの金の船
お寶積んだ金の船
きら〳〵きら〳〵光つてる
日本國中　光つてる

蝙蝠

大阪　小田切央

自由畫「朝顔」（賞）

滋賀縣伊香郡古保利校高二　木俣修二

自由畫「葉ゲイ頭」（賞）

仙臺市東二番町小學校等四　竹川久子

風船

東京　小林富美江

風船　風船　どこへゆく
空へどんくあがります
ほつちやん　ねんちやん
さやうなら

振袖

大阪　稻垣ひろし

振袖ふりくく
歩いてる
なーんぢやいのう
なーんぢやいのう

蜻蛉の畫寢

千葉　山田白羊

遊びつかれた
畫寢の　とんぼ
ぱつちり　眼玉か
陽でこゆた

蝙蝠來い

蝙蝠來い　蝙蝠來い
蝙蝠傘　さして來い
蛍の提灯
買つて來い

舞踏

東京　内藤初津江

ティ　ティ　ティ
小人の國の舞踏會
金のともしび
ちーらちら
銀のともしび
ちーらちら

お豆

福島　西形綠葉

あつかろお豆
ほうろくの中で
着物も足袋も
焙られつちやつた

星

東京　高田久仁美津

遠いお山の
てつぺんに
ひとりぼつちのお星さま
ひとりぼつちで
ピーカピカ

赤んぼ

秋田　飯田ひかる

オギヤー
オギヤー
泣くな
笑へ　笑へ
赤ンぼ

九助爺さん

横濱　カネーション

九助爺さん　どうしたの
狐にとられて
まるはだか
まるはだか　まるはだか
狐にとられて
まるはだか

眞赤な花

東京　島田信一

どなたも名前を
知らない花が
お背戸の藪に
眞赤に咲いた

かまきり

新潟　此間陽

なーんだ
怒つてるのかい
きりくかまきり
物言はぬ

家鴨の子

東京　名和青泥

小さい可愛い家鴨の子
羽根がチヨツピリ
まだ飛べぬ
盥の中を　ツーン　ツン

自由畫「千日草」（賞）

東京市外千駄ヶ谷小學校等六　松原武子

幼年詩

若山牧水選

くも（賞）

福井縣大飯郡高濱小學校高二　鳴戸正直

年をとつた大くもが
あみに何もかゝらぬので
腹が減つてたまらない
毎日々々のそり〳〵と
あみを見廻つて居る。

評、子供の歌ではあるが、何だか大人の歌より大きい歌の樣に思はれます。（牧水）

いけ（賞）

山梨縣北巨摩郡小淵澤小學校尋六　宮澤さと子

いつもひてゐたいけに
水がたまつた。
やなぎがしだれて
うつつてゐる。

評、實に靜かな歌だ。そしてさと子さんの性質もさうであらうかと思はれる歌だ。（牧水）

月夜

久留米市莊島小學校尋五　增田哲夫

丸い丸いお月樣
寢床の上に寢て居ると
冷たい光りがさしこんで
私のお家の番をする
コツトン〳〵時計の音に
靜かに歩むお月樣

評、これも靜かでほんとにおとなしい歌。（牧水）

初きのこ

千葉縣山武郡千代田村　岩澤佳子

私は山の細道できのこを一つとりました
もつと〳〵澤山取つて都の叔父さんに
送つてやりたい初きのこ

評、初きのこの樣に清らかなやさしい心持がよくわかります。（牧水）

綴方

編輯部選

今年の夏休（賞）

愛媛縣越智郡宮田校尋五　日浅文代

もう一週間、もう五日と長い間待ちかねて來た夏休もたうとうすんでしまつたはじめから一々考へてみますと、ついたちにあたつた日は、電氣も休であつたから、石風呂へ行つて面白く遊んだ。次からは毎日せはしいので、遊ぶことも出來ないで手傳をした。また次の日も、次の日もせはしくありました。あんまりせはしいので、夕方などにはきちがひになるのかと思ふほどです。それで七夕樣の日もろく〳〵遊べなかつた。皆お友達は面白さうに畫からさゝを流しに濱へ行くのを、私は見るたびに行きたくて〳〵、裏の道の所へ行つてかゞんで見てゐると、思はず涙が目のふちへたまつてきて、かなしくなるばかりであつた。それから毎日毎日同じ事ばかりでした。誰でもいそがしいと、夜になつて足が折れてのくやうな心持がするので、二十日のお大師さんも、私は向の子と行つたきりで、家の者はだれも行かなかつた。またおぢざうさまの時でも、少しもおもしろくなかつた。この十日程前からは、二日に一度涙の出ない日はなかつた。けれども、二三日前、二三日ほどおもしろくすごしました。

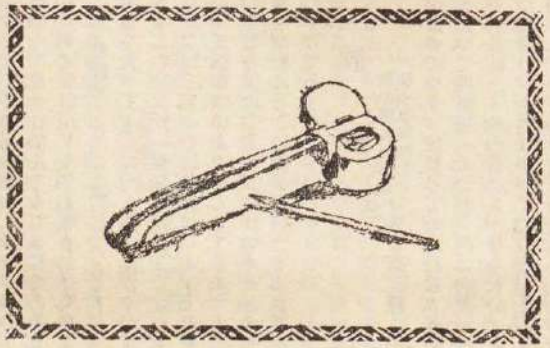
今日は非常につらかつた。これでも姉さんさへ元氣であつたら、私は樂なのに、いつも東へ行つて遊んで來るのにと思つて、お母さんに云ふと、もう四五日だからしんぼうして手傳つてくれといふてくれてうれしかつた。ほんとにどうして今年の夏休は面白くないのであらうと思ふと、よけいにかなしくなつて、學校へ行く方がどんなにおもしろいかわからないと、何時も思ひますけれども、そんなにいつもさびしく思つてはいかないから、第二學期にならふ道眞の所のしらべや書取をしてみると樂しかつた。

二學期の九月一日の朝、おはようと云つて先生や皆さんに逢ふことはまことにうれしい。そして一生けん命にならはうと思ふと、學校へ行くのが樂しみでなりません。

自由畫「びは」
千葉縣佐倉小學校　小野篤

雨の日（賞）

山梨縣西八代郡上九一色小學校尋六　土橋郁子



自由畫「矢立と筆」
山形縣酒田町鷹町　齋藤與助

犬

呉市清水通小學校尋五　山中喜美枝

犬が、ワンワ、
それは、こじきが、ゐるからよ。
しずかな、秋の、ひるでした。

評、西洋の繪のやうです。(牧水)

秋の夕暮れ

横濱市一本松小學校尋五　ハル　闘

何を釣る灯か
チラ〳〵〳〵と
秋の夕暮れ
舟が行く。

評、美くしくさびしい景色。(牧水)

こほろぎ

福井縣大飯郡高濱校高二　濱田久雄

ころころころころ
こほろぎ
小さいからだの
こほろぎ
石の間で
鳴きとほす

評、つゆの樣なこほろぎ、黒水晶のかけらの樣なこほろぎ、ほんとに聲のいゝかはいゝこほろぎ。(牧水)

うみ

東京市本所太平町　島田信一（十四歳）

東京灣はあれねども
遠くの沖は
あれてゐる。

評、少し直しましたが直した方がいゝでせう。(牧水)

鳳仙花の子供達

東京市外淀橋町柏木　日向ナナ

青いさやからはね出した
鳳仙花の子供達
どこへ行つてうちたてる
あつちこつちにとびだした
鳳仙花の子供達

評、これにもすこし手を入れました(牧水)

秋風

山梨縣小淵澤小學校尋六　名執代介

雲にのつて果てしない大空をフハリフハリかけてると後から誰かォ、イ〳〵と呼んで追つかけてくる樣な氣がする。だん〳〵それが近づいて來たと思つたら眼がさめました。母がおこしに來てくれたのです。座敷を出るとザァッと云ふ雨の音が急に押しよせて來ました。又降つてゐるのです。もうこれで四日かな五日かなと考へながら外に出て見ると相變らずの大降りでおまけに風さへ少し出てゐるやうです。向ふの山の邊を白い雨足かえらい勢ですぎて行きます。どの山も頂は霧で見えません。

もろこしは皆ころんで裏返つた白い葉が光つて居ます。庭の水は泥や石ころを押し流してゴウ〳〵とせぎを下つて行きます。風が來る度にザァ〳〵と吹きかけて庭木や稻や何でもかでも一押しに頭を下げさせて行きます。下の馬さんも今起きたのか戸を一本あけたばかりですつぱだかに褌一つで、合羽をきて庭の水をせいでゐる父と話してゐます。『どうも荒れねえいゝがな、これで荒れちやあ』『さうよ、まだなあ一晩に一寸宛ものびると云ふ時に吹かれちやあ、そりやあそうとお蠶のある者は泣いてるら』『あゝあゝ、貞んとこなんかぢやあ家中總出でグショぬれで桑摘んでたつけ摘んでもぢきにやあ乾きもしす』又雨がザーッと吹きかけて來ました。私は寒くなつて家にはいりました。朝飯を食べて少したつと馬さんがやつて來ました。父が『低氣壓が又どこかへ來たかな』と云ふと馬さんは『あゝそれ見ろ今玉嶽の頭の上をはしつてらあ』と云つて皆を笑はしました。『川の水がふえたな、赤野んとこの橋あ危い』とお茶話をつゞけてゐます。

散髪

福井縣大飯郡高濱小學校高二　大野憲一

『ごめんやす、散髪しておくれなされ』と云つて散髪屋へ入つた。向ふの腰かける所には三十餘の女の人が子をだいて坐つて居た、主人はやがて『何處の子や』と問ふた。『中野の大野』と云ふと『生年月日は』と主人は笑ひながらまた問ふた。僕はへゝーと笑ひながら顔をそむけた。『それはじやれや(ばば)今して上げるで』でさがすけれども清次と云ふものは居らんので困つて居る。此處らで崎山へ入院して居る者はないでせうか』『へエー大概な人は知つて居ますがそんな人は知りませんなァー』と主人は云つて巡査の顔を見た。『おゝきに』巡査はかう云つて出て行つた。後で主人は家内の人と『ひどい者もあるもんやなァー、いしやをたほしてまで』と云つて二人は互に石田清次とか云ふ人をのゝしつて居た。間もなく散髪は出來た。きはをそつて貰つて頭を洗つた。そうして代金を拂つておいて『おおきに』と云つて散髪屋のしきゐをまたいだ。主人は子供に氣をとられて返事がない。其のまゝ僕はかへつて來た。

岡崎にゐた時の野村君

千葉縣佐倉町宮小路　小野篤

僕が岡崎にゐた時に、一番よい友だちは野村君でした。野村君はせいせきのよい人で、學校に行つても二人でかけつこやおにごつこもしました。學校に上つた時から一つしよに遊びました。

野村さんとはすゐぶんおもしろく遊ん

吹け〳〵秋の風
池の水へ小波たてろ
大きい松を
ゆさ〳〵ゆすれ

評『大きい松をゆさゆさゆすれ』この句だけでいゝとおもふ。(牧水)

テツポウ　山梨縣北巨摩郡多麻小學校尋六　五味久男

スバメヲドシノテツバウハ
山ヲツラヌキ
マダムカフマデ
キコエル

話　東京市本所小學校尋四　中村ツル

黄ろい菊の花に
蟲が一匹とまつてる
何を話してゐるのだらう。

かあさんと坊や
かあさんすや〳〵
ねてゐる間に
坊やはいたづらをしてゐる。

でゐましたが、をしい事に廣島の方にひつこしました。それから手紙をくれました。それから僕も佐倉に來ました。

今はどうしてゐるでせう逢ひたいものです。

おこしつこ　神戸市大開小校學尋六　高橋久藏

此の間の事でありました。

正ちやんが私にどんぐりでおとしつこをしようと言つて、大きな〳〵どんぐりを持つて來ました。けれども私のは小さいから負けると思つて、

『やめだい』と言ふと、

『ひけふ者だなあ、ようせんのか』

と、わる口を言ふのでしかたなくて、しました。その仕方はふとんのすみを、下へおり込んで、その上でどんぐりをまはしてバチンとはねて敵を下へおとしたら勝になるのです。私は力一ぱいでまはしてもすぐにはねられて、六べんも七へんも負けました。所が十べん目にどうしたはづみか私のはうまく正ちやんのをバチンとはねおとしたのです。

『勝つた〳〵小さい方がつよいぞ』

と、嬉しまぎれに言ひましたので正ちやんはつまらないさうにして歸つて來て皆に笑はれたさうです。正ちやんは、

『それでも九へんも勝つたから、僕の方がつよいんだ』といつて泣いて又皆に笑はれたと四五日してから定ちやんがいつて居りました。

しやぼんや　茨城縣眞壁郡若柳校尋六　田宮忠三

『こんちは』といひながら、かどのはうからはひつて來たしやぼんや『おはしはいりませんかねい』母がかつてのはうから『どういふしなだねい』といひながら出て來た。はしをもつて來てひろげはじめた。そしてかざりはじめた。

『これがね、十八錢でね、そのつぎ、十錢ですよ。こんなやすいもんだもの、こんないかいしんしようで、はしの一ぜんや二ぜんがぐらいかつてもこまんめいがなあ』といつていぢめてゐる。母が『これはいくらだな』ときくと『これは四錢です』といつた。そして十錢のと、十八

赤とんぼ　愛媛縣越智郡富田小學校尋五　渡邊ミツヨ

赤とんぼがをどつてる
おもしろさうにをどつてる

きのこ　山梨縣北巨摩郡多麻小學校四　赤坂義則

雨がふつて
おやまのおくの
一すぼうしが
かさをかぶつた

とち　山梨縣小淵澤小學校尋六　進藤滋治

お宮のにわでひろつた
とちのみをどこかへ
なくした

オヒサマ　東京市大塚小學校尋一　タカタトミエ

アカルイソラニ
オヒサマ
テカテカテカト

錢のはたかいだけにねうちがありやんすかねいと、たかいのかはせたくていつてゐる。それなので、一ぜんかつたら、そこへいもうとが來て、おつかさんおんにもかつてくろうといつたので、二ぜんかつた。そうしたら十四錢とられてしまひました。

兄さんのおみやげ　茨城縣猿島郡境町小校尋四　林智恵子

私の兄さんは東京へ行つて居ります。さうして大學校へ行つて居ります。此度何か御用があつて、家へ歸つて來るといふ事をいつて來ましたので、うれしくてうれしくて毎日お母さんや妹達と心待ちに待つて居りました。兄さんの來るといつて來た二十二日は朝から曇つて居りました。それに寒い〳〵風が吹いて居りました。今度兄さんのおみやげは何んだらうかと思ひながら學校へ行きました。學校に居ても何んとなくうれしくて、早く家へ歸りたう御ざいました。早く授業がはればいゝなーと思つて居ると、先生のお話をすることがちつともおもしろくはありませんでした。放課の鈴の鳴るのが待ちどほしうございました。午後二時に授業がはつた時は、たゞうれしくてうれしくてかけ足で家へ歸りました。兄さんはもう來て居りました。妹達は兄さんをとりまいて、一しよに笑つたりさわいだりして居りました。妹達はゑ本を一册づつ持つて居りました。私も上つておじぎをして兄さんから雜誌を一册いたゞきました。どんな雜誌かと思つてをりましたら、童話の雜誌なので、うれしくてうれしくてすぐ二階へ上つてそれをよみました。大へん面白い本でありました。

ある日　千葉縣山武郡東金小學校尋五　山口ふみ子

ある日お父樣と私と妹と三人で海へ行きました。所がお父樣は着物をきて居られたので、海へはひる事はできず、砂原で私たちの面白く遊んでゐるのをみていらつしやいました。私はしらず〳〵に遠くにいつてしまひました。そのうちに木村さんがきました。それでなほ遠く人いつてしまひました。少し大きな波が『さ

ヒカツチキル
ワタクシハイヤドウシテ
オヒサマ
ヒカル　ノ　デセウト
カンガヘテマス

カ　ゲ

東京西巣鴨時習小學校尋一　オカヅエウメヲ

大キナカゲ　トウサンノ
小サナカゲ　ワタシノ

ア　ブ

山口縣御井町白潟　三宅正克（五歳）

アブアブ
ハシラヲハウテアガレ
ヤネヘアガレ

花　賣

東京府淀橋町柏木九七七　藤留編

花屋さんが花賣に來た
『花ーい』『カチ〳〵〳〵』
『花ーい』『カチ〳〵〳〵』

ぶん』とかぶさつたので私は妹をかたてにだいたまゝ『ぶく〳〵〳〵〳〵』と水をのんでしまひました。私は大きな聲をはり上げて『木村さんたすけて下さいたすけて下さい』といひました。すると木村さんは困つた樣子もなく笑ひながら、べつにびつくりもせずに妹の手をひつぱつて『まさ子さん』といつてくれました。まさ子はかみのけをおばけのやうにまへゝうるさいやうにさけて『アン〳〵〳〵』とないてゐて、何にものをいひませんでした。私はかほ色をかへてきけんをとつてゐました。しかしまさ子はなか〳〵だまりません。そのうちに、お父樣が『ふみ子』とおよびになつたので『はい』とへんじをしてとんで行きました。するとお父樣は私の方を向いて『まさ子はどうしたの』とおつしやいました。私はたゞ『ぶく〳〵をした』といつただけでなんにもいひませんでした。妹がでてきてすつかりそのわけをはなしました。お父樣は笑つていらつしやいましたが、そのうち妹が『片貝の海のばかやろもうこんな海なんかにくるものか』といつたのでみんなで笑つてしまひました。それから又海へくるやうになりました。しかし海へいつても波がくると岸の方に逃て行きます。

妹

茨城縣結城郡五箇校尋六　廣瀬とく

妹が五歳で、私が七歳であつた。その時は冬の中頃で寒かつた。その日は臺所に大きなひばちを出して、おばあさんと私と妹で、あたつて居るところへ、お松さんが來た。おばあさんは『お松とく（私）と土手に行つて木をひろつて來へ』と言つたので私とお松さんで、ウバ車をがらがらとひいて土手に行つて、木をたくさんひろつてお家へかへりました。おばあさんは倉の鍵をきつきつと開けて、たくさんのいもをざるに入れてもつて來た。いもはだんだん煮えるので、私とお松さんはまた木をひろひに出て行つた。臺所には妹一人でゐた。たくさん木をひろつてかへつて來たところが、妹は火ばちの中へかほを入れてつゝぶして居たので、たまげて兄をよばつた。おばあさんもたまげてかけて來て、妹をだきあげて、す

『花はいかゞで』『カチ〳〵〳〵』

花　火

福島縣磐城郡赤井第一小學校尋三　渡谷登

ボン〳〵となつて
ボンと出た。
きれいな火の玉
スーときえると
あとはまつくら

蟻

兵庫縣武庫郡住吉村山田　笠井利通

こんきな蟻よ
なにしてる
たくさんよつて
蟲の死んだのもつて行く

空

茨城縣結城郡五箇小學校尋五　谷田部郁三

今日雨だと
思つたら
空はまつさを
よいお天氣

ぐ『いしやに』と言つてつれて行きました。かへりには妹は顏一ぱいにホータイをして來た。

水の輪

東京本郷元町小學校尋六　中坂石次郎

水いたづらにもあいて、ほつほと煙をはいていせいよく走つていく汽車を川の中から見てゐた。
『石ちやん石なげしない
と弟がとつぜんいつた。それは面白からうといふので僕も俊ちやんも川ばたの小石を拾つた。
『ドブン』『ドブン』『ドブン』と三つの石は交る〳〵音をたてゝ、すきとほつた底へ沈んでいつた。水面には三つの輪があとから〳〵とできた。
『あいつが僕のだよ。一番大きいのが』
と俊ちやんがいふと、
『あんなのなんだい、僕のが大きいぞ』
と弟もまけんきになつていつた。
『ドブン』『ドブン』『ドブン』となげられるあとから、水の輪は入りみだれてひろがつていつた。

ある日の事

弘崎市朝陽小學校尋六　石黑サダ

奥の方で、子供達がぐわう〳〵さわいでゐるので、奥の方にいくとさわぎがやんだので、どうしたのだらうと思つて、わきの所にかくれて聞いてゐると、子供達は知らずに、その中の一人の聲で『おひるめつこやるべしねは』といひました。するとそこにゐた子供達は皆一同に『そんだ』といひ、びしろをもつてくるやら、板をもつてくるやらしてやうやくだうぐがそろつたやうでした。すると私の妹らしい聲で『花こもつてきて賣るべよ、こだの買ふじよ、こだのやればねねは』といふと、みんなはそれにさんせいして三人づつぐらゐに組んで二組に分れました。そのうち花などもそろつて賣り買ひするによいやうになると、向の方の女の子供がこつちの方に來て『これあ東京べんつかつてやるでしねは』といふと、こつちの方の子供が『あゝ』とちよつときいてから『それからその方で今かねゐるかはで先こゐてへ』と云ふてゐました。

通信

自由畫の評

山本鼎

△今度の成績はなか〳〵優良です。伊藤登良男君の「私の家の床の間の置物」は沈着に個個の形を見、そして全體がすらりと描けてゐていゝ氣もちです。

△木俣君の「朝顔」は落着いて物を見てあります。唯淡淡としての感じ方が單純です。だから畫に自然の立體觀的な奥ゆきがなく、標本的に硬化してゐます部分々々の形を克明に追求するよりも形と、形との關係――その調子の强弱をもつと注意するんですね。

△竹川久子さんの「葉ケイ頭トキタ」は色鉛筆畫ですが、コセツかずに美しく描けてゐます。

△松原武子さんの「千日草」美しい畫です。

△小野篤君の「びわ」は、びわが標本的でがよく描いてあるのがいゝ。置かれてあるびわであり、丸味のあるびわであるのがいゝ。

△齋藤與助君の「矢立と筆」はいゝ寫生畫です。正しいしうまいです。

幼年詩選後

若山牧水

青葉の上の調子やほんのうはべだけの口調のいゝのゐ（幼年者の作としては特に）採りたくない。矢號へ推薦してある『川』の一篇などまるで散文じみてはゐるが、然しきうした自然の一現象に對して心を踊らせてゐる一少女の心の調子は、かなり明らかに一篇の上に出てゐると思ふ。ことに「草や木を、兩方に押し分けて流れてゐる」といふあたりはいゝ。入賞の蜘蛛に就いても同じことが云へる。同じく「池」の微妙さ。これらが子供たちの手になつたと思ふと恐いやうだ。すべてが「自然」の一斷片でないものはない。イヤなこしらへものではないのだ。青々しい葉を摺りつけた清らかさがある。

それから謂はゞ小品ともいふべき種類の作に佳いのがある。例へば本號の進藤滋治君の『線』のごときがさうだ。お宮の庭で拾つた、線の實を、何處かへなくした」といふ。一すした「子供の呼吸」の微妙さはなか〳〵に有難い。何處かへなくしたと云つて一寸振返る樣なこゝろもち、それが實に自然なので、よく清らかに響いて來る。然し、この種の作の中にはよく一種の「思ひつき」の機智を弄したものが混りがちで、油斷が出來ない。

その機智から逃れやうとしてか、（若しくは自然とそれに遠ざかつてゐるのか）餘りに平板單調なたゞごと歌を作らせてゐる學校を茨城千葉あたりに見受けゐる。これも困ゐる。たゞ何でも、云ひさへすればいゝでは歌にはならない。

とにかく號一號と佳くなつてゆくので非常に樂しみだ。（十月四日、信州白骨の湯にて）

綴方の二つの例選

者

今月賞にあたつたのが二人とも女の方であつたのもめづらしい。で、日淺さんの「今年の夏休」といふ方は、自分の心に感じたこともありのまゝに書いたものですし、土橋さんの「雨の日」は、自分の眼に見たことをありのまゝに書いたものです。大ていの綴方は、この二つに分けることができます。どちらがいゝかといへば、どちらもいゝといひます。どういふ風に書くにしても、しつかり書けてゐるのが一番いゝのです。しつかり書けてゐるとは、うれしかつたとか、悲しかつたとか苦しかつたとかいふこと、あるひは空が青々とよくはれてゐたとか、雨が降つて木の葉が美しく見えたとかいふことが、はつきり文の中に出てゐることです。

この意味で、日淺さんのも　土橋さんのもよくできてゐます。二人の物の感じ方、綴方がはつきり文の中に出てゐます。（ヤマモト）

童話選評

齋藤佐次郎

△今月集つた童話の數はすばらしいものでした。一と通り讀むだけでもかなり骨が折れました。いつものおなじみの作者の外に澤山の始めての方を見出した事は嬉しく思ひました。

△しかし、今月は傑作がありませんでした。白江好郎さん、伊藤溫子さん、寺島西男さんなどの作は相變らず光つてはゐますが、いつも程の上出來ではありませんでした。

△總體、皆さんが實にいゝ題材をつかんで居られる事を感じます。たゞ惜しい事に、書き現し方にもう一段の工夫をれがひたいのですお話の筋を上手に書いて行くだけでは、力がものです。澤者はいつか金の船へ「お母さんのお留守」といふ面白い對話を書いて下すつた方ですこの中にある「變な家鴨」だの、「樣の木」だのは有名なだけに非常にいゝものです。ぜひお讀みなさい。裝幀は岡本歸一先生です。（四六判、二二一頁　東京牛込區神久土町精華書院發行　定價一圓五十錢）

◆**太陽と花園**（秋田雨雀氏著）　現代第一流の童話作家といはれてゐる著者の創作童話です。著者の好んで使ふ「永遠の子供」の解釋が卷頭に出てゐます。それを見てもどんなに著者が童話といふものを熱愛してゐるかとわかります。著者の童話はほんとうに眞劍です。太陽と花園「白鳥の國」「啞の殿樣」など十編收めてあります。（四六判二〇六頁　定價一圓廿錢　東京牛込神久土町精華書院發行）

▼**童話掲載外佳作**　△アンナさん（東京今井正）△長生草（靜岡　米山二郎）△譽の金髮（東京　正見悅子）△金の十字架（横濱川島優子）△とんぼの相談（東京　山口忠信）△神樣に救はれた子供（横濱　桝水久雄）△天と地の戰爭（東京　島田信一）△寒がり太郎（東京　海野梅水）△遲刻した二人（雲路無一郎）△乞食の娘（新潟　水野正男）△孝行な狐（北島昌調）△文太郎の夢（長野　湯澤喜八郎）△夏夜物語（東京　馬場啓吉）△年取つた乙姫樣と龜（東京　鈴木一誠）△カナリヤ（神戸　高橋信治）△賭見鼠（朝鮮　江口拾次郎）△ホトゝギス（溫谷哲夫）△漁（東京　川尻東次）△馬（靜岡　甲賀光男）△青い島（東京

◆**椋鳥の夢**（濱田廣介氏著）　童話作家としての著者の名は大人にも子供にも深い懷みをもたれてゐます。著者が當に言葉の上に苦心をされてゐられることは本書を讀まれた誰でもが直ぐ氣のつく所でありませう。著者の好んで扱はれる題材は田園に親みの多い小鳥のたぐひです。椋鳥だの、呼子鳥だの、鶺鴒のいゝのゐ（幼年者の作としては特に）採りたくない。矢號へ推薦してある『川』の一篇などまるで散文じみてはゐるが、然しきうした自然の一現象に對して心を踊らせてゐる一少女の心の調子は、かなり明らかに一篇の上に出てゐると思ふ。ことに「草や木を、兩方に押し分けて流れてゐる」といふあたりはいゝ。入賞の蜘蛛に就いても同じことが云へる。同じく「池」の微妙さ。これらが子供たちの手になつたと思ふと恐いやうだ。すべてが「自然」の一斷片でないものはない。イヤなこしらへものではないのだ。青々しい葉を摺りつけた清らかさがある。

それから謂はゞ小品ともいふべき種類の作に佳いのがある。例へば本號の進藤滋治君の『線』のごときがさうだ。お宮の庭で拾つた、線の實を、何處かへなくした」といふ。一す

新しく出た本

◆**支那傳說集**（木下杢太郎氏譯）　これは世界少年文學名作集の第十八卷で、支那の面白い傳說や、童話を譯したものです。支那の傳說には、吾々に親しい鬼がよく出て來ます一體に構想の大きく、變化極りないところに面白味があります。西遊記や三國誌を愛讀した人達は支那のお話の妙味が忘れられませんでせう。支那の人情風俗を知る上にもいゝものです。譯者の文章は世に定評あるほどよいものです。（四六判、四〇二頁、定價二圓五十錢　東京牛込神久土町六　精華書院發行）

◆**變な家鴨**（中島孤島先生譯）　世界童話名作集の第四篇として、おなじみのアンデルセンの中から有名なものばかり選んで譯した

足りませんから、これが浮出るやうに（つまり描寫として）書かないと面白味が出ない事をつくづく感じます。

△作間博さんの「鐘を導れて」は詩をそのまま散文にしたやうなもので、實に氣持ちよく讀みました。あなたの最近での傑作だと思ひます。しかし、童話として見ると、詩の味ひが勝ち過ぎて少年少女向でないといふ不滿がありはしないでせうか。服部直人さんの「金の十字架」も、私自身、忘れてゐた少年時代の夢を思出させられた程優れたものですが、しかし、これも「童話」の部類に入へるべきものでなく、寧ろ大人に讀ませる「小品」の部類に入るべきものじやないかと思ひます。

△志村照子さんの「猿供愛」は同じ作者の「かくれ玉」程、話の筋は面白くありませんが、無驕な作で、しかもすら〳〵としつかり書けてゐて、女でなければ出ない味があるのに感心します。

△この外にも優れた作は澤山ありましたが、餘白がありませんので、題だけを掲げます。○白鳥の夢○懲ぢり狐○金山大盡○狸の佛さん○源九郎の河童釣り○八兵衛さん○三吉の話○お祖母さんの話○くゞつをつぶした三郎さん○山賊の夢○丘に咲く花○その外まだ澤山ありますが、こゝに書き切れませんから、「童話掲載外佳作欄」に記します。

童謡の選後に

野口雨情

近頃、ほかの雜誌や新聞へ出た、その人の童謡を自分の作つたもののやうに其儘書いて「金の船」へよこしてみたり、「金の船」へ出てゐるその人の童謡を自分の作つた童謡のやうにしてほかの雜誌なり、新聞なりへ出してみたりする人がちよい〳〵あるらしい投書が來ましたが、それは大變わるいことです。いたづら半分にしたとしてもわるいし、いいことと思つてしたとすれば尙わるいし、どつちにしろ大變わるいことです。

いくら作がまづからうが自分の作つたものなら、やましい思ひをせずにすみますが、剽竊をしたのでは、その時は左程わるいと氣がつかなくとも永いうちには必ず良心がとがめていやな思ひをせねばならないやうになります。「金の船」へ童謡をよこして下さる皆さんのうちには、そんなかたは一人もあらうとは思ひませんが（あつては大變です）十通ほど同じ童味の投書がありましたから御注意までに申して置きます。

推名與四郎）△せみ（福岡　桑野敬三）△影法師（神奈川　石川榮男）△水車（名古屋　吉田靈兒）△日暮（東京　若王子文俊）△小供の淺さん（東京　櫻井春光）△ぶらんこ（宮城　船渡錢也）△ヱカキ蟲（長野　中島洋治）△大西瓜（神戸　花谷幸三郎）△どんぐり（北海道　月見草・納豆（東京　芳香信愛）△小鳥（赤木紫鶯）△夕燒（東京　錦龍三重路）△蟲（東京　宮崎金三郎）△梟（東京　小川桂一）△赤ちやん（青森　吉村秀花）△柿（富山　佐藤芳）△もろぎ（廣島　寺岡賢一）△夏の夕（神奈川　山本寛一）△接吻（廣島　寺岡賢一）△自信（長野　花岡倭男）△旅の小鳥（旭川　山本治一）△出てゆく舟（神戸　△天國のお母さんに（東京　志村照子）△雨の時（東京　藏澄スヲコ）△童謡（東京　和田光子）△化太鼓（秋田　能登澄子）△小鳥（神奈川　小澤章子）△赤いカサ（東京　中島佳代子）△さかなこ（仙臺　佐藤愛子）△子守唄（東京　池田壽美子）△まれぎ（千葉　久保田幸寛）△風仙花（東京　河本清）△夕顔（東京　石濱勇市）△濱千鳥（東京　相野猛浪）△子供傘（神戸　西田信一）△銀の水玉（愛知　大竹亮寛）△林檎（北海道　横手ヒデ）△燈臺の灯（神奈川　齋藤花子）△すゞ蟲（愛媛　船木糸吉）△夏の別れ（東京　川崎貞章）△蛸の巣（山口　三宅さだつな）△片目の鳥（長野　山崎清見）△すゞらんの鐘（京都　長野昌水）△煙（京都　近江谷益代）△みの蟲（滋賀　藍元辰一）△蝉つかみ（滋賀　下村繁雄）△ろうそく（大阪　山下千代子）△うさぎ（神戸　武井勇二）△雨だれ（大分　池田喜伴）△てん〳〵てんから、こつこ（靜岡　淺井千別）△こほろぎ（都綠銀映）△柳の糸（仙臺　竹川佐登志）△鈴蘭（東京　作間清）△つるべ（大阪　稻垣ひろし）△白い波（京都　松好貞夫）△とんぼ（京都　村上孝太郎）△お濱の子千鳥（靜岡　梅村仙太郎）△竿のすゝめ（千葉　笹生鎭）△トマト君（東京　江口巡）△黃來い（東京　廣瀨陽果）△金の船（東京　伊藤朗）

▼自由驚掲載外佳作　△トケイとインクビン（東京　肇子）△小守（愛知　高橋政行）△お庭の花（東京　竹下みさを）△僕のかにん（神戸　高橋久藏）△僕の學校（奈良　心齋一）△女の子二人（東京　吉田和子）△二階から（京都　建田巻一）△かめ（茨城　海澤秀夫）△バナナと櫻んぼ（東京　小笠原多美）△電車（東京　吉田浩）△ちやわん（東京　竹下英子）△煙さん（岡山　初岡博子）△夕陽（秋田　都武記）△農夫（福井　淺田鼎一）△海水浴（福井　富田重三）△家（栃木　鮎瀨鐵一）△家の中（福井　西辻市太郎）△煙草盆（東京　武内敏夫）△工場（長野　池田敏）△林檎（東京　高木みよし）△朝（廣島　錦田瑞男）△犬（東京　小堀百合子）△ヱナカ（神奈川　伊藤南陽子）△本トインキ（東京　森正三）△秋聲（北海道　瀧藤五郎）△節子サン（弘前　石黑サダ）△三色すみれ（三重　中島萬六）△マツノ木（東京　長野英夫）△桂濱（高知　木間好子）△海（愛知　松本重夫）△景色（秋田　中村三五

鬻鵡の手帖

▼十一月二十一日に丸の内有樂座で、本居先生が作曲された「十五夜お月さん」外四篇の「金の船」へ載つた童謡を、蕗間帶枝女史が新しい試みの踊に仕組んで上演される筈です。

▼十一月第二日曜に、神田青年會館で「とんぼ」社主催の童謡音樂會が開かれます。當日は本居みどりさん、きみ子さんのお姉妹が、「金の船」へ出た野口先生の童謡をお唄ひになります。

▼十一月第一日曜に「おてんとさん」主催の第一回童謡音樂會が仙臺で催されました。金の船」へ載つた童謡の合唱もあつて賑でした。

▼十月三十一日午後二時から神田女子青年會館で日本婦人協會主催の童謡慈善音樂會が開かれました。「金の船」から野口先生が行かれて「童謡について」興味深い有益な講演をされました。（以上記者）

▼私共は「小草の群」といふ會を組織して、お伽の夕と童謡音樂會といふ二つの集りを致しました。金の船の「七つの子」や「いたちとすゞめ」等が歌はれました。今度また童話劇をする積りです。かうした會で少しでも立派な童謡を多くの人に知らせる事の出來るのをうれしく思ひます。（東京市麻布區本村町二十二　米山星二郎）

「金の船」誌友募集

『金の船』の誌友にはいろ〳〵な特典がありますので、月々非常な勢で增加して參りました。正月號から誌友になられるには丁度いゝ時機です規則書は編輯所に御申込み次第お送り致します

編輯だより

▽いそがしい〳〵。實にいそがしいです。でも、やつと十二月號の編輯をおしまひにしてホツト一と息つきました。さて、これからいよ〳〵新年號の編輯です。これがなか〳〵大變です。皆さんのところへ新年の喜びを澤山に〳〵持つて行くために、記者一同これから夢中で働きます。

▽こんな譯で、私どもは今年中はいそがしい〳〵で暮します。何しろ二月號まで、すつかり今年中にこしらへなければならないのですから。

▽來年の二月號は、皆さんがお正月のおコタツの中で讀むのですから、それに工合のいゝやうにと思つて、面白いお話ばかりをうんとこさと集めて出すつもりです。そして、三月號にはまた大懸賞で大々的に讀者の文藝を募集いたします。（一記者）

◆特別大附錄付◆ 新年號の豫告

いよ〳〵來月は新年號となりました。記者一同の大奮闘のもとに出來上る新年號の内容を御覽下さい。讀物は新年にふさはしい一粒よりの傑作ばかりを網羅しました。

尙、新年特別附錄として本誌の誇である岡本歸一先生が不眠不休の努力に成つた極彩色大判雙六を添へます。この雙六がどんなにきれいな面白いものであるか、先生の作になつた前二回のを見た方はどなたも御存知です。發行の曉はさぞ、雜誌界の驚となるでせう。

今のところ決定してゐる重なる讀物は左の通りです。

□童　話……島崎藤村
□赤い帽子と仔犬（童話劇）……野口雨情
□假面の祟（童話）……沖野岩三郎
□和莊兵衛漂流譚（童話）……楠山正雄
□老將軍と山賊（童話）……西條八十
□賴朝の島流し（歴史童話）……窪田空穗
□歌姫（童話）……霜田史光
□天の破片（童話劇）……中島孤島
□繪ばなし……岡本歸一
□人魚の海（童話）……秋庭俊彦
□金の虎犬（傳說）……藤澤衛彦
□岩見重太郎（童話）……齋藤佐次郎
□漫畫……船橋重一
□家なき兒（名作童話）……三宅房子
□父戀し（長篇物語）……沖野岩三郎
□呼子鳥（童話）……野口雨情

新年附錄

雙六……岡本歸一案

少年少女諸君が室内遊戯の新試みとして、新春の家庭に如何に歡迎さるるか、「金の船」創刊以來の一大新案である模範的この雙六を御覽なさい。

郎）△ポプラの並木（秋田　中村善治）△頭（福井　西本義秀）

▼**幼年詩掲載外佳作**　△とびつこ（山梨　佐藤ふじ子）△蛸（福井　茂山義雄）△うさぎ（東京　滿留りク）△にはとり（福島　佐藤クニ子）△あじさい（滋賀　中西ハマ）△あひるの子（滋賀　板倉ます）△もみじ（山梨　窪田忠作）△雨の中（茨城　江田海次）△電氣（鹿田靜枝）△大雨（山梨　島田武夫）△旗行列（山梨　清水良一）△秋（下關　石橋作五郎）△秋が來た（奈良　心齊一）△雨風（茨城　茂呂三郎）△にんじん（茨城　羽生平治）△蜂と風（山梨　清水義廣）△色（愛媛　稻荷鐵子）△雨の日（東京　溝口豐子）△お月樣（横濱　關勇）△ニハトリ（茨城　佐口コト）△めだか（千葉　小高愛子）△父（京都　荻野節子）△せみ（福井　井上清子）△チョーク（京都　德岡晴子）△ほていさん（香川　矢野實）△しかられて（長野　堀部さだ）△直ちやん（東京　和田光子）△朝顔實（大阪　香林らん）△あぶ（大阪　八木金次郎）△雨（千葉　阿部倉ハツ）△おどし（京都　山口勳）△すゝむし（愛知　早川除二）△ふんすゐ（東京　笹野かえ子）△朝（名古屋　櫻井すま子）△秋（大阪　大塚義博）△光ちやん（東京　太田吾郎）△赤とんぼ（東京　安藤肆藏）△柿（埼玉　細谷俊夫）△かぜ（東京　岡添喜久子）△お馬（東京　佐藤幸之助）△金魚（群馬　村上信雄）△夕立（滋賀　小島澄代）△田舍（北海道　吉田キクノ）△竹（東京　青木ミチ子）△帶（千葉　伊藤隆三）△角力（長野　湯澤喜八郎）△水車（茨城　佐賀伊作）△夕立（千葉　市東千代子）△雨（山梨　三井みどり）△雨降る（長野　菅沼百合子）△白い雲（東京　椎名與西郎）△朝（愛媛　西川ツヤ）△雨の日（愛知　栗本寛一）△風車（東京　奥山源一）

▼**綴方掲載外佳作**　△提燈行列（千葉　村井初枝）△私を他人は何と見てゐるだろう（栃木　秋元ミツ子）△水およぎ（栃木　大山誠司）△ぼんおどり（秋田　坂本まさえ）△今（大阪　中村治光）△犬の子（茨城　齊藤延雄）△きらきらさん（福井　一瀨キク）△好きな子供（愛媛　岡田スミエ）△兄さんのけが（秋田　足島トヨ）△秋に（東京　椎名雨風）△あはれな猫（東京　溝口豐子）△ばけつの中の百合（高知　本間百合子）△弟のてがら（神奈川　瀧本美津江）△夜の燈下（兵庫　中島せつ子）△この間の雨（東京　中島萬六）△北海道（東京　藤壽）△蠶の桑やり（福井　坪内千代子）△國旗（茨城　翠野壽郎）△蠶の糞（鹿兒島　東小園文雄）△白い色（新潟　長谷川つる枝）△旅行（東京　經隆）△今日（愛媛　青井都南惠）△せきみ（千葉　板倉とみ）△とりかた（時）

▼**金の船誌友**　○兵庫　金光敎西宮小年少女會○神戸濱田憲義君○東京日本メソヂスト銀座敎會日曜學校○鹿兒島中島興志正君○山口縣茂手木月江君○大阪古賀繁雄君○福岡白土哲造君○東京都小林良一君○岡山君○田敏岡土屋守君○東京都小林夫君○田中恭義賀君○滋賀石田恭平君○山本君○東京土谷博光君○高圭雄知鑒君○田幸濱君大阪大綠之好君○京都村繁雄植田君○北海道君○秀逸君○福岡鈴木宗賀君○滋賀小阪孝校○茨城君○五來○高知中尾時之輔君○長野佐々木正儀君

讀者便り

▽もう來るか〳〵と待ちこがれて居る「金の船」が十五日の夕方に來ました。御飯を食べるのもわすれてしまつて見ました。表紙の繪日繪、背色の配合の良いのに驚いてしまひました。西條先生の「繪國めぐり」もます〳〵面白くなつて來ました。（神戸　竹橋久藏）

▽秋らしくなりました。「金の船」といふ本すきです。給と綴方を出します。學校は佐倉小學校です。とし（十一）です。（千葉　小野　篤）

▽秋が信濃にも訪れました。先生方には御變りありませんか。私も無事に暮して居ります御安心下さいませ。秋になつて氣も晴々致して居ります。ところへ拙い畫「友の手紙」を御のせ下さいまして、ほんとうにありがたうございます。大よろこびで家中騒んであるきました。けれど私の住所が相違して居りましたのでお知らせ申上げます。（長野　柳澤とし）

▽十月號に出ました「友の手紙」といふ自由畫は、長野縣南佐久郡野澤町となつてゐましたが、あれは、小縣郡穴川村南方のあやまりでした。作者の柳澤さんはじめ、讀者諸君にお詫びいたします。（記者）

▽私は十六才の少年です。今學校に行つてます。私は「金の船」が大好きです。發行前二三度本屋へ出かけます。本屋では「來たらすぐもつて行く」といひますが、なかなか待ちきれません。來たら、始から終まで一頁も殘さずに讀んでしまひます。（東京　鴨泉喜慶）

▽「金の船」のお正月の附錄は毎年立派なので一番です。今年はどんなのでせう。きつと岡本先生苦心の大作だと思ひますわ。早く早く見たくて堪りません。（月子）

▽私は「母を尋ねて三千里」を樂しみに讀んでゐました。可哀そうなマルコーがどうなるのかと、泣きながら讀んでゐました。そしたらとう〳〵お終ひにお母さんを尋ねてゝ、お母さんを救つたので、胸をなで下しました。あゝ、マルコーさん、マルコーさん。（京都　上山百草）

▽千草にすだく蟲の音を聞きながら、書讀むことが大好きです。先生この淋しい私の手にはいつも「金の船」があるのです。始めからおしまひまですつかり讀んで、終にはどうしてもなにかゝら書かなくてはならないやうな氣に充されるのです。先生、私には自分で作る詩、童謡が、はたして詩であるか童謡であるかわからないのです。やつぱり自信がないからでせうか。（天龍川畔　月見草）

▽これまでいろんな雜誌が讀んでゐましたがお父さんや、お母さんはあんまり喜ばれなかつたのです。なぜだか知りませんが、「金の船」を讀むやうになりましてからはさうでもありません。「これはいやみがなくていゝ」と仰るのです。（東京　岡野靜子）

▽記者先生。金の船」はだん〳〵よくなつて大へんけつこうに存じます。私もだん〳〵好きになります。讀者通信の面白くなつてきたのも、よいと思ひます。私は一度でも投書したいと思つてをりますが、どうしても出さうに思はれませんのでつい止めます。樺太にでも一度出たらとび上るほど嬉しいだらうと思つてをります。（仙臺　朝枝）

▽クリスマスが近づいてきました。日本でも近年クリスマスが大へん喜ばれるやうになりました。クリスマスのお爺さんも日本へ來てくれるでせう。僕は樂しみです。（東京　武田正造）

▽僕は沖野岩三郎先生のおつくりになつた、「從の山六爺さん」が面白くて〳〵しかたがありません。僕は沖野先生のおつくりになつた童話は好きです。（東京　下條拗）

▽おもしろい〳〵金の船　僕は愛讀いたします。僕は愛讀いたします。（福岡　磯邊重一）

△金の船の發展を祈りて、

　　寒植えて咲きいづる春を樂しまん
　　花なき庭のさびしきまゝに
（福島　小松正雄）

▽僕は本誌のすばらしい發展を喜び心から祝する一人であります愛讀者諸兄姉の上で親の無い方が御座いますか、若し御座いましたなれば「我と來て遊べや親の無い雀」どうかお手紙を下さいませ。僕は三歳の時母を失ひ父の手に今日まで養育せられたのです。（愛知縣　葉栗郡宮田村　栗本寛一）

▽私はこれまで少女雜誌ばかり讀んでゐましたが、「金の船」を讀むやうになつてから、何故もつと早く金の船を讀まなかつたと思つてゐます。（金の船をもつとも愛する少女）

▽藤澤衛彦先生。子供達に聞かせて面白いやうな下野國の傳說がおありでしたら、諸國傳說童話の中へお願ひ致したう御座います。（下野　鹿沼二葉女）

▽楠山先生の「蛇天國」はステキだ。岡本先生の畫がまたステキだ。實にいゝ。（東京　國雄）

▽私ははじめて「金の船」の愛讀者になりました。これから投書もいたします。水谷先生また「王子の夢」のやうなおもしろいお話を出して下さい。（下關　石橋作五郎）

▽「金の船」を讀む少年少女はたしかに新しい少年少女です。僕は北海道の空で「金の船」を讀むことを何よりのほこりとしてなります。（北海道　幸福な子供）

▽秋になりました。僕は一月號から讀んでなります。宜敷く願ひます。（東京　服部四郎）

▽はじめて出した文がはじめから本へのつたのでうれしくてなりません。これからなほべんきやうして、もつといゝ文をつくりたいと思ひます。（埼玉　草木燈）

▽岡本鈴一先生の畫集のやうなものはありませんか。（大阪　岡村キエ）

▼まだその上は出てゐませんが、近い内に出ますからお知らせいたします。（記者）

▽野口雨情先生の童謡集「十五夜お月さん」は皆いち〳〵作曲がついてございますか。また「金の船」合本といふのはどんな本でございますか、書店にもございますか。（シナ子）

▼「十五夜お月さん」に出てる作曲は、十五夜お月さん、歸る雁、夏作唄の三つです。それから、金の船合本といふのは、金の船の創刊號から六冊、または七冊づゝ合せて一冊の本にしたもので、まとめて讀むのに大へん便宜です。これは本屋に出てをりませんから御入用なら、直接本社へ申し込んで下さい。（記者）

▽金の船では、童謡や、幼年詩をまとめて一冊の本になさいませんか、もしなさいましたら、私は澤山ほしいのです。（德島　佐藤彩）

▼こんど一冊の本にすることになつてをります。價はなるだけ廉く、本はなるだけ立派にするつもりです。どうか澤山買つて下さい。一人で五部位買つて親く方がずゐぶんありさうです。（記者）

▽金の船のレコードはなか〳〵評判です。此後續々出ますか。（蓄音器を愛する者）

▼續々出ることにはなつてをりますが、何しろ會社の方でも、金の船のレコードには特に骨折つてやつてゐるものですから、なか〳〵時日がかゝります。（記者）

▽野口先生！　藝術唱歌とは實にいゝ名です小供達に直ぐ敎へられます。（山形　一訓導）

▽「金の船」が益々立派になつて參りました。僕は、僕はもうやめる事が出來ません。だん〳〵寒くなつて參りました。「金の船」の記者先生。讀者諸君。（淀川長治）

▽「金の船」も、もう四つになりますね。今年の正月が待ちどほしいです。どんなものができるでせうか、金の船の正月號。今からもう胸が躍ります。（神奈川　榛田深太郎）

▽ことしのクリスマスには私はお話をすることになつてゐます。私は「金の船」に出たお話の中から好きなのをするつもりです。どがいゝのが出るやうにお願ひします。（蒲江）

▽記者樣。こんど私の級にも「金の船」の愛友が三人ふえました。松村よし子樣と二人ですすめたのです。（長野　廣沼まつえ）

▽十一月號にも待ちに待つてゐた齋藤佐次郎先生の童話がないので、がつかりいたしました。（碧城　大川彦夫）

▽私は今後、我故郷なる千葉縣の銚子の歴史とか、傳說とかを、童話に書いて投稿致しますから、宜しく御願致します。最近の傑作童話、横山先生の『落した銀貨』には、深く感銘致しました。童話は、私の新生命の湧くる唯一の道です。（東京　古川芳露）

▽岡本先生。僕もやつぱりミニイとイニイの畫が忘れられません。どうぞあゝゆう繪が、これからも出てくれゝばいゝなと思つてます先生の子供の頃はなんとも言はれないいゝ顔です。それに先生の繪では、足がうまいとおもひます。眼の玉と足とはいつも生き〳〵としてゐて、見てゐても氣持がよいです。首を少しまげてゐる樣な所は實になんともいはれません。紙をも少し工夫したら中の口繪も、ずんと引立つことでせう。編輯の順序はうまいものです。氣持よく讀めます。（鷹田守一）

▽私は童話を研究してゐる者ですが、「金の船」の沖野先生のお話が私には最も興味深く感ぜられます。先生のお話は何れも創作物で、嘘がのび〳〵してゐて、滑稽味のあるところが最も小供に適します。（大阪　山田佐吉）

懸賞創作募集

△少年少女の創作▽

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

（注意）

題材は何でもかまひません。諸君の日々見たり、感じたりすることから、諸君のすきなものを諸君のすきなふうに書なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないようにしてください。用紙は自由畫はなるだけ畫用紙に、幼年詩や綴方はなるだけ原稿用紙（または半紙）にかいてください。よく出來た方には『金の船』特製の賞品を差上げます。次號締切は十一月三十日（その以後は次號へ廻る）發表は三月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地「金の船」編輯所。

△一般讀者の創作▽

童話……齋藤佐次郎先生選
童謡……野口雨情先生選

（注意）

童話は二十字詰二百行以内、童謡は二十行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。締切發表宛名は少年少女の創作と同じです。

定價壹冊參拾錢送料壹錢
三ケ月分三冊（送料共）九拾錢
半年分六冊（送料共）壹圓八拾錢
壹ケ年分十二冊（送料共）參圓六拾錢
但し新年號四月號九月號は特別號で冊五錢ですから、御註文の節はこの號だけ必ず一冊五錢づつ加へてお拂込み下さい。
振替口座東京參〇五七貳番

▽御註文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は（壹錢切手）一割増しです
▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名はつきり書いてください

（送金の注意）

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十年十一月六日印刷納本（毎月一回）
大正十年十二月一日發行（一日發行）

編輯人　東京府下田端三百五十一番地　齋藤佐次郎
發行人　東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地　山崎篤
印刷人　東京市小石川久堅町百八番地　大橋光吉
印刷所　東京市小石川久堅町百八番地　博文館印刷所

東京市麹町區飯田町六丁目二五
發行所　キンノツノ社
電話九段貳七五貳番
東京市外田端三百五十一番地
編輯部　『金の船』編輯所
電話小石川五三八七

クリスマス絶好の贈物

美しき「金の船」の合本

「金の船」は創刊號以來毎號、諸大家の書かれた面白い童話と、ほんたうに親みの深い童謡と曲譜とが載ってをります。又、どの頁を開いて見ても、岡本歸一畫伯の描れた「金の船」獨特の繪がはいってをります。丁度「金の船」の合本は、童話、童謡、曲譜、挿畫を一緒にした、美しい繪卷物を見るやうな感じがいたします、お子樣方のあるなしにかゝはらず、どちらの御家庭でも、この美しい「金の船」の合本だけはお備へになる必要があります。

第一輯　第一卷初號より第二卷五號まで七冊合本　クロース上製極美　定價一圓八十五錢

第二輯　第二卷六號より第二卷第十二號まで七冊合本　クロース上製極美　定價二圓十五錢

第三輯　第三卷一號より第三卷六號まで六冊合本　クロース上製極美　定價一圓九十錢

第四輯　第三卷七號より第三卷十二號まで六冊合本　クロース上製極美　定價一圓九十錢

（第一輯より第三輯まで、又は第一輯より第四輯まで一時に御註文の方へ對しては割引を致します）

金のアンデルセン船號　**世界名作童話集**　全一冊　定價三十五錢

▼此際御入用のお方は便宜上、東京市外田端三五一番地「金の船」編輯所へ御申込み下さい▲

將に來るシーズン

諸君の爲代理部の開設

□好評嘖々たる

□賞讃の的となれる

マンドリン

定價表

A號	九圓五十錢
B號	十二圓八十錢
C號	二十一圓三十錢

その他五十圓まで

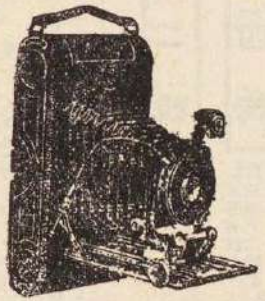
ヴアイオリン

定價表

壹號	九圓五十錢
貳號	十二圓八十錢
參號	二十一圓三十錢

その他七十五圓まで

□素人向きのカメラ□



定價表

十二圓	
十八圓	
廿二圓	
廿六圓	
三十二圓	
五十三圓	
七十五圓	

一 値段其他の御希望を明細記入の上御注文になれば責任を以て必ず諸君の滿足の出來る品を撰擇します

御問合せは必ず往復葉書か返信料添の事。御注文は住所を分りよくくわしく書く事。代金は總て前金の事、剩餘の節は返金す。拂込みは成るべく振替口座に拂込むこと。

キンノツノ社代理部

電話九段貳千七百五十貳番
振替口座東京參〇五七貳番

誠實と迅速は本社代理部の信條

英國 早大教授 チャルズ、キングスレイ原著 織田一磨先生裝畫 横山有策先生 胡桃正樹先生共譯

新刊

童話 水の赤ん坊

（四六判布裝 上裝美本）

定價壹圓八拾錢

送料 普通八錢 書留十五錢

子供には一番よい物を與へねばなりませぬ「子供によしあしが何で判るものか」といふ誤つた考を捨てねばならぬ。よい童話が澤山出ますが。陰氣な暗いお化話しや、嘘つきや泥棒ばなし、子供に判り難い用語の多いことなどは、まだ、今日の童話の大缺陷です。此點に氣付いた譯者が英國文豪の名作を日本の子供に讀ましたいと言はれます。煙突掃除の小僧を主人公とし、透き通るやうな美しい感じのする愉快な讀物です。子供を愛さるゝ世の親達にお薦めします。

賀川豐彦先生曰く。……主人公に煙突掃除の子供が描かれ其話の進展するに伴れて可なり涙ぐましい場面もあるがそれでも尙凡て愉快な氣持を兒童に與へつゝ讀ませる。また其末路が「死」であるにしても。それが少しも「死」を悼むといふ悲哀に捉はれないのは感心だと思ひます。（九月二十五日讀賣新聞所載）

同人社 東京西紅梅町 神田町 振替東京一二九五四 電話神田二九五九

野口雨情先生新著（中山晋平先生譜付）

長篇童話

愛の歌

四六版美裝箱入二百三十頁
定價壹圓五拾錢　送料八錢

山は高いし
一人とぼ〳〵
乾く暇なく
戀しきものは
今日も夕日の
どこの國やら

野はたゞ廣し
旅路の長さ
涙は落ちて
故郷の空よ
落ちゆく先は
果さへ知れず

（「愛の歌」中の「旅人の唄」の一曲）

本書を讀みて何人か泣ざるものありや
教育家諸氏は讀まれよ、父兄諸氏は讀まれよ
田舍に生れし一少女が如何にして都へ出でしか
愛の歌を聞きて少女は如何に歡喜せしか
全卷悉く詩なり、悉く涙なり
家庭の讀物として本書に優る良書ありや

東京市小石川町九〇
創文社發行
振替參五八貳番

後の山六爺さん

沖野岩三郎

八

百三十疋の猫が進軍したので、鼠はみんな生命からがら自分の村へ逃げ歸りました。で、爺さん婆アさんは、紀伊の守の吹く「五音の笛」に合せて歌を歌ひながら凱旋しました。

その翌日はドーンの鐘が鳴るとすぐ、紀伊の守は池の東の岸につないである舟に乘りました。そして、パ、ピ、プ、ペ、ポ……と吹きますと、また昨日のやうに猫も兎も狼も鹿も猪も狼もみんな東の岸へ集つて來ました。

紀伊の守は、片手で舟を漕ぎながら片手で笛を吹きますと、獸達はみんな水の中へ、ざんぶざんぶと飛込みました。お猿は相變らず鹿の背に乘つて威張つてゐました。

紀伊の守の舟が西の岸に着いた頃、東の岸に殘された猫や兎やお猿や鹿や猪や狼の赤ちやん達を、新しい村の人達がみんな一疋づつ抱いて山六學校へ伴れて行きました。

山六爺さんは出席簿をもつて來て、名前をつけ初めました。越後の守え右衛門は出て來る赤ちやん

に、一々出鱈目な名前をつける。豐後の守ぶ右衛門が小い名札へその名を書きつける。ろ王と、り王とが一々その札を可愛い小い頸へ結びつけるといふ騒ぎ。猫の仔には、「おにやを」「にや吉」とか、兎の仔には、「耳長太郎」「月夜もち子」とか、お猿の仔には、「木登巧」だとか、猪の仔には、「鼻息荒」だとか、狼の仔には、「尻尾卷藏」とか、すつかり名前をつけてしまつたあとで、調べて見ると、猫の仔が七十二疋、兎の仔が八十疋、お猿の仔が二百五十二疋、鹿の仔が六十疋、猪の仔が百八十疋、狼の仔が百二十一疋、合計七百六十五疋ありました。

山六爺さんはそれを五列に並べて、『さア靜になさい。』と言つて、授業を始めようとしましたが、どうしてどうして、五列がすぐ八列にも十列にもなつてしまひます。お猿の仔供は狼の仔供の耳を引張る、猪の仔供は腰掛を引くりかへす。兎の仔供は机の棚の中に逃げ込んで、硯の墨を白い毛になすりつけて眞黑くなつて出て來る。狼の仔供は鹿の仔供の足や頭へ嚙みつく、もう教場の中はぎやアぎやア、きいきいの大亂痴氣です。

「靜になさい！」と云つて、山六爺さんは机の上を鞭で毆りつけました。

『校長さまの言ふ事を聞くんですよ。』と婆アさんは叱鳴りました。けれどもなかなか靜まりません。そこで丁度來合せてゐた紀伊の守が「五昔の笛」を取出して、パ、ピ、プ、ペ、ポ……と吹きますと、みんな元の五列になつて靜かにしてゐました。その時婆アさんは、手をたたきながら、かう云ひました。

『爺さん、爺さん、これは（けだもの科）ですから、あなたが校長になつては駄目です。やつぱりあの「黑」さんに校長になつて貰ひませうよ。』

それを聞いた山六爺さんも、手を打ちました。そしてにこにこ笑ひながら、『さうださうだ、「黑」さんにお願ひしませう。』と云つて、早速「黑」を迎へて來ました。そして「黑」を高い壇の上に坐らせますと、不思議にも仔供達はみんな默つて俯向いてゐました。

『さアさア皆さん、私は今日から校長さんを辭職して、此の「黑」さんに代つて戴きます。皆さんは此の「黑」さんの言ふ事をようく聞いて成長くなつて、賢い……けだものになるのですよ。』

爺さんがさう言つた時、「黑」は圓い眼玉を輝かせながら、ワン！ と一聲吠えました。すると猫の仔はみんな一齊に肩を聳えさせて、物を狙ふ形を致しました。鹿の仔はちやんと四つの足を揃へました。

ワン、ワン！ と二聲吠えますと、兎の仔供は前足を腹に引きつけて、後足で立ちました。

ウーと一聲唸りますと、猪の仔供はみんな鼻を板の上に押つけて、すうーすツ！ と強い息で吹き初めました。

ウーワンと吠えますと、狼の仔供がみんな大きな口を有りつたけ廣く開けました。そしてワアーンウーと唸りました。

ワンワンワンと三聲吠えますと、お猿の仔供達は机の上に這ひ上つて、ちょこなんとお坐りをしました。

餘り「黑」さんの號令が旨く行くので、爺さんも婆アさんも紀伊の守も感心して見てゐました。村の人達は山のやうに集つて來て、窓の外から眺めてゐました。

一時間ばかり、かうして（けだもの科）の教練をしてゐます間に、紀伊の守が學校の庭へ來て「五

音の笛」を吹きましたので、其の音を聞きつけた獣たちは、大急ぎで山六學校の運動場へ集つて、仔供達の授業の濟むのを待つてゐました。

やがて授業が終つて外へ出て來た「黒」は、一段高い所へ走つて行つて、ワン！と一聲吠えました。すると百三十疋の猫の親達は、みんな運動場の眞中へ並んで肩を聳かして敵を狙ふ風を致しました。

ワン、ワン！と二聲吠えると、兎の親達はみんな後足で立上つて、前足でお腹のところを叩きながら、ぴよんぴよこ、ぴよんぴよこと踊り初めました。

「黒」が三聲吠えますと、お猿はみんな庭の樹に攀ぢ登つて、ざ、ざ、ざ、と枝を搖ぶり初めました。

ウーと「黒」が唸ると、猪の親達は、恐ろしい鼻息で、土を吹飛し初めました。見る見るうちに、庭の眞中に、深さ二尺ばかりの、大きな穴が出來ました。

ウーワンと「黒」が吠えると、狼の親達は赤い舌を吐きながら足並を揃へて、運動場をぐるぐる駈け出しました。

村の人達はみんな感心して見てゐましたが、右大將は突然こんな事を言ひました。

『皆さん、此の村には兵隊さんが無いのですから、此の（けだもの）で軍隊を組織しようぢやありませんか。さうすれば人間は一所懸命に働く、けだものは村を守るといふやうに、大層面白い政治が出來ますから……』

山六爺さんは第一に賛成しました。村の人達もみんな賛成しました。そこで「黒」さんに、山六學校の（けだもの科）の校長になると同時に、山六師團長になつて貰ひました。そして翌日のドーンからヂヤーンまで、人間が一所懸命に遊ぶ時、山六學校の中では獣の仔供達が「黒」校長の命令に從つて勉強してゐますと、窓の外ではその親達が寝轉んで遊んでゐます。それから學校がすむと、親達が一所懸命に調練を初めます。

かうして一年ばかり山六學校と山六師團の教練をしてゐるうちに、新しい村の人達が大層よく働いて、みんな倉の中に麥や米を一杯入れてあるといふ事を聞いて、隣りのさぼり村から、多勢の泥棒が新しい村へ攻寄せて來ました。

村外れの野原へ花摘みに行つてゐた子供達が、押寄せて來た泥棒を見て眞蒼になつて逃げ歸つて、此の事を山六爺さんに告げますと、爺さんは早速紀伊の守に使をやりました。

紀伊の守は高い山の上に走つて行つて、「五音の笛」を音高くぺぺ、ピピ、ポポ、ププ……と吹きました。すると、東から西から南から北から猿と鹿と猪と狼とがみんな駈け集りました。

「黒」が、ワン、ワン、ワンと三聲吠えると、猿はみんな樹の枝に攀ぢ登りました。

「黒」がウーと一聲唸ると、二百疋の猪は一列横隊になつて、山を駈け降りました。ウーワンと吠えると、百五十疋の狼は七十五疋づつ二隊に分れ、一列縦隊になつて東の丘と西の丘とを麓の方へ駈け降りました。

『どうなる事だらう？』と爺さんは婆アさんに囁きました。紀伊の守は元氣を添へるために「五音の笛」を頼りに吹鳴らしながら、鹿の背に打乗つて山を走せ降りました。爺さんも婆アさんも鹿に乗りました。見物人もみんな鹿に乗りました。そして山を駈け下りてゐると、山の麓では俄に、わアツ、

わアツといふ、けたゝましい音が聞えました。

見るとさぼり村の泥棒達は、矢のやうに駈けて來た猪に追ひたてられて、東と西とへ二隊に分れて逃げましたが、東の丘から七十五疋の狼が紅い舌を出して此方を睨んでゐるので、これは大變だと思つて麓の方へ逃げようとすると、もう麓の野原には、二百疋の猪が横隊になつて、すうん、すうんと荒々しく鼻を鳴らしてゐます。で、山を越えて新しい村の方へ突貫しようと山を駈け登ると、山の上の方から多勢の猿軍が鹿に乘つて降りて來ます。

四方に敵を受けた泥棒隊が、これは大變だと思つてゐる所へ、百五十疋の狼と二百疋の猪が勢鋭く攻め寄せて來たので、もう逃げ場が無いと思つてみんな樹の枝に逃げ上らうとすると、樹の上には顔の眞紅なお猿が何百疋もゐて、ざ、ざ、ざ、と枝を搖ぶりながら下の方を睨んでゐます。

泥棒達は、どうにも致樣が無いので、みんな地べたに坐つて、『御免下さい、御免下さい、』と言つて叩頭をしてゐる所へ、山六爺さんが多勢の村人と一緒に鹿に乘つて來ました。そして、

『これはこれは、皆さんよく入らツしやいました。』と叮嚀に挨拶を致しました。殺されるのかと思つて、ぶるぶる顫へてゐたさぼり村の泥棒隊は、みんな安心したやうに、聲を揃へて、

『爺さん、今日は……結構なお天氣で……』と申しました。

『ああ、あなた方はさぼり村のお方ですか。それはそれは能く入らつしやいました。どうです、あなた方は私達と一緒にお住ひになりませんか。私共の村には、それはそれは面白い事があるのですよ。』

山六爺さんがかう言つた時、泥棒隊はみんな、

『どうぞ、私達をお仲間にして下さい。』と言ひました。そこで泥棒隊の人數を調べて見ますと、みんなで、五百七十人ありました。

『宜しい、あなた方は、一旦お家へ歸つて奥樣や坊ツちやまを伴れていらツしやい。その代り新しい村へ來たなら、新しい村の規則を守らねばなりませんよ。』と爺さんが云ひますと、泥棒隊の大隊長が恐る恐る進み出て、

『御規則と申すのは、どういふ事でございますか。』と尋ねました。

『私の村では一日を四時間に分けて、チーンからガーンまで一所懸命に働き、ガーンからドーンまで一所懸命に學問をして、ドーンからヂヤーンまで一所懸命に遊ぶのです。それからヂヤーンからチーンまで一所懸命に寢るのです。』

爺さんがかう云つた時、泥棒の大隊長は靜かに點頭きました。

降參した泥棒五百七十人は、山六爺さんと、よく働いて能く勉强してよく遊んでよく寢るといふ事を堅く約束して、新しい村の仲間に入れて貰ふ事になりました。

『それでは皆さん、これからお家へ歸つて御家内をみんな伴れてゐらツしやい。そして皆さんは、どうぞ名の無いお方になつて下さいませ。』

山六爺さんがかう言ひますと、さぼり村の大隊長は不思議な顔をして、

『何ですつて？　名の無い人になれとおつしやるのですか、私共はよく働いてよく遊んでよく勉强してよく寢て、名高い名のある人になりたいと思ひますが……』と言ひました。

『それはあなたの村の人達は、みんな怠けてみんな嘘を吐いて、悪い人ばかり多勢ゐるから、たまたま正直な人や、よく働く人が一人か二人出ると、其人を偉い偉いと云つて、珍らしがつて賞めはやすのでせう。ところが私共の新しい村ではみんな揃つて偉い人ばかりですから、名前なんかありませんよ。もし村の人で悪い人が出來たなら、その人に嘘吉とか、喧嘩左衛門とか、酔助とか名をつける事にしました。それで今では、名前のある人は一人も居ないのですけれども、獣だけには、一々名前があります。』

爺さんがかう言つたので、大隊長は感心してしまひました。そして、

『では兵隊さんといふのは無いのですか。』と問ひますと、爺さんは、

『兵隊さんといふのは、こゝに居る獣ですよ。そこの岩の上に坐つてゐるあの犬は、山六師團長さまです。』と云つたので、さぼり村の大隊長は吃驚してしまひました。

『成程、あのお猿様や、狼様や、猪様達が、此の村の兵隊さんで、そしてあの黒犬閣下が師團長でござりますか。』

言ふとすぐ大隊長は、大きな聲で、五百七十人の家來達に、

『氣を付け！　敬禮！』と號令をかけました。

五百七十人が二列にずらりと並びますと、師團長の「黒」は、ワン、ワン、ワン、ワン。ウー、ウーワンと續けざまに吠えました。すると鹿はずらりと横隊に並び、お猿は木の上に攀ぢ登つて、ざ、ざ、ざ、と枝を搖ぶり、猪は鼻の尖で土を吹き飛ばし、狼は大きな口を開けて牙を見せました。

さア大變な事が起つたと思つたさぼり村の泥棒隊は、みんな青くなつてぶるぶると顫へてゐました。

すると爺さんは紀伊の守に合圖をしました。合點合點をした紀伊の守は、「五音の笛」を吹きながら山を降りると、鹿もお猿も猪も狼も、みんなぞろぞろと列を揃へて其の後について行きました。けれども狼は圓形になつて五百七十人の泥棒隊の前をクンクンと鼻を鳴らしながら一通り嗅ぎ巡りました。それを見た婆アさんは小首を傾げて感心しながら、

『さア、あなた方五百七十人は、もう何処へ逃げても駄目です。これから村へ歸つて、明日の朝約束の時間までに、私共の村へ入らつしやらないなら、すぐあの狼が迎へに行きますから……今、あなた方の前を鼻をクンクン鳴らしながら通つたのは、一々あなた方の臭ひを嗅ぎ廻つたのでした。』と申しました。

泥棒隊の五百七十人は、みんな地の上に頭を擂りつけて、

『私共は本當に悪うございました。自分の村に食物が無くなつたと云つて、あなた方の村へ麥や米を奪りに來た罪は、どうぞお赦し下さいまし。其の代りこれから後一所懸命に働いて勉强して遊んで寝て、名の無い人になりますから。』と申しました。爺さんはにこにこ笑ひながら、

『宜しい、宜しい、そんなに頭を下ると頭痛病みになりますから、もう叩頭はお止し。なアに私の村へ攻寄せて來たのは、あなた方ばかりぢやアありませんよ。』と云ひました。

『まあ？　私共の外に、新しい村へ攻めて來た兵隊がありましたか。』と隊長は訊きました。

『あつたあつた、何千人だか知れない大軍だつたよ。』

『えッ？　それは何村の兵隊でしたか。』
『それはネ。隣村の鼠だつたよ。』
『えッ？　鼠でしたか。』
『さうよ。鼠が何千疋も來たのだが、みんな猫に追つ拂はれたよ。』
『鼠は猫に、私共は狼に……』
『さうださうだ、あなた方が今少しく暴れたら、猿に引つ掻かれて、豬に吹飛ばされて、狼に咬殺される所だつた。まあまあ怪我が無くてよかつた。さあ、これで失禮致します。ては明日の朝から私達の村へ入らつしやいまし。仲よく暮しませう。』
『有難う存じます。どうか宜しく……』
泥棒隊の兵隊さんは、もうみんな正直な心になつて爺さんにお禮を申しました。て、爺さんも婆アさんも、百姓達もさぼり村の人達に別れて新しい村へ歸りました。
さて、その翌日の朝、さぼり村の人たち二千八百五十人はみんな荷物を擔いで、ぞろぞろと新しい山六爺さんの村へ來ましたが、お土產にさぼり村のなまけ犬を五百疋伴れて來ました。
爺さんも婆アさんも大將もみんなで、さぼり村の人達を歡迎する爲に、こじき座でその歡迎會を致しました。そして餘興に、山六學校の別科である（けだもの科）の仔供達を舞臺につれて來ました。
一段高い所に登つた「黑」の吠える號令のまゝに、可愛い小鬼が走る、小猿が木登の眞似をする、小豬が鼻を鳴らす、小狼が小い白い牙を見せる、それはそれは面白い餘興でした。

さぼり村の大隊長は、面白いので一所懸命に見てゐましたが、不圖思ひ出したやうに起ち上つて、『私共は今日から、此の村のお仲間へ入れて戴きました。それでお土產に私共の村の名產であるなまけ犬を五百疋伴れて參りましたから、どうぞお受取下さいまし。』と申しました。
怠け者の一人も無い此村へ、なまけ犬五百疋も伴れて來たといふので、みんなは吃驚して大隊長の顏を見ました。大隊長は、こじき座の外に對つて、ひゆーひゆーと口笛を吹きますと、それはそれは美しい眞白い犬が五百疋、綺麗な尾を掉りながら、勢よく駈け込んで來ました。
それを見た「黑」は、舞臺の前の方に出て來て、ウー……ワン、ワン、と吠えました。すると五百疋のなまけ犬はみんな一齊に眼を閉ぢて、こくりこくりと坐睡りを初めました。
可笑しい犬だなあと思つた山六爺さんは、大きな聲で、
『もうしもうし大隊長さん、其の犬は何故、そんなに坐睡るのですか。』と訊きますと、大隊長はにこにこ笑ひながら、
『私共の村の犬は、人間が働いてゐる時は、みんなこくりこくりと居睡つてばかりゐます。其の代り人間が居睡つたり、寢たりすると此の犬はみんな元氣よく駈廻ります。』と申しましたので、爺さんは、
『では皆さん、我々は暫く眠つてみようぢやありませんか。』と言ひました。
『眠りませう眠りませう。』と言つてみんなが、劇場の中で、ぐうぐういびきをかいて眠りますと、五百疋のなまけ犬は村中を、ぐるぐる駈け廻つて、大變な元氣で、ワンワンと吠えました。
暫くして爺さんは眼を覺しました。そしてみんなを呼起しますと、舞

臺の上に居た「黒」が居ません。

『「黒」さんは何所へ行つたらう？』と云つて口笛を吹きながら、爺さんを初めみんなが、あちらこちらを尋ねましたが、何所にも其姿が見えません。「黒」だけが姿を隠したのだと思つてゐると、さうではありませんでした。元の總大將軍の狼殿御夫婦と、山六爺さん婆アさんの、お馬の代理を永らく勤めた二疋の鹿も車を曳いた猪も、其所らあたりに姿を見せませんでした。

きア大變な事が起つたといふので、其の翌日から村中の人はみんな仕事も勉强も休んで、州の底をたゝきながら、

『「黒」さんやーい、狼殿やーい、迷ひ兒の迷ひ兒の鹿さんやーい、猪どのやーい。』と呼び續けて、谷底から峰の上から野の果まで殘る隈なく尋ねました。爺さんと婆アさんとは家に閉ぢ籠つて、一心に神樣を念じながら、泣いてゐました。

ところが十日目の正午頃、佐渡の守さ右衛門が走つて來て、『大變です、大變です、「黒」さんも狼殿も鹿さんもみんな池の傍のあの車の上で化石になつてゐます。』と申しました。爺さんは、

『え？　化石に？……』と云つて泣出しましたので、婆アさんは、

『爺さん爺さん。確りしてゐて下さい。「黒」は石になつても、あなたは石にならないで下さい……』と言ひました。其の時表の方で、なまけ犬が五百疋、聲を揃へてオウーン、オウーンと悲しさうに鳴き始めました。

爺さん婆アさんは、泣いて居たつて致樣がないので、池の傍へ行つて見ますと、其所にある、お祭

りの時に使つた車の上に、「黒」と二疋の狼夫婦と二疋の猪と二疋の鹿と合せて七疋の獸が、ちやんと前足を揃へたまま石のやうに冷たく固くなつて立つてゐるのでした。

『あアあア皆さん、あなた方はもう石になつてしまつたのですか。』と言つて爺さんが泣き出した時、右大將が其所へ來て、

『爺さん、婆アさん、もう泣くのはお止し、「黒」さんを始め、皆さんが石になつたのは目出度いのです。』と言ひました。すると爺さんは、

『何？「黒」が化石になつたのは目出度いのだつて？　そんな事があるものですか。』と少し腹を立てたやうに申しました。

右大將は靜に手を振つて、爺さんをなだめながら、

『爺さん、もう此村に居る人達は、犬や狼の力を借りないでも、人間自身の力で仲よく暮して行く事が出來るやうになつたのです。だから「黒」さんも狼さんも、鹿さんも石になつてしまつたのですよ。』と申しました。

『成程さうですか、わかりました。』と爺さんが言ひました時、紀伊の守さ右衛門が息せき駈け込んで來て、

『大變です、大變です。「五音の笛」が鳴らなくなりました。如何いたしませう？』と申しました。

總大將軍は暫く考へてゐましたが、

『しかし、それは一時間後に、きつと別の音が出ませう。』と申しました。で、紀伊の守は「五音の笛」

を取り出して、今一度吹いて見ますと、今度はら・ら、り・り、る・る、れ・れ、ろ・ろ……と鳴りました。

『らりるれろと鳴つたなら、何が集つて來るのですか。』と婆アさんは訊きましたが、總大將はにこ〳〵笑つてゐるばかりで、何とも言ひませんでした。そこで紀伊の守と爺さんと婆アさんは、山の上に登つて交る〴〵「五音の笛」を吹いて見ましたが、何にも集つて來ませんでした。

『不思議だ、不思議だ』と言つて家へ歸つて見ますと、爺さんの机の上に一通の手紙を載せてありました。

披いて見ますと、中には立派な文字で、

さやうなら、皆さん。どうぞ仲よくお暮しなさい。私共は又元のおこもさんになつて、遠い〳〵國へ行つて、其所の人達を貧くしてあげます。

私共が居なくなつたあとで、皆さんのうちに喧嘩でも起つて、本當にお困りになるやうな事がありましたなら、其時はも一度「五音の笛」をお吹き下さい。さうしたらまた私共がお助けに參りますから。

と書いてありました。けれども其後山六村の人達はみんな仲よくして居るので、まだその「五音の笛」を吹く時が參りません。恐らくこれは何萬年經つても鳴らす機は來ないでせう。

其後世界中の人類學者が、此の三人の偉い〳〵乞食のやうな人の研究をしてゐますが、今だに其の素性がわかりません。或學者はお釋迦さまと、基督さまと、孔子さまだらう？　と申してゐるやうでございます。或はさうかも知れません。

なが〳〵とお話を致しました。さやうなら。

本居長世先生作曲

新民謡

各編一冊金卅錢
送料金四錢

(1)三木露風先生作歌 さすらひの風の歌	(5)古謡 關の夕されの
(2)伊藤小四郎先生作歌 夕潮	(6)(近刊) 白月
(3)野口雨情先生作歌 別後	(7)(近刊) 咲いた櫻
(4)野口雨情先生作歌 豐作歌	(8)(近刊) 砧の音

これはわが國作曲家の權威本居長生先生がその多年の蘊蓄を傾倒して力作したる民謡曲の中その最も快心の作であります。

童話唱歌

各編一冊金二十錢
送料金二錢

(1)はだか蟲	(3)青い鳥
(2)牧場の兎	(4)鋤と鍬
(5)茶目子の一日	(6)毬ちやんの繪本

これは童話、童謡を骨子としてそれに清新なる歌曲、對話を加へた最も新らしい歌謡であります。

樂譜の知識（本譜早わかり）一冊金五十錢 送料金二錢

ヴアイオリン曲粹 第一編 各編一冊五十錢 第二篇 送料金四錢

マンドリン曲粹 第一編 第二編 各編一冊金五十錢 送料金四錢

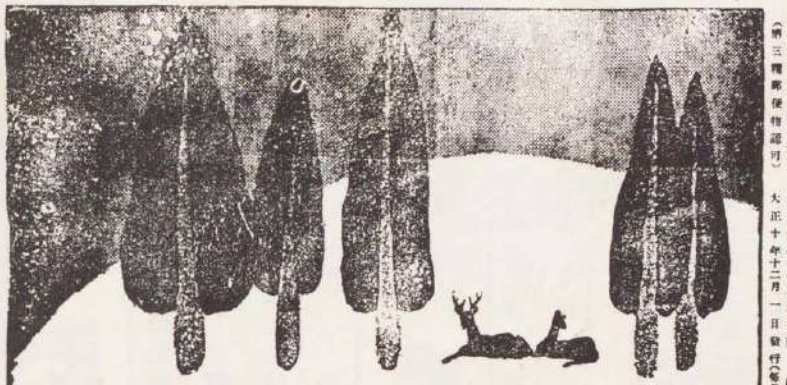
ハーモニカ速成 一冊金卅五錢 送料金二錢

東京市芝區田町一丁目十二番地
白眉出版社販賣部
岸本書店
振替口座東京五四五九八番

K2A-19

第三卷　金の船　第十二號

大正八年十月十六日　大正十年十一月六日印刷
（第三種郵便物認可）　大正十年十二月一日發行（毎月一回一日發行）



◆寒さの御用意

冬の御支度をなさらなければなりませんが小兒部は三階にありまして帽子、外套、洋服、靴、スエーター、手袋、シャツ、靴下、襟卷、股引など殘らず取揃へてあります。四階の圖書部には雜誌やお伽噺や其他の書籍種々あり、すぐ隣りに學校用具が色々御座います

東京市　駿河町

三越呉服店

◆三越の定休日◆十二月十日◆十二月二十六日

（定價參拾錢）

東京　キンノツノ社　發行